

人口問題研究所
研究資料第 147 号
昭和 37 年 3 月 10 日

Institute of Population Problems
Research Series, No. 147
March 10, 1962

貸
出
用

都市労働力人口の食慣習構造

—昭和35年度実地調査分析の一部—

SOCIOECONOMIC CHARACTERISTICS OF DIETETIC
CUSTOM AMONG URBAN WORKERS—PART OF THE
RESULTS OF THE 1960 FIELD SURVEY ON
POPULATION PRESSURE—

厚生省人口問題研究所

INSTITUTE OF POPULATION PROBLEMS
MINISTRY OF HEALTH AND WELFARE
JAPAN

正 誤 表

ページ	行	誤	正
5	12~13	………; 両者 <u>合計</u> で………	… , 両者 <u>合計</u> で………
10	下から12	………; 新制 <u>高校卒</u> ………	… , 新制 <u>高校卒</u> ………
"	" 4	様な高水準を示しており、 (この間脱落)両者………	… 示しており、 <u>両者合計の粉食の割合は20%に近い高率を示している。</u> しかし、 <u>製造業従業者</u> においては、両者………
14	3	………; <u>圧倒者</u> に若い………	………; <u>圧倒的に</u> 若い………
22	8	ということで、 <u>あり</u> 、………	ということで <u>あり</u> 、………
27	下から3	る。各地域ともに(この間脱落)減少すると………	… ともに <u>所得の低い世帯ほど希望率が高く、所得の上昇とともに減少</u> ………
39	10	………; <u>失職</u>	………; <u>失業</u>
"	18	38. とろこんぶ	38. とろ <u>ろ</u> こんぶ
40	下から1	……… と減少し、る。…	……… と減少している。…
41	8	造従業者と ……	<u>造業従業者</u> と………
52	下から12	もの <u>とと</u> 、………	もの <u>と</u> 、………
60	" 8	………; 1種 <u>種類</u> の………	………; 1種 <u>類</u> の………
66	" 12	………; 年齢階給別に………	………; 年齢階級別に………
68	1	………を示しているのに…	………を示しているに ……
86	10~11	…、かなりの地域差が見られる <u>かなりの地域差が見られる。</u> ………	…、かなりの地域差が見られる。(重複している)
89	下から4	…、これらの <u>階層</u> に………	…、これらの <u>階層</u> に………
93	16	… ありえな <u>かつれ</u> 。	… ありえな <u>かつた</u> 。
103	12	特に <u>相関関係</u> 数の………	特に <u>相関係数</u> の………

序 文

本資料は、昭和35年度において当研究所が実施した実地調査「人口圧迫の集積形態に関する調査」における「食」に関する調査事項を集計し、その結果を分析したものである。

低所得階層における食慣習は、特に人口の社会的、経済的、文化的側面を真に表現する総合的 behavior として、人口学的研究の重要な対象であるとともに、人口の質に影響する基本問題でもある。従来この分野における研究が少ないと思われるため、この方面の資料として役だちうれば幸いである。

この報告は、研究部第3科厚生技官内野澄子の担当執筆によるものである。

昭和37年3月10日

厚生省人口問題研究所長

館

徐

FOREWARD

This monograph has been prepared by Miss Sumiko UCHINO, Third Section, First Research Division of our Institute.

This is an analysis of the dietetic custom of urban workers mainly characterized by low income, which pertains to the 1960 field survey on population pressure conducted by our Institute.

Dietetic custom and its structure among low income class are not only very important subject as basic behavior of population, but also serious problems influencing population quality.

We are very happy if this analysis, of course, though not sufficient in analysis and also not comprehensive in terms of limited samples, should contribute to understanding in this area of population study.

March 10, 1962.

Minoru TACHI, Director
Institute of Population Problems
Ministry of Health and Welfare
Japan.

目 次

はしがき

I	主食摂取状況の社会階層別、地域別観察	5
1.	主食の種類別分布	5
2.	朝・昼・夕の食における主食形態の分布	14
3.	主食組み合わせ形態別分布	23
II	主食依存傾向について	25
1.	社会階層別、地域別米食依存傾向	25
2.	所得および年齢別に見た米食依存傾向	28
III	社会階層別、地域別調理構造について	39
1.	料理種類数について	39
2.	社会階層別、地域別、調理方法別分布	41
IV	みそ汁摂取傾向について	43
1.	社会階層別、地域別に見たみそ汁摂取状況	43
2.	みそ汁の「み」について	56
3.	みそ汁のだしについて	61
V	外食状況について	63
1.	社会階層別、地域別外食状況	63
2.	朝・昼・夕の食から見た外食状況	77
VI	飲酒状況について	86
	結 語	89
	付 録	
	「オランダの家計調査における栄養素間の相関に関する研究」 の紹介	94

CONTENTS

	Page
Preface.....	1
I. Difference in kinds of staple food by social strata and regions.....	5
1. Frequency of taking various kinds of staple food.....	5
2. Staple foods taken for breakfast, lunch and supper.....	14
3. Combinations of staple food taken.....	23
II. On the tendency of dependence on rice diet.....	25
1. Analysis by social strata and regions.....	25
2. Analysis by levels of income and age groups.....	28
III. Ways of cooking of various foods by social strata and regions.....	39
1. Kinds of dishes.....	39
2. Analysis of ways of cooking by social strata and regions.....	41
IV. On the tendency of taking 'miso' soup.....	43
1. Analysis by social strata and regions.....	43
2. 'Mi' (subsidiary articles put in) for 'miso' soup.....	56
3. 'Dashi' (stock) for 'miso' soup.....	61
V. On dining out.....	63
1. Analysis by social strata and regions.....	63
2. Dining out for breakfast, lunch and supper.....	77
VI. On drinking.....	80
Conclusion.....	89
 Appendix	
A brief introduction to "The Intercorrelations between the Nutrients consumed by a Group of Families in the Netherlands" by E.F. Drion.....	91

は し が き

本調査は昭和36年1月から2月にかけて、実施した昭和35年度の人口圧迫の集積形態に関する調査(調査対象約20,000)のうち、都市在住の低所得層(調査対象約6,000)についての食物摂取状況に関する集計結果の一部についての分析である。

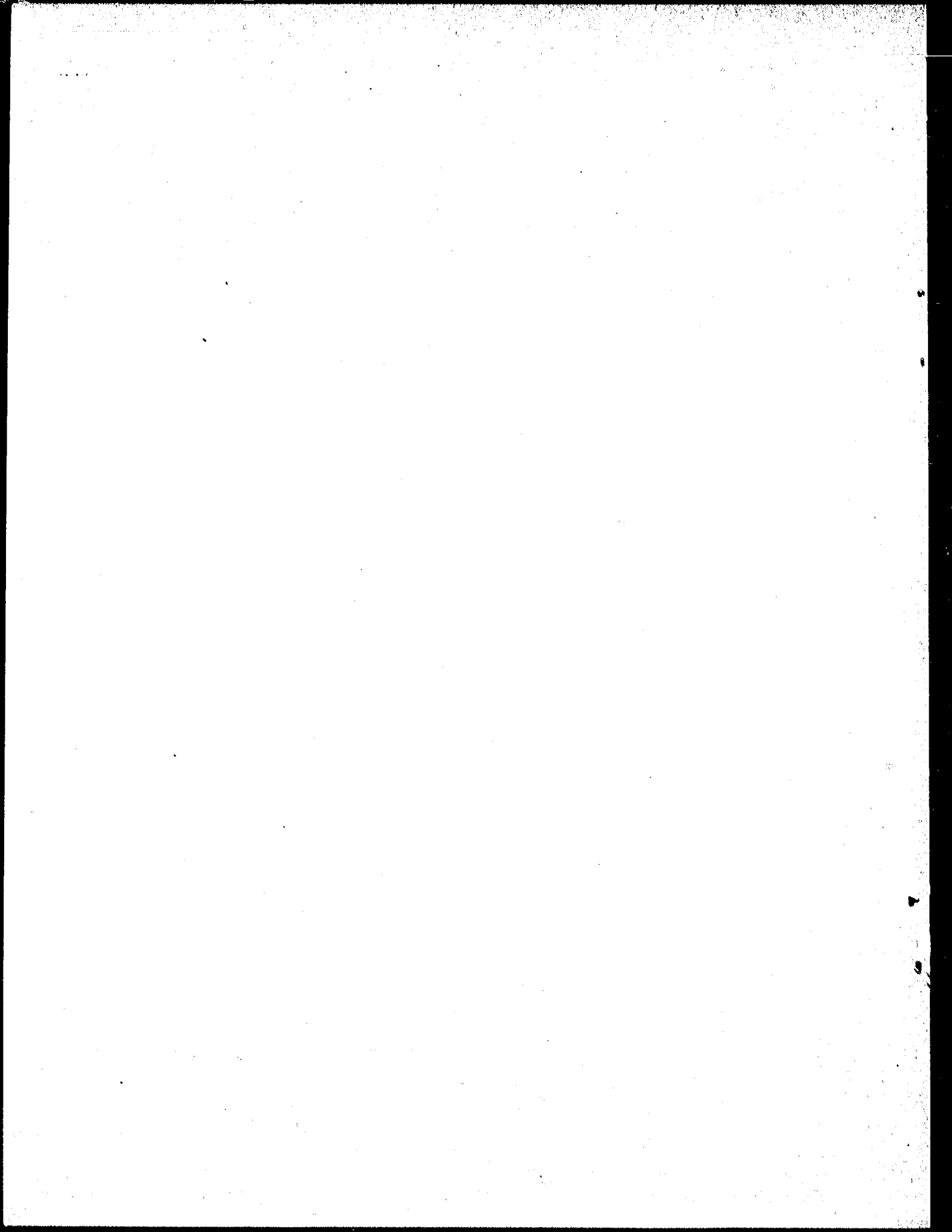
調査対象は小規模の製造業従業者、失業保険受給者、日雇い労働者の男子である。選定地域は、東京、名古屋、山形、金沢、広島、および長崎の6都市である。集計にあたっては、この地域を大きく三つに分けた。すなわち、大都市として、東京、名古屋、中都市(イ)として山形、金沢、中都市(ロ)として広島、長崎、と分類した。

このように調査対象は、都市在住の特定男子労働力人口であること、また地域的にも限定されているため、その結果は全国を代表するものでないことは言うまでもない。また本食物摂取調査は、厚生省で例年実施されている栄養調査とは全く異なつた調査様式である。したがつてこの調査においては献立、食事形態とか調理種類別というような栄養を取り巻く外形的条件であつて、換言すれば社会的、文化的、経済的条件に深く結びついたものについての調査である。

この調査結果が全国を代表するものでないということは前に述べたが、しかし、食糧消費階級としては特に典型的な社会階層を代表しているものと思われる。したがつて本調査対象の食物摂取状況は、都市の一般的食生活慣習の傾向を示唆するものであると冨つても大過ないであろう。

表 1 職業形態別、地域別年齢構成

年齢階級	製造業従業者		失業保険受給者		日雇い労働者		
	大都市	中都市(同)	大都市	中都市(同)	大都市	中都市(同)	
	東京、名古屋	山形、金沢	東京、名古屋	山形、金沢	東京、名古屋	山形、金沢	
0~14	3	-	-	-	-	-	
15~29	1,608	381	260	60	19	4	
30~44	550	367	276	68	91	40	
45~59	313	183	278	75	88	42	
60~69	83	31	149	32	23	13	
70~79	8	1	28	6	5	1	
80歳以上	-	-	-	-	-	-	
不詳	7	-	-	-	-	-	
計	2,572	963	991	241	226	100	
			割合(%)				
0~14	0.1	-	-	-	-	-	
15~29	62.5	39.6	26.2	24.9	8.4	4.0	
30~44	21.4	38.1	27.9	28.2	40.3	40.0	
45~59	12.2	19.0	28.2	31.1	38.9	42.0	
60~69	3.2	3.2	14.9	13.3	10.2	13.0	
70~79	0.3	0.1	2.8	2.5	2.2	1.0	
80歳以上	-	-	-	-	-	-	
不詳	0.3	-	-	-	-	-	
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	



I 主食摂取状況の社会階層別、地域別観察

1. 主食の種類別分布

一日3回の食事における主食構成を、1)米飯、2)めん類、3)パン類、4)2種類以上の組み合わせ(米飯+めん類、または米飯+パン類)、5)不詳、と区分し、その延べ回数についての分布状況を概観してみた。ここにおいて不詳として扱われたものは、大都市が最も多く3.5%、中都市では1.3%ないし4%であり、全体としてもそれほど大きくないため、観察対象の分布に対する影響はさほど大きくないと思われる。

主食の種類において圧倒的な割合を占めているものは、言うまでもなく米飯であつて、地域、職業別に見ても80%ないし90%を占めている。次いで高い割合を示しているものはめん類とパン類であり、両者合計で9%ないし15%を占めている。また、2種類以上の組み合わせに

表3 地域別主食摂取状況分布

主食の種類	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
	東京・名古屋	山形・金沢	広島・長崎
	実 数		
米 飯	9,100	3,485	2,089
麵 類	725	230	100
パ ン 類	930	113	135
2種類以上	213	28	63
不 詳	399	56	30
計	11,367	3,912	2,415
	割 合 (%)		
米 飯	80.1	89.1	86.4
麵 類	6.4	5.9	4.1
パ ン 類	8.2	2.9	5.5
2種類以上	1.9	0.7	2.6
不 詳	3.5	1.4	1.3
計	100.0	100.0	100.0

注：食事延べ回数100についての分布（1日調査）

よるものは最も少なく、最低0.7%、最高2.6%であり、平均して1.7%見当である。しかし、それぞれの割合は地域、職業によつて異なっており、いずれか一方的に高い割合を占めているわけではない。

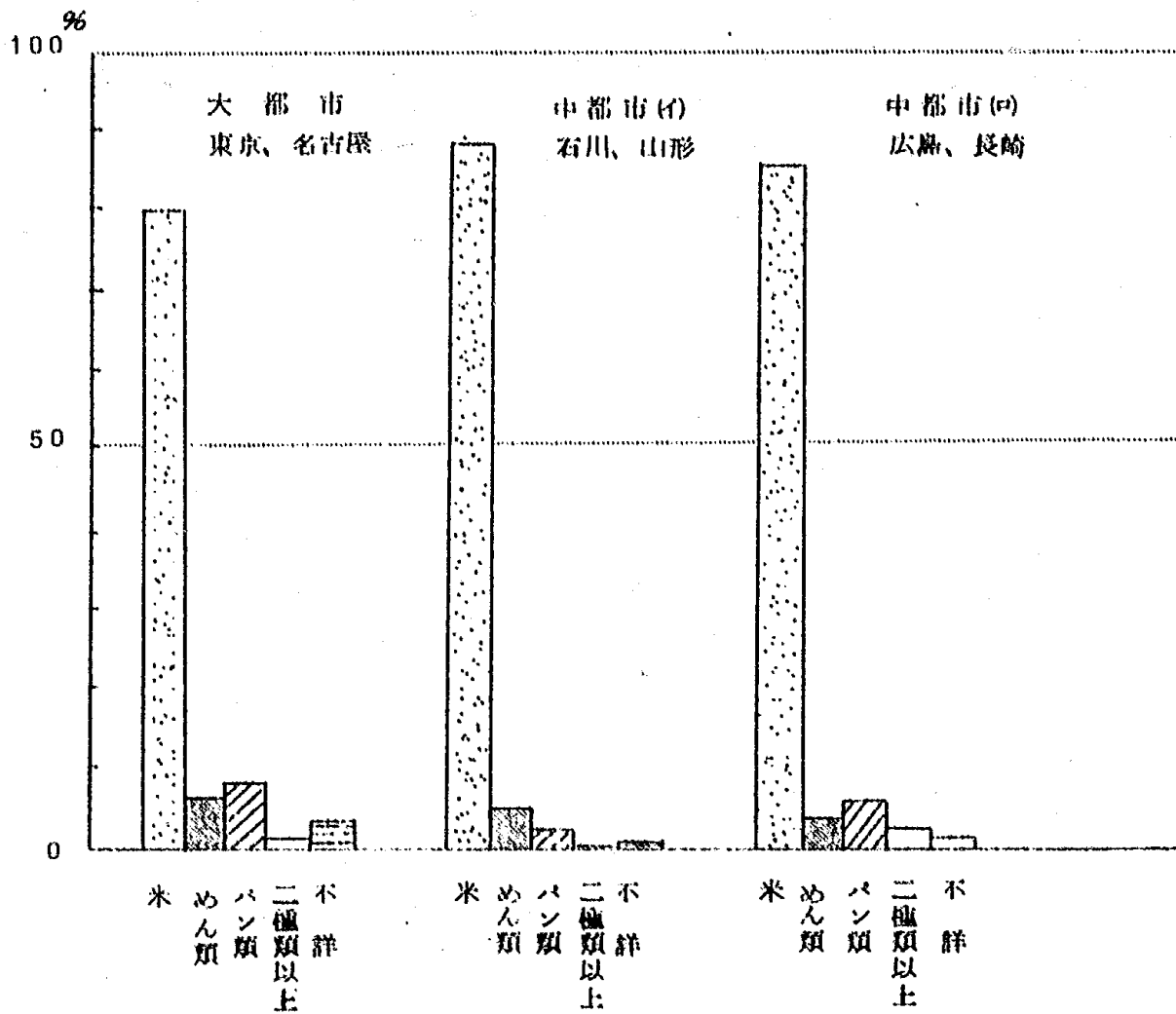
表4. 職業形態別主食摂取状況分布

主食の種類	製造業 従業者	失業保険 受給者	日雇い労働者
実 数			
米 飯	10,108	3,486	1,078
麵 類	493	452	110
パ ン 類	672	445	59
2種類以上	219	172	13
不 詳	328	141	18
計	11,820	4,596	1,278
割 合 (%)			
米 飯	85.5	75.8	84.4
麵 類	4.2	9.8	8.6
パ ン 類	5.7	9.7	4.6
2種類以上	1.9	1.6	1.0
不 詳	2.7	3.1	1.4
計	100.0	100.0	100.0

注：食事係べ回数100についての分布（1日調査）

主食区分における米飯の摂取傾向を見ると、次のごときことが言える。米飯摂取の割合は大都市の86%、中都市の86.4%ないし89%で、大都市と中都市を比較してみると8~11%も大都市が低率を示しているのである。これは製造業従業者、失業保険受給者、日雇い労働者といった職業形態別においても、同様に大都市が最低率を示していることがわかる。

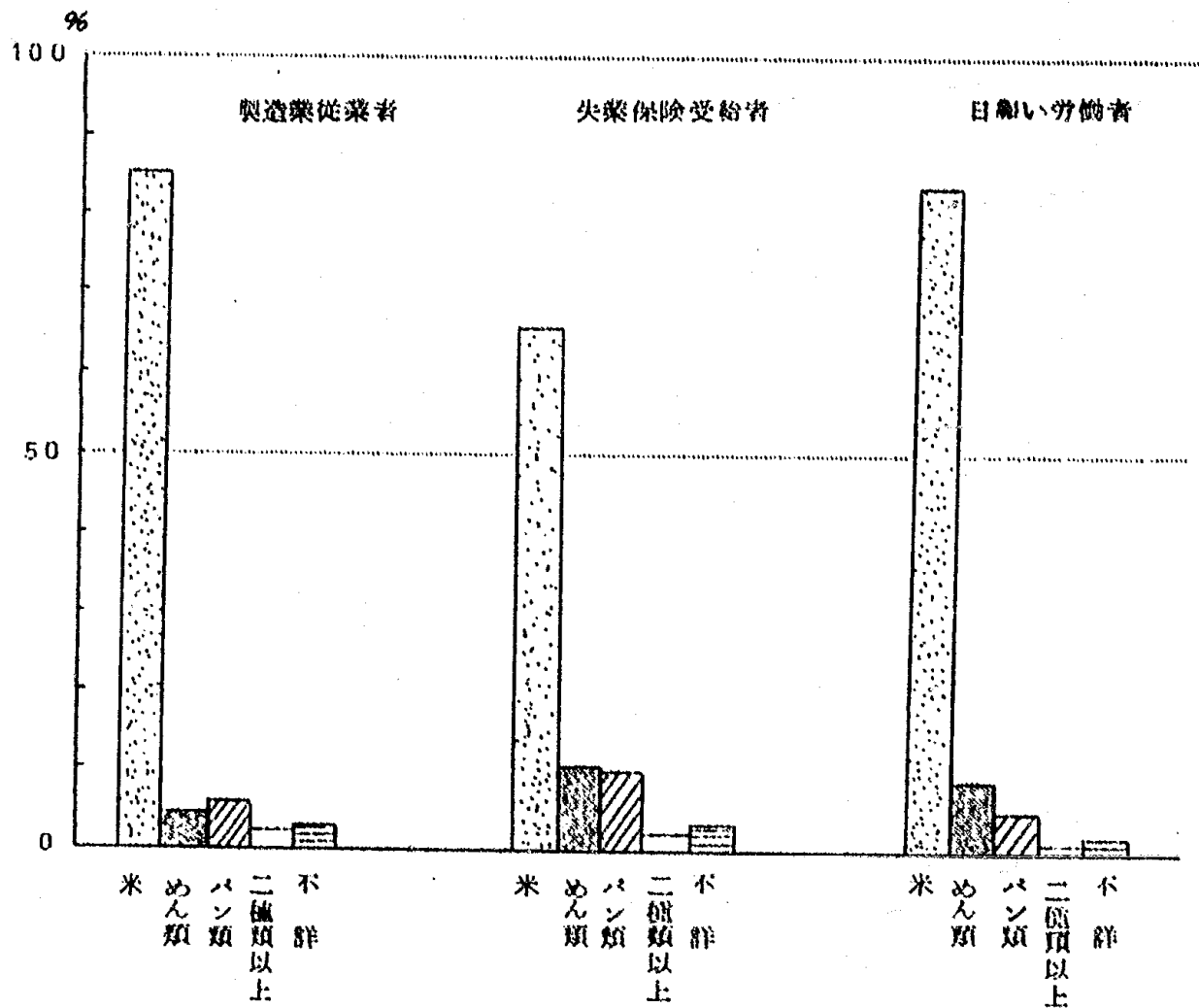
図1. 地域別主食摂取率



次にパン類、めん類の摂取状況を見ると、大都市において圧倒的に高くなっている。両者合計は、大都市の14.6%に対して中都市(イ)では、8.8ないし9.6%である。かつ大都市では、パン類の摂取回数がめん類のそれよりも高く8.2%を示しているのに対し、寒冷地帯の中都市(イ)ではわずかる%であり、関西型の中都市(ロ)では、大都市と同様にパン類がめん類よりも高率であるが、それでも5.5%にとどまっている。

次に職業形態別に主食摂取状況を観察する。米飯摂取の割合は、製造

図2. 職業形態別主食摂取率



業従業者の間において最も高く、失業保険受給者において最低を示し、日雇い労働者では、製造業従業者に近い水準を示している。

失業保険受給者において米飯摂取率が最も低いということは、次に述べるごとく、めん類、パン類の粉食形態による主食摂取率が高いことを物語っているが、このような傾向は、この社会階級の知的水準に深い関係があるように思われる。たとえば、教育水準別に見ると、13年以上の高等教育を受けたものの割合は製造業の3.4%、日雇い労働者の4.8

表5 職業形態別、地域別主食摂取状況分布

主食の種類	製造業従業者			失業保険受給者			日雇い労働者			
	大田市	山形、石川	長崎	大田市	山形、石川	広島、長崎	大田市	山形、石川	広島、長崎	
米	6,392	2,627	1,089	2,160	602	724	548	256	274	
めん類	346	121	26	311	76	65	68	33	9	
パン類	534	80	58	358	24	63	38	9	12	
2種類以上	163	21	35	40	7	25	10	-	3	
不詳	281	40	7	104	14	23	14	2	2	
計	7,716	2,889	1,215	2,973	723	900	678	300	500	
					割合(%)					
米	82.8	90.9	89.6	72.7	83.3	80.4	80.8	85.3	91.3	
めん類	4.5	4.2	2.1	10.5	10.5	7.2	10.0	11.0	2.9	
パン類	6.9	2.8	4.8	12.0	3.3	7.0	5.6	3.0	4.0	
2種類以上	2.1	0.7	2.9	1.3	1.1	2.8	1.5	-	1.0	
不詳	3.6	1.4	0.6	3.5	1.9	2.6	2.1	0.7	0.7	
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	

表6 職業形態別、教育程度別分布

教育程度(年数)	製造業従業者	失業保険受給者	日雇い労働者
	実 数		
6年	658	318	170
7~9	2,149	492	159
10~12	962	525	91
13年以上	132	189	22
不詳	32	8	18
計	3,933	1,532	460
	割合(%)		
6年	16.7	20.7	36.9
7~9	54.6	32.1	34.6
10~12	24.4	34.3	19.8
13年以上	3.4	12.3	4.8
不詳	0.9	0.5	3.9
計	100.0	100.0	100.0

%に対して、失業保険受給者では、12.3%と著しく高くなっている。また、旧制中学ないし、新制高校率にあたる教育年限10~12年についても、製造業従業者の24.4%、日雇い労働者の19.8%に対して、失業保険受給者は34.3%であつて圧倒的に高い割合を示しているのである。

したがつて、都市の失業保険受給者の主食摂取形態は、この面における都市の一般的性格なり、傾向を示唆しているように思われる。

次に粉食の傾向についてみると、粉食の割合は失業保険受給者の階層において最も高く、製造業従業者において最も低いのである。

失業保険受給者のめん類、パン類の摂取率は、それぞれ10%という同様な高水準を示しており、両者合計約10%で、失業保険受給者のその半分にすぎないのである。日雇い労働者では、両者合計で約13%を示しており、製造業従業者の場合より多少高率となつている。

この場合注目すべきことは、製造業従業者では、パン類の摂取率は、め

表7 職業形態別、地域別、年齢別主食摂取状況分布
(1) 製造業従業者

主食の種類	15~29	30~44	45~59	60~69	70歳以上	年齢不詳	計
実数							
大都市(東京、名古屋)							
米飯	3,957	1,381	811	211	20	12	6,392
めん類	197	91	42	13	2	1	346
パン類	568	103	53	11	2	2	534
2種類以上	102	35	22	4	-	-	163
不詳	205	40	11	10	-	6	272
計	4,828	1,650	939	249	24	21	7,707
中都市(山形、金沢)							
米飯	1,030	1,019	496	80	2	-	2,627
めん類	50	45	22	3	1	-	121
パン類	26	24	25	5	-	-	80
2種類以上	13	5	3	-	-	-	21
不詳	24	8	3	5	-	-	40
計	1,143	1,101	549	93	3	-	2,889
中都市(長崎)							
米飯	409	439	201	40	-	-	1,089
めん類	8	5	11	11	-	-	26
パン類	24	21	11	2	-	-	58
2種類以上	14	11	10	-	-	-	35
不詳	1	4	1	1	-	-	7
計	456	480	234	45	-	-	1,215

割合(%)

大都市(東京、名古屋)							
米飯	82.0	83.7	86.4	84.7	83.3	57.1	82.9
めん類	4.1	5.5	4.5	5.2	8.3	4.8	4.5
パン類	7.5	6.2	5.6	4.4	8.3	9.5	6.9
2種類以上	2.1	2.1	2.3	1.6	-	-	2.1
不詳	4.2	2.4	1.2	4.0	-	28.6	3.5
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
中都市(山形、金沢)							
米飯	90.1	92.6	90.3	86.0	66.7	-	90.9
めん類	4.4	4.1	4.0	3.2	33.1	-	4.2
パン類	2.3	2.2	4.6	5.4	-	-	2.8
2種類以上	1.1	0.5	0.5	-	-	-	0.7
不詳	2.1	0.7	0.5	5.4	-	-	1.4
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	-	100.0
中都市(長崎)							
米飯	89.7	91.5	85.9	88.9	-	-	89.6
めん類	1.8	1.0	4.7	4.4	-	-	2.1
パン類	5.3	4.4	4.7	-	-	-	4.8
2種類以上	3.1	2.3	4.3	-	-	-	2.9
不詳	0.2	0.8	0.4	2.2	-	-	0.6
計	100.0	100.0	100.0	100.0	-	-	100.0

表7 (つづき)

(2) 失業保険受給者

主食の種類	15~29	30~44	45~59	60~69	70歳以上	年齢不詳	計
実 数							
大都市 (東京、名古屋)							
米 飯	535	586	637	342	60	-	2,160
めん類	71	102	96	32	10	-	31
パン類	115	101	81	52	9	-	358
2種類以上	9	11	11	9	-	-	40
不詳	50	28	14	8	4	-	104
計	780	828	839	443	83	-	2,973
中都市 (山形、金沢)							
米 飯	149	174	191	74	14	-	602
めん類	20	24	22	10	-	-	76
パン類	8	2	5	8	1	-	24
2種類以上	1	1	2	3	-	-	7
不詳	2	3	5	1	3	-	14
計	180	204	225	96	18	-	723
中都市 (広島、長崎)							
米 飯	56	250	358	57	3	-	724
めん類	4	26	31	4	-	-	65
パン類	12	22	21	8	-	-	63
2種類以上	2	8	15	-	-	-	25
不詳	1	9	10	3	-	-	23
計	75	315	435	72	3	-	900
割合 (%)							
大都市 (東京、名古屋)							
米 飯	68.6	70.8	75.9	77.2	72.3	-	72.7
めん類	9.1	12.3	11.4	7.2	12.0	-	10.5
パン類	14.7	12.2	9.7	11.7	10.9	-	12.0
2種類以上	1.2	1.3	1.3	2.0	-	-	1.3
不詳	6.4	3.4	1.7	1.8	4.8	-	3.5
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	-	100.0
中都市 (山形、金沢)							
米 飯	82.8	85.3	84.9	77.1	77.8	-	83.3
めん類	11.1	11.8	9.8	10.4	-	-	10.5
パン類	4.4	1.0	2.2	8.3	5.6	-	3.3
2種類以上	0.6	0.5	0.9	3.1	-	-	1.1
不詳	1.1	1.5	2.2	1.0	16.7	-	1.9
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	-	100.0
中都市 (広島、長崎)							
米 飯	74.7	79.4	82.3	79.2	100.0	-	80.4
めん類	5.3	8.3	7.1	5.6	-	-	7.2
パン類	16.0	7.0	4.8	11.1	-	-	7.0
2種類以上	2.7	2.5	3.4	-	-	-	2.8
不詳	1.3	2.9	2.3	4.1	-	-	2.6
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	-	100.0

表7 (つづき)

(3) 日雇い労働者

主食の種類	15~29	30~44	45~59	60~69	70歳以上	年齢不詳	計
実 数							
大都市 (東京、名古屋)							
米 飯	49	211	219	55	14	-	548
めん類	2	32	22	11	1	-	68
パン類	-	18	18	2	-	-	38
2種類以上	3	4	3	-	-	-	10
不詳	3	8	2	1	-	-	14
計	57	273	264	69	15	-	678
中都市 (山形、金沢)							
米 飯	11	101	109	32	3	-	256
めん類	1	15	12	5	-	-	33
パン類	-	4	4	1	-	-	9
2種類以上	-	-	-	-	-	-	-
不詳	-	-	1	1	-	-	2
計	12	120	126	39	3	-	300
中都市 (広島、長崎)							
米 飯	-	49	114	99	12	-	274
めん類	-	3	4	2	-	-	9
パン類	-	4	5	3	-	-	12
2種類以上	-	1	-	2	-	-	3
不詳	-	-	-	2	-	-	2
計	-	57	123	108	12	-	300

割合 (%)

大都市 (東京、名古屋)							
米 飯	86.0	77.2	83.0	79.7	93.3	-	80.8
めん類	3.5	11.7	8.3	15.9	6.7	-	10.0
パン類	-	6.6	6.8	2.9	-	-	5.6
2種類以上	5.3	1.5	1.1	-	-	-	1.5
不詳	5.3	2.9	0.8	1.4	-	-	2.1
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	-	100.0
中都市 (山形、金沢)							
米 飯	91.7	84.2	86.5	82.1	100.0	-	85.3
めん類	8.3	12.5	9.5	12.8	-	-	11.0
パン類	-	3.3	3.2	2.6	-	-	3.0
2種類以上	-	-	-	-	-	-	-
不詳	-	-	0.8	2.6	-	-	0.7
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	-	100.0
中都市 (広島、長崎)							
米 飯	-	86.0	92.7	91.7	100.0	-	91.3
めん類	-	5.3	3.3	1.9	-	-	2.9
パン類	-	7.0	4.1	2.8	-	-	4.0
2種類以上	-	1.8	-	1.9	-	-	1.0
不詳	-	-	-	1.9	-	-	0.7
計	-	100.0	100.0	100.0	100.0	-	100.0

ん類のそれよりも高いにもかかわらず、日雇い労働者では、めん類の方が著しく高率になつてきていることである。この場合考慮を要する点は、これらの3階層の年齢構成である。製造業従業者では、圧倒者に若い年齢層が多い(15~29歳のものが54.3%)ということがめん類よりもパン類摂取の割合を多少とも高くしていると思われる。日雇い労働者の場合では、高年齢のものが多く(45~69歳のものが57%)ことがパンよりもめん類摂取率を高くしている大きな原因であるように思われる。しかし、失業保険受給者集団の高齢者の割合は、日雇い労働者集団のそれに近い高率で(約50%)あるにもかかわらず、パン類がめん類とほとんど同水準の高率(約10%)を示していることは注目を要する事実である。この点からみても主食摂取の近代的、都市的傾向は失業保険受給者において最も顕著であることが理解されるのである。次に各職業形態別に主食摂取状況を所得にそつて検討してみたが、規則的な変化は見られていない。

2. 朝・昼・夕、3食における主食形態の分布

以上述べたように、主食の内容、特に米飯対粉食の関係は社会階層によつて、かなり著しく異なつたパターンを示しているが、このような異なつたパターンが朝・昼・夕の3回の食事のどこから発生しているのかを考察してみると次のとおりである。

表 8. 職業形態別，所得水準別主食摂取状況

(1) 製造業従業者

所得 階 級	米 飯	めん類	パン類	2種類 以 上	不 詳	計
実 数						
15,000 円 未 滿	2,336	95	159	46	82	2,718
15,000 ~25,000	2,792	132	176	53	60	3,213
25,000 ~35,000	1,656	95	107	43	25	1,926
35,000 ~45,000	1,080	60	64	36	26	1,266
45,000 円 以 上	1,333	75	91	28	33	1,560
不 詳	911	36	75	13	102	1,137
計	10,108	493	672	219	328	11,820
割 合 (%)						
15,000 円未滿	85.9	3.5	5.8	1.7	3.0	100.0
15,000 ~25,000	86.9	4.1	5.5	1.6	1.9	100.0
25,000 ~35,000	86.0	4.9	5.6	2.2	1.3	100.0
35,000 ~45,000	85.3	4.7	5.1	2.8	2.1	100.0
45,000 円以上	85.4	4.8	5.8	1.8	2.1	100.0
不 詳	80.1	3.2	6.6	1.1	9.0	100.0
計	85.5	4.2	5.7	1.9	2.8	100.0

表 8 (つづき)

(2) 失業保険受給者

所得階級	米飯	めん類	パン類	2種類以上	不詳	計
実 数						
15,000 円未満	342	47	54	4	21	468
15,000 ~25,000	883	110	105	21	36	1,155
25,000 ~35,000	767	100	85	19	37	1,008
35,000 ~45,000	585	77	63	12	16	753
45,000 円以上	857	107	130	15	28	1,137
不詳	52	11	8	1	3	75
計	3,486	452	445	72	141	4,596
割 合 (%)						
15,000 円未満	73.1	10.0	11.5	0.9	4.5	100.0
15,000 ~25,000	76.5	9.5	9.1	1.8	3.1	100.0
25,000 ~35,000	76.1	9.9	8.4	1.9	3.7	100.0
35,000 ~45,000	77.7	10.2	8.4	1.6	2.1	100.0
45,000 円以上	75.4	9.4	11.4	1.3	2.5	100.0
不詳	69.3	14.7	10.7	1.3	4.0	100.0
計	75.8	9.8	9.7	1.6	3.1	100.0

表 8 (つづき)

(3) 日雇い労働者

所得階級	米飯	めん類	パン類	2種類以上	不詳	計
実 数						
15,000 円未満	838	87	47	13	14	999
15,000 ~25,000	126	12	7	—	2	147
25,000 ~35,000	41	4	—	—	—	45
35,000 ~45,000	18	4	2	—	—	24
45,000 円以上	12	1	—	—	—	13
不詳	43	2	3	—	2	50
計	1,078	110	59	13	18	1,278
割 合 (%)						
15,000 円未満	83.9	8.7	4.7	1.3	1.4	100.0
15,000 ~25,000	85.7	8.2	4.8	—	1.4	100.0
25,000 ~35,000	91.1	8.9	—	—	—	100.0
35,000 ~45,000	75.0	16.7	8.3	—	—	100.0
45,000 円以上	92.3	7.7	—	—	—	100.0
不詳	86.0	4.0	6.0	—	4.0	100.0
計	84.4	8.6	4.6	1.3	1.4	100.0

表9. 職業形態別、朝・昼・夕における主食摂取状況分布

食事の時期	主食の種類	突 数 (回)			割 合 (%)		
		製造業従業者	失業保険受給者	日雇い労働者	製造業従業者	失業保険受給者	日雇い労働者
朝 食	米 類	3,614	1,311	410	91.7	85.6	96.2
	め ん 類	7	6	1	0.2	0.4	0.2
	べ ン 類	155	142	7	3.9	9.3	1.6
	2種類以上	9	6	1	0.2	0.4	0.2
	不 詳	155	67	7	3.0	4.4	1.6
	計	3,940	1,532	426	100.0	100.0	100.0
昼 食	米 類	3,033	795	301	77.0	51.9	70.7
	め ん 類	281	357	66	7.1	23.3	15.5
	べ ン 類	449	280	46	11.4	18.3	10.8
	2種類以上	82	34	5	2.1	2.2	1.2
	不 詳	95	66	8	2.4	4.3	1.9
	計	3,940	1,532	426	100.0	100.0	100.0
夕 食	米 類	3,461	1,380	367	87.8	90.1	86.2
	め ん 類	205	89	43	5.2	5.8	10.1
	べ ン 類	68	23	6	1.7	1.5	1.4
	2種類以上	128	32	7	3.2	2.1	1.4
	不 詳	78	8	3	2.0	0.5	0.7
	計	3,940	1,532	426	100.0	100.0	100.0

注：突数の各欄内の数字は延べ回数を示す。

図3 1日3食における主食摂取率
 (1.米飯、2.めん類、3.パン類、4.2種類以上、5.不詳)

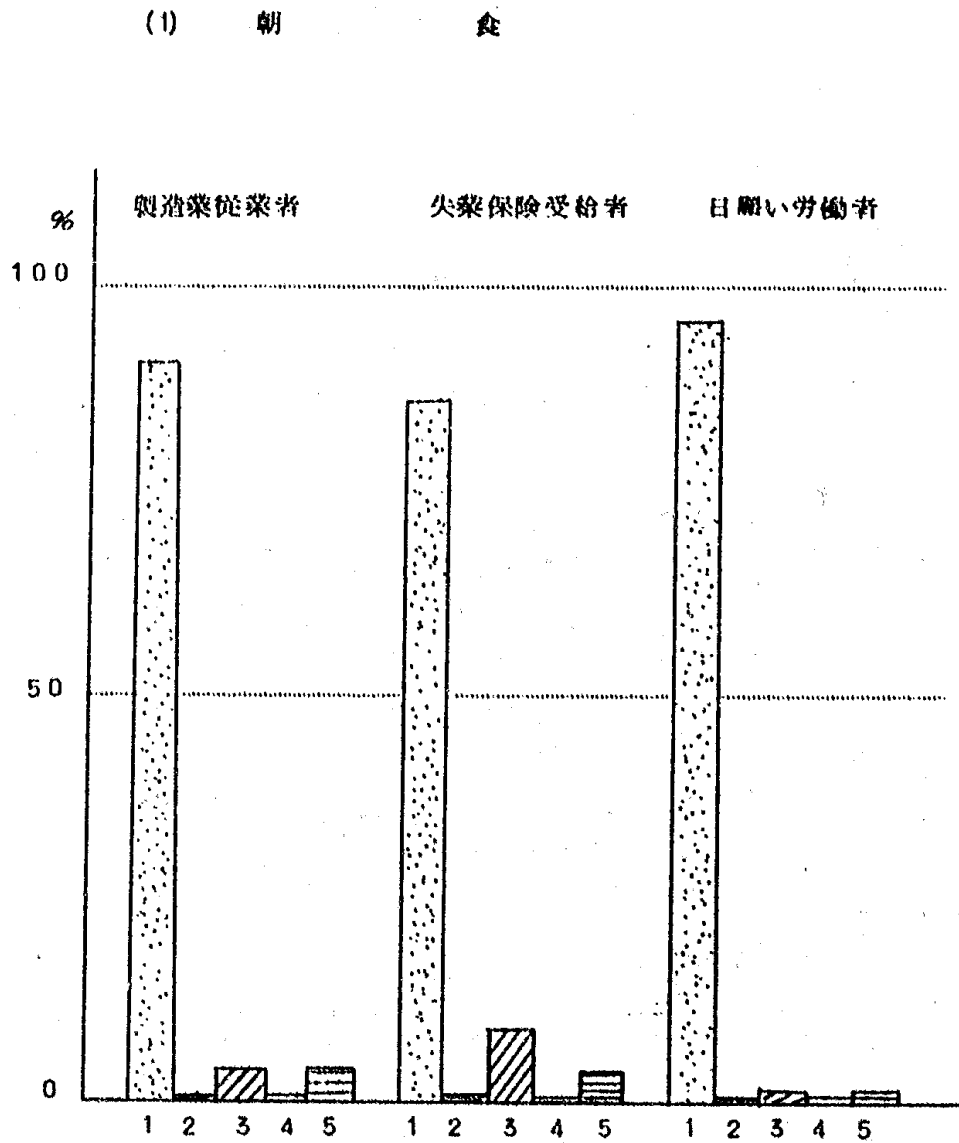


図3 (つづき)

(2) 経 食

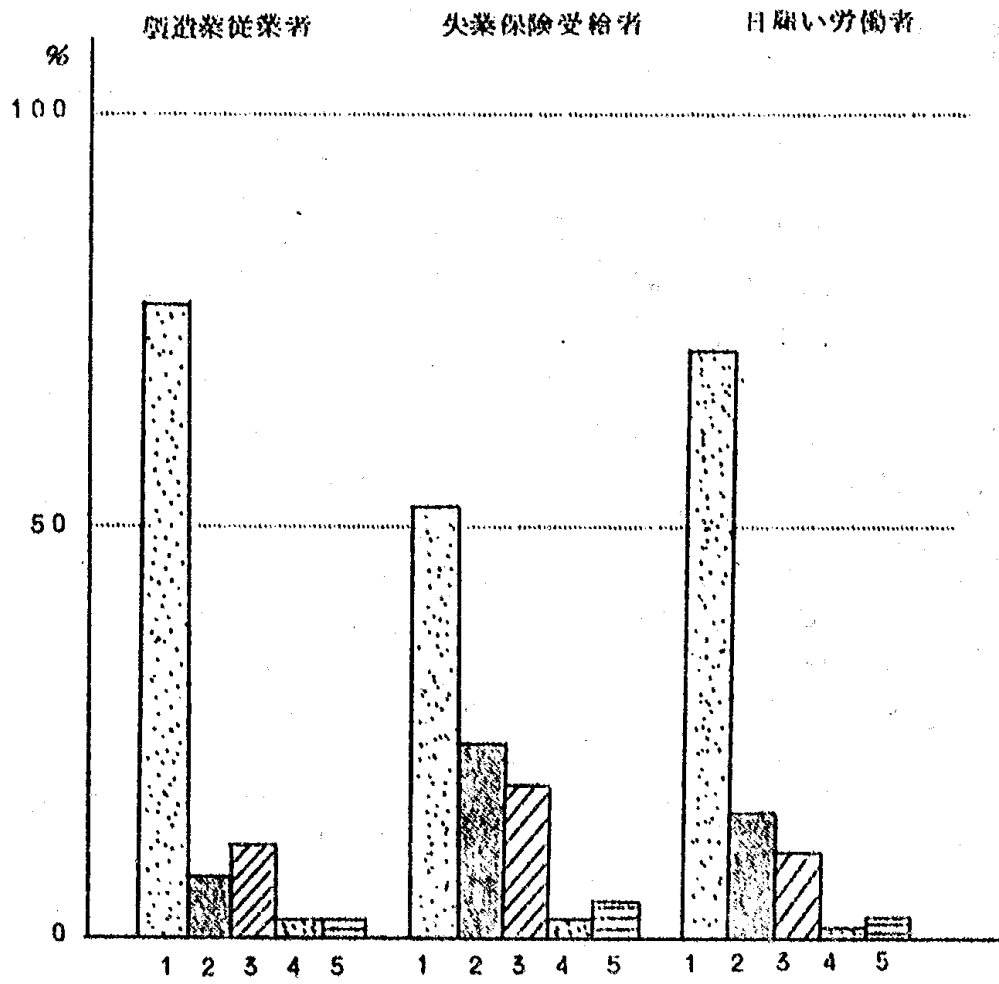
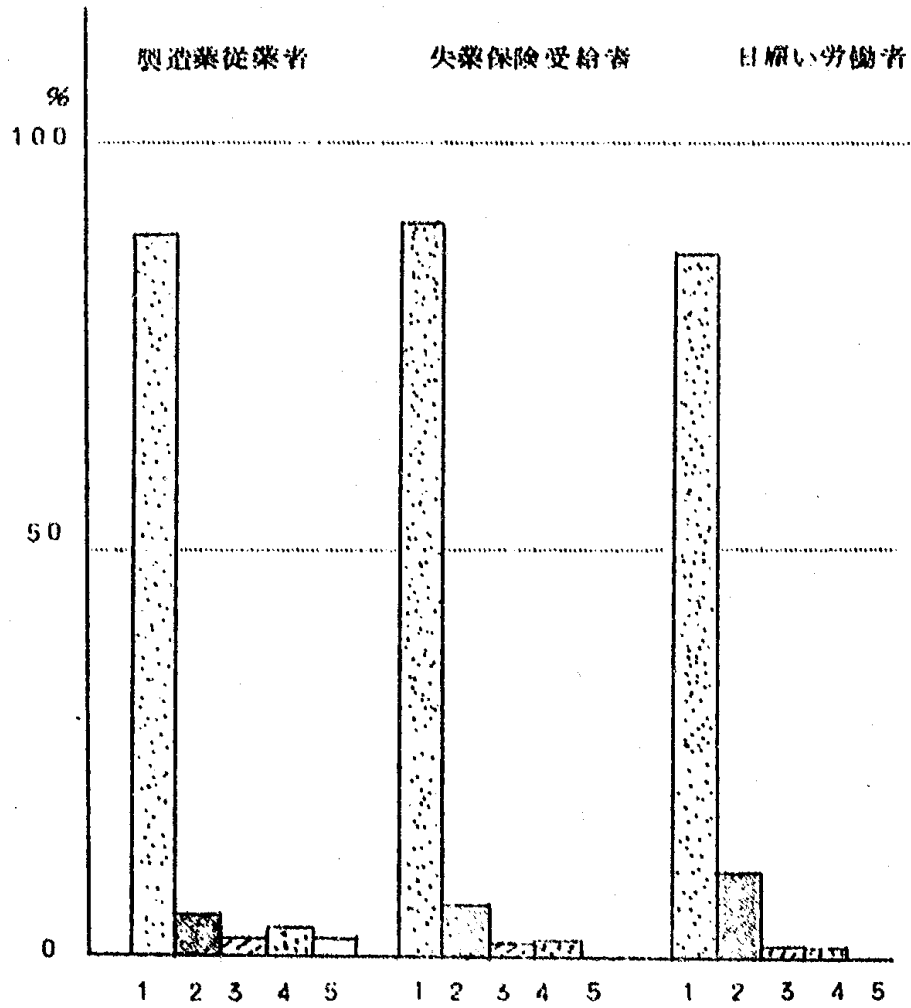


図3 (つづき)

(3) 夕 食



粉食摂取の機会はいずれの社会階層においても昼食において最も多く、朝食、夕食において著しく少ないのである。たとえば各回の食事を100として主食形態の分布を見ると、朝食においては、いずれの集団でも米飯摂取の割合は著しく高く、ことに日雇い労働者では96%の高率を示している。わずかに失業保険受給者で10%近いパン類摂取が見られることが注目されるにすぎないのである。朝食における粉食率は一般に低いとしても注目されることはめん類よりもパン類の摂取が例外なく多いということであり、要するに、朝食において粉食をとるとすれば、いずれの階層でもパン類を選択する傾向が強いということである。

昼食において、失業保険受給者集団では、米飯は52%で、ほとんど半分という低水準を示している。また製造業従業者においても77%、日雇い労働者では71%という低率の米飯摂取割合を示しているのである。昼食におけるめん類、またパン類だけの場合の粉食率は、失業保険受給者では42%、日雇い労働者では26%、製造業従業者でも20%に近い高率を示している。

しかし夕食においては多少とも朝食と異なつた傾向が見られる。米飯摂取の傾向を、朝食と夕食とで比較検討してみると、失業保険受給者においては夕食において高くなつているにもかかわらず、製造業従業者および日雇い労働者においては反対に夕食において低率であり、かつ失業保険受給者の米飯摂取率は、製造業従業者および日雇い労働者のそれよりも高くなつている。換言すれば、失業保険受給者の主食摂取構成は、特に昼食において強い粉食傾向と、朝食における比較的低い米飯摂取傾向、ならびに夕食における最高率の米飯摂取によつて特徴づけられていると見えよう。

夕食における粉食摂取の特徴は、朝食におけるパン食への集中傾向に対して、めん類への集中傾向が見られるのである。この傾向はいずれの社会階層においても共通に見られることである。一日全体として見ると、粉食摂取においてめん類、パン類ともに同水準の高率を示している失業保険受給者集団においてさえも、夕食ではめん類摂取がパン類のそれよりも圧倒的に高い割合を示しているのである。製造業従業者では失業保

険受給者とはほぼ同様な水準を示しているが、日雇い労働者においてはめん類のそれが圧倒的に高い割合を示している。パン類摂取の割合は、各社会階層にはほぼ同様な水準（製造業従業者 1.7%、失業保険受給者 1.5%、日雇い労働者 1.4%）を示している。以上の傾向を多少誇張して表現すれば、日本人が粉食をとるのは主として昼食においてであり、かつその場合どちらかと言えば、めん類をとる傾向が強いということであり、さらに朝食における粉食はパン類に、夕食におけるそれはめん類に強く集中する傾向があるということである。したがって、粉食の傾向は、なおめん類に強く影響を受けているといつた日本の伝統的な特異な構造を帯びていると評することができる。

3. 主食組み合わせ形態別分布

1日3回の食事における主食の組み合わせ形態別にその分布を見ると次のとおりである。

1日3回の食事を通じて米飯をとるものの割合が、この調査対象のいずれの社会層においても最も高いということは評うまでもないが、調査対象別に見るとかなり著しい差異がある。3回の食事の組み合わせ種類を各調査票より抜き出した結果、組み合わせ種類数は50種類に上っていた。その中の7種類について観察してみると表10のようである。組み合わせ形態(1)である、3食ともに米飯をとるものは、失業保険受給者において最も低く(41%)製造業従業者において最も高い(69%)のである。日雇い労働者は製造業従業者よりも多少低い(60%)割合を示している。

昼食のみをパンまたはめん類の粉食によるものは、失業保険受給者において最も高く(35%)、製造業従業者において最も低い(16%)。日雇い労働者はその中間で24%を示している。しかし昼食をめん類とするものの割合は、失業保険受給者、日雇い労働者のいずれにおいても昼食をパン食とするものそれよりも高いにもかかわらず、製造業従業者だけは反対にパン食の方が高くなっている。

夕食のみめん類(朝、昼、ともに米飯)をとるものは、日雇い労働者

表 10 職業形態別主食組み合わせ形態分布

主食組み合わせ形態	製造業従業者	失業保険受給者	日雇い労働者
米飯+米飯+米飯	2,714	633	255
米飯+パン+米飯	387	243	44
米飯+めん類+米飯	245	288	59
米飯+米飯+めん類	160	67	37
パン+米飯+米飯	100	66	4
なし+米飯+米飯	51	34	4
米飯+米飯+なし	33	8	4
そ の 他	250	193	19
計	3,940	1,532	426
米飯+米飯+米飯	68.9	41.3	59.9
米飯+パン+米飯	9.8	15.9	10.3
米飯+めん類+米飯	6.2	18.8	13.8
米飯+米飯+めん類	4.1	4.4	8.7
パン+米飯+米飯	2.5	4.3	0.9
なし+米飯+米飯	1.3	2.2	0.9
米飯+米飯+なし	0.8	0.5	0.9
そ の 他	6.4	12.6	4.6
計	100.0	100.0	100.0

において最も多く約9%であり、朝食のみパン食（昼、夕ともに米飯）をとるものの割合は、失業保険受給者において最も高く、4.3%を占めていることが注目される。

II 米食依存傾向について

1. 社会階層別、地域別米食依存傾向

本調査においては、単純な質問により今日における米食に対する希望を調査した。すなわち、米価の下落や所得の上昇により現在以上に米飯を摂取する希望の有無を聞いたのである。この質問事項に対する回答は当然に主観的であつて、したがつて客観性を欠如していることは言うまでもないが、客観性を求めるためには綿密な調査と判定基準の設定が必要であり、付帯調査としては困難であるため、このような単純な質問調査にとどめざるをえなかつたのである。

職業別に見ると、日雇い労働者において米飯を希望するものが50%を越えており、製造業従業者と失業保険受給者ではほぼ同水準の30数%にすぎないのである。これらの3種の社会集団中最も低所得層とみられる日雇い労働者では、「もつと米を食べたい」という期待を持つているのに対して、賃金生活者やまた、かつては賃金生活者であつたような勤め人層では、現状以上に米の摂取を希望するものは3割余にすぎないということである。調査地域別に見ると、米の摂取の増大を希望するものの割合は大都市で最も低く(32%)関西型の長崎、広島といった中都市で最高(48%)を示している。同じく中都市といつても寒冷地帯の山形、金沢では大都市とほぼ同様な水準を示している。山形、金沢は米作地帯の影響によるものと思われるが、大都市と同様に低いことは注目に値する。

表 1 1 職業形態別米食依存傾向

米 食 依存傾向	実 数 (人)			割 合 (%)		
	製 造 業 者 製 徒	失 業 保 險 者 受 給 者	日 雇 働 者 日 雇 働 者	製 造 業 者 製 徒	失 業 保 險 者 受 給 者	日 雇 働 者 日 雇 働 者
思 う	1,257	535	225	31.9	34.9	52.8
思 わ ない	2,488	965	191	63.1	63.0	44.8
わ か ら ない	195	32	10	4.9	2.1	2.3
計	3,940	1,532	462	100.0	100.0	100.0

図 4 職業形態別米食依存率

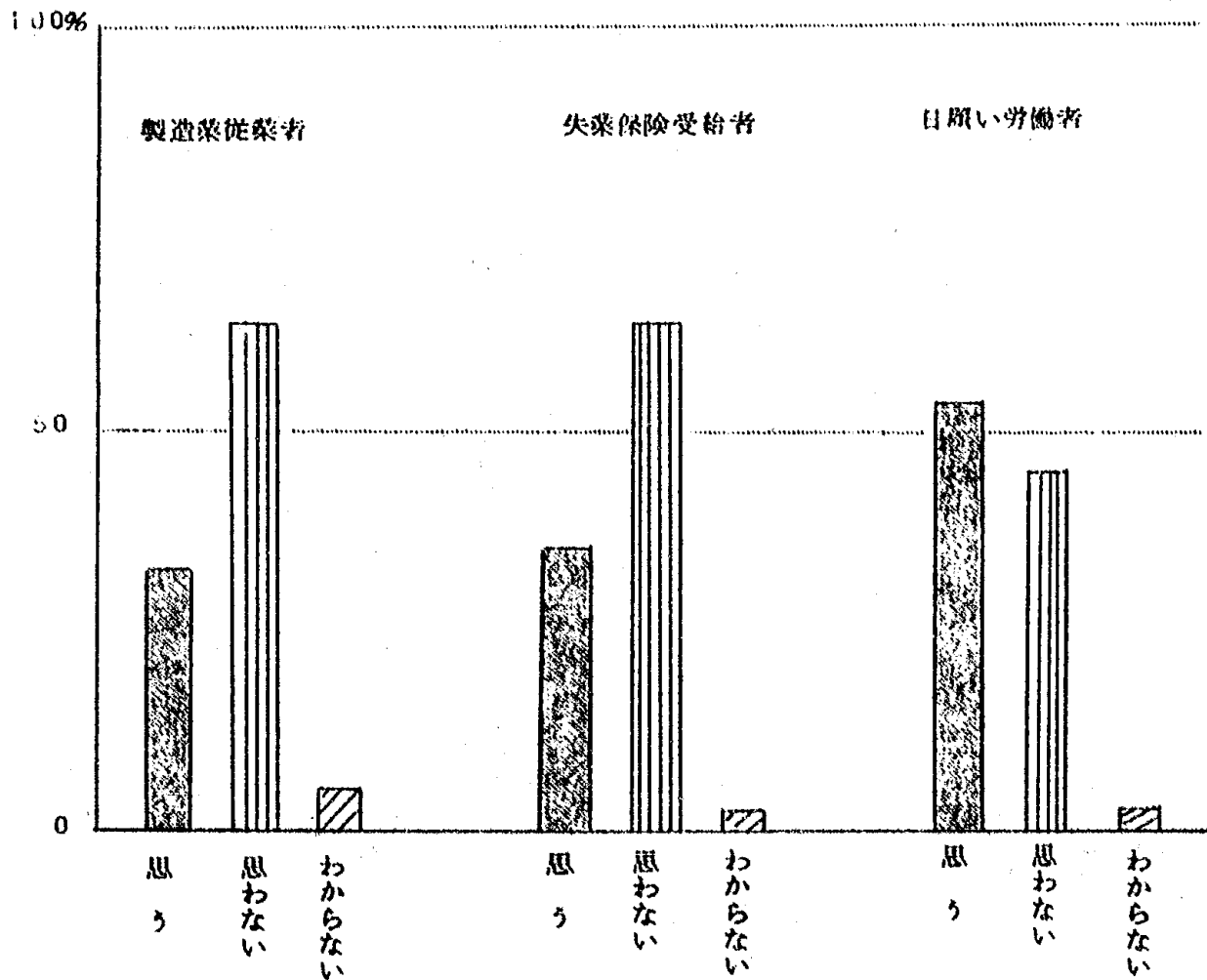
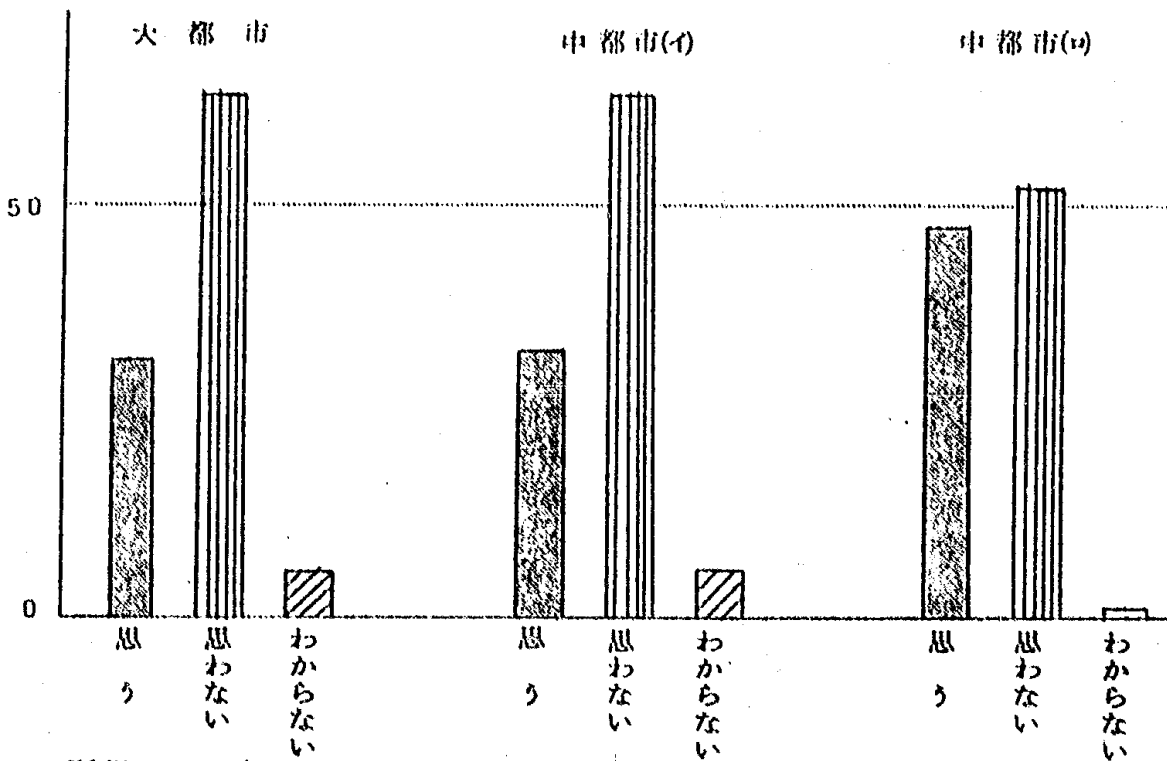


表 1 2 地域別米食依存傾向

米食依存傾向	実 数 (人)			割 合 (%)		
	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
	東京、名古屋	山形、金沢	広島、長崎	東京、名古屋	山形、金沢	広島、長崎
思 う	1,209	426	384	31.9	32.4	47.8
思わない	2,392	829	420	63.1	63.0	52.2
わからない	188	49	1	5.0	4.6	0.1
計	3,789	1,304	805	100.0	100.0	100.0

図 5. 地域別米食依存率



2. 所得および年齢別に見た米食依存傾向

世帯の所得水準別にこのような米の摂取希望を見ると表 1 3 のとおりである。各地域ともに減少するという規則的な傾向を示している。所得の最も低い 15,000 円未満の階級では、大都市でも 40% の高率を示していることは、低所得層ではいかに米飯に強く依存しているかを物語っている。

以上のような米食依存の所得水準に対する逆相関の関係は、非常に明確に表われており、製造業従業者という同職業についてみても、同様に認められることで、著しく規則的な傾向を示している。またほぼ同様な傾向は失業保険受給者集団にも見られることがわかる。次いで日雇い労働者においては、所得水準別に分類するほど多様な水準を持つてはいないけれど、ほぼ同様な傾向が存在することを認めることができる。

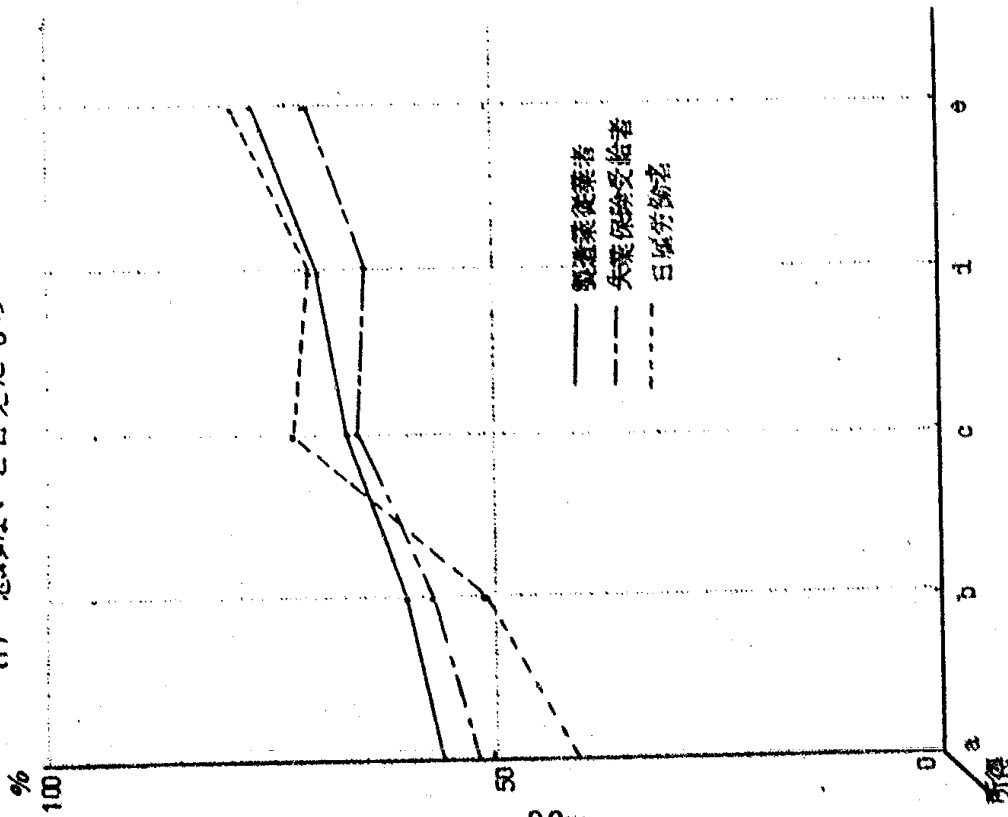
米食依存傾向と年齢の関係を見ると、本調査では密接な相関は見られてない。ただ、ここで各職業集団年齢構成がかなり違うので、製造業の年齢構成を基準として標準化してみたが、米食依存傾向としてはほとんど差がなかった。

表 1 3 職業形態別、所得別米食依存傾向

所得階級	米食依存傾向	実数			割合(%)		
		製造業従業者	失業保険受給者	日雇い労働者	製造業従業者	失業保険受給者	日雇い労働者
15000 円未満	思う	354	68	190	39.1	43.6	57.1
	思わない	508	82	138	56.1	52.6	41.4
	わからない	44	6	5	4.9	3.8	1.5
	計	906	156	333	100.0	100.0	100.0
15000~ 25,000円	思う	373	157	21	34.8	40.8	42.9
	思わない	646	221	25	60.3	57.4	51.0
	わからない	52	7	3	4.9	1.8	6.0
	計	1,071	385	49	100.0	100.0	100.0
25,000~ 35,000円	思う	191	112	4	29.8	33.3	26.7
	思わない	431	220	11	67.1	65.5	73.3
	わからない	20	4	-	3.1	1.2	-
	計	642	336	15	100.0	100.0	100.0
35,000~ 45,000円	思う	112	85	2	26.5	33.9	28.6
	思わない	294	160	5	69.7	63.7	71.4
	わからない	16	6	-	3.8	2.4	-
	計	422	251	7	100.0	100.0	100.0
45,000 円以上	思う	107	104	1	20.6	27.4	20.0
	思わない	398	269	4	76.5	71.0	80.0
	わからない	15	6	-	2.9	1.6	-
	計	520	379	5	100.0	100.0	100.0
不詳	思う	120	9	12	31.7	36.0	75.0
	思わない	208	13	3	54.9	52.0	18.8
	わからない	51	3	1	13.5	12.0	6.2
	計	379	25	16	100.0	100.0	100.0
計	思う	1,257	535	227	31.9	34.9	53.2
	思わない	2,485	965	191	63.1	62.9	44.8
	わからない	189	32	9	4.8	2.1	2.1
	計	3,940	1,532	426	100.0	100.0	100.0

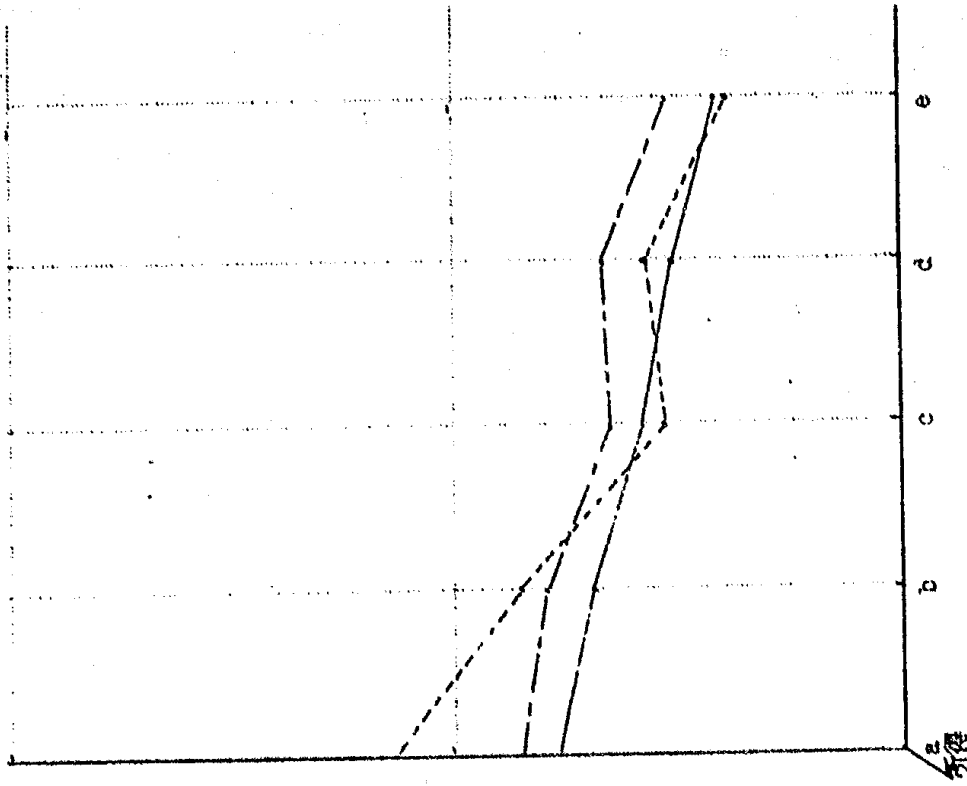
図8 職業形態別、所得別米食依存率

(イ) 思わないと答えたもの



注：米価が下落したり、所得が増加した際「あなたは米をもつと食べたいと思いますか、の問いに対する答えの割合を示したものの。

(ロ) 思うと答えたもの



所得階級のaは15,000円未満、bは15,000~25,000円、cは25,000~35,000円、dは35,000~45,000円、eは45,000円以上

表14 職業形態別、地域別、所得別米食依存傾向

(1) 総 数

所得階級	米食依存傾向	実 数			割合 (%)		
		大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
		東京 名古屋	山形、金沢	広島、長崎	東京 名古屋	山形、金沢	広島、長崎
15,000 円未満	思 5	332	155	125	39.8	42.9	59.5
	思わない	457	186	85	54.8	51.5	40.5
	わからない	45	20	-	5.4	5.5	-
	計	834	361	210	100.0	100.0	100.0
15,000~ 25,000円	思 5	277	128	142	33.5	30.9	54.0
	思わない	507	268	121	61.2	64.7	46.0
	わからない	44	18	-	5.3	4.3	-
	計	828	414	263	100.0	100.0	100.0
25,000~ 35,000円	思 5	187	69	52	29.5	30.8	38.2
	思わない	429	149	84	67.7	66.5	61.8
	わからない	18	6	-	2.8	2.7	-
	計	634	224	136	100.0	100.0	100.0
35,000~ 45,000円	思 5	145	26	28	30.6	21.5	32.9
	思わない	314	89	56	66.2	73.6	65.9
	わからない	15	6	1	3.2	4.9	1.2
	計	474	121	85	100.0	100.0	100.0
45,000円 以上	思 5	170	19	23	24.7	14.3	27.7
	思わない	501	110	60	72.8	82.7	72.3
	わからない	17	4	-	2.5	3.0	-
	計	688	133	83	100.0	100.0	100.0
不 詳	思 5	98	29	15	29.2	47.5	51.7
	思わない	185	26	14	55.9	42.6	48.3
	わからない	49	6	-	14.9	9.8	-
	計	332	61	29	100.0	100.0	100.0
計	思 5	1,209	426	384	31.9	32.4	47.8
	思わない	2,393	828	420	63.1	63.0	52.2
	わからない	188	60	1	5.0	4.6	0.1
	計	3,790	1,314	804	100.0	100.0	100.0

表14(つづき)

(2) 製造業従業者

所得階級	米食依存傾向	実 数			割合 (%)		
		大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
		東京 名古屋	山形、金沢	長 崎	東京 名古屋	山形、金沢	長 崎
15,000円 未満	思 考	225	86	43	38.9	35.7	50.0
	思われない	315	150	43	54.4	62.2	50.0
	わからない	39	5	-	6.7	2.1	-
	計	579	241	86	100.0	100.0	100.0
15,000～ 25,000円	思 考	180	100	93	31.6	30.6	53.1
	思われない	351	213	82	61.7	65.1	46.9
	わからない	38	14	-	6.7	4.3	-
	計	569	327	175	100.0	100.0	100.0
25,000～ 35,000円	思 考	123	48	20	29.1	28.9	37.7
	思われない	285	113	33	67.4	68.1	62.3
	わからない	15	5	-	3.5	3.0	-
	計	423	166	53	100.0	100.0	100.0
35,000～ 45,000円	思 考	87	17	8	28.7	20.7	21.6
	思われない	204	61	29	67.3	74.4	73.4
	わからない	12	4	-	4.0	4.9	-
	計	303	82	37	100.0	100.0	100.0
45,000円 以上	思 考	79	16	12	20.5	15.2	40.0
	思われない	295	85	19	76.6	81.0	60.0
	わからない	11	4	-	2.9	3.8	-
	計	385	105	30	100.0	100.0	100.0
不 詳	思 考	91	17	12	29.1	40.5	50.0
	思われない	176	20	12	56.2	47.6	50.0
	わからない	46	5	-	14.7	11.9	-
	計	313	42	24	100.0	100.0	100.0
計	思 考	785	284	188	30.5	29.5	46.4
	思われない	1,626	642	217	63.2	66.7	53.6
	わからない	161	37	-	6.3	3.8	-
	計	2,572	963	405	100.0	100.0	100.0

表14(つづき)

(3) 失業保険受給者

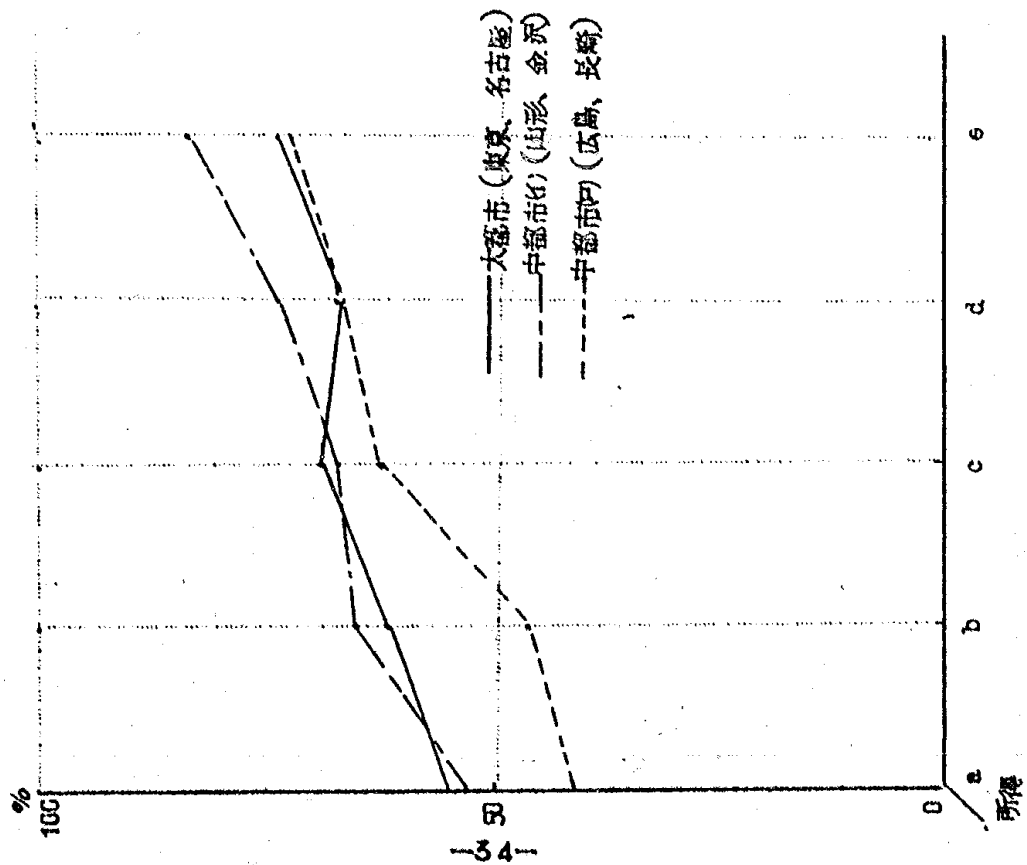
所得階級	米食依存傾向	実 数			割合 (%)		
		大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
		東京 名古屋	山形、金沢	広島、長崎	東京 名古屋	山形、金沢	広島、長崎
15,000円 未満	思 考	32	14	22	36.8	45.8	59.5
	思わない	51	16	15	58.6	50.0	40.5
	わからない	4	2	-	4.6	6.3	-
	計	87	32	37	100.0	100.0	100.0
15,000～ 25,000円	思 考	86	27	44	38.2	33.3	55.7
	思わない	136	50	35	60.4	61.7	54.3
	わからない	3	4	-	1.3	4.9	-
	計	225	81	79	100.0	100.0	100.0
25,000～ 35,000円	思 考	62	19	31	30.8	35.2	38.3
	思わない	136	34	50	67.7	63.0	61.7
	わからない	3	1	-	1.5	1.9	-
	計	201	54	81	100.0	100.0	100.0
35,000～ 45,000円	思 考	57	9	19	33.9	25.0	40.4
	思わない	108	25	27	64.3	69.4	57.4
	わからない	3	2	1	1.8	5.6	2.1
	計	168	36	47	100.0	100.1	100.0
45,000円 以上	思 考	90	3	11	30.2	10.7	23.8
	思わない	202	25	42	67.8	89.3	79.2
	わからない	6	-	-	2.0	-	-
	計	298	28	53	100.0	100.0	100.0
不 詳	思 考	3	5	1	1.82	50.0	33.3
	思わない	7	4	2	63.6	40.0	66.7
	わからない	2	1	-	18.2	10.0	-
	計	12	10	3	100.0	100.0	100.0
計	思 考	330	77	128	33.3	39.7	42.7
	思わない	640	154	171	64.6	79.3	57.0
	わからない	21	10	1	2.1	5.1	0.3
	計	991	241	300	100.0	100.0	100.0

表 1 4 (つづき)

(4) 日照い労働者

所得階級	米俵決 存傾向	実 数			割 合 (%)		
		大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
		東京 名古屋	山形、金沢	広島、長崎	東京 名古屋	山形、金沢	広島、長崎
15,000円 未満	思う	75	55	60	44.6	70.6	69.0
	思わない	91	20	27	54.1	75.6	31.0
	わからない	2	3	-	1.3	3.8	-
	計	168	78	87	100.0	100.0	100.0
15,000~ 25,000円	思う	11	5	5	32.4	83.3	55.6
	思わない	20	1	4	58.8	16.7	44.4
	わからない	3	-	-	8.8	-	-
	計	34	6	9	100.0	100.0	100.0
25,000~ 35,000円	思う	2	2	-	22.2	50.0	-
	思わない	8	2	1	88.8	50.0	100.0
	わからない	-	-	-	-	-	-
	計	10	4	1	100.0	100.0	100.0
35,000~ 45,000円	思う	1	-	1	33.3	-	100.0
	思わない	2	3	-	66.7	100.0	-
	わからない	-	-	-	-	-	-
	計	3	3	1	100.0	100.0	100.0
45,000円 以上	思う	1	-	-	20.0	-	-
	思わない	4	-	-	80.0	-	-
	わからない	-	-	-	-	-	-
	計	5	-	-	100.0	-	-
不詳	思う	3	7	2	60.0	77.8	100.0
	思わない	1	2	-	20.0	22.2	-
	わからない	1	-	-	20.0	-	-
	計	5	9	2	100.0	100.0	100.0
計	思う	94	65	68	41.6	65.0	68.0
	思わない	127	32	32	56.2	32.0	32.0
	わからない	6	3	-	2.2	2.9	-
	計	226	100	100	100.0	100.0	100.0

図7 地域別、所得別米俵依存率
 () 思わないと答えたもの



注：図6と同様

() 思うと答えたもの

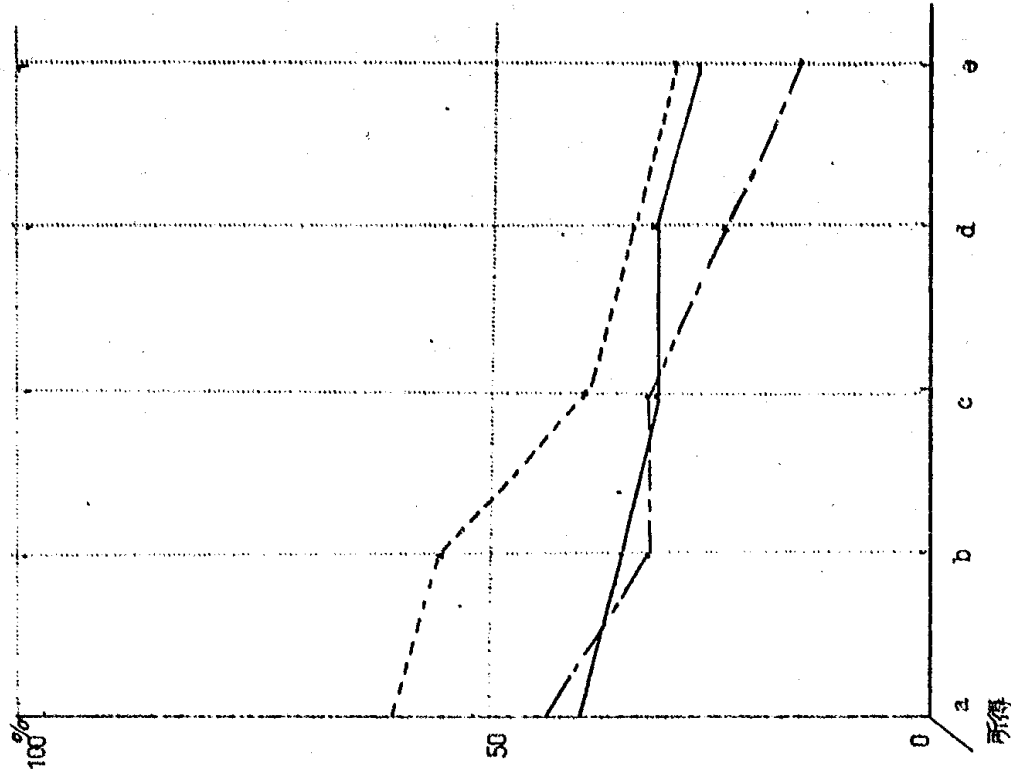


表 1 5 地域別、年齢別米食依存傾向

年齢階級	米食依存傾向	実 数			割 合 (%)		
		大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
		東京 名古屋	山形、金沢	広島、長崎	東京 名古屋	山形、金沢	広島、長崎
15~29	思 5	61.4	128	71	32.5	28.5	40.1
	思わない	1,171	309	106	62.1	68.8	59.9
	わからない	102	12	-	5.4	2.7	-
	計	1,887	449	177	100.0	100.0	100.0
30~44	思 5	283	173	142	30.9	36.4	50.0
	思わない	593	280	141	64.7	58.9	50.0
	わからない	41	22	1	4.4	4.6	-
	計	917	475	284	100.0	100.0	100.0
45~59	思 5	221	107	133	32.5	35.7	50.4
	思わない	432	177	131	63.6	59.0	49.6
	わからない	26	16	-	3.8	5.3	-
	計	679	300	264	100.0	100.0	100.0
60~69	思 5	80	17	36	31.4	22.4	48.0
	思わない	163	57	39	63.9	75.0	52.0
	わからない	12	2	-	4.7	2.6	-
	計	255	76	75	100.0	100.0	100.0
70歳以上	思 5	10	1	2	24.4	12.5	40.0
	思わない	30	6	3	73.2	75.0	60.0
	わからない	1	1	-	2.4	12.5	-
	計	41	8	5	100.0	100.0	100.0
計	思 5	1,208	426	384	30.5	29.5	46.4
	思わない	2,389	829	420	63.2	66.7	53.6
	わからない	182	53	1	6.3	3.8	-
	計	3,779	1,308	805	100.0	100.0	100.0

表 16 職業形態別、地域別、年齢別米食依存傾向

(1) 製造業従業者

年齢階級	米食依存傾向	実 数			割 合 (%)		
		大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
		東京 名古屋	山形 金沢	長 崎	東京 名古屋	山形、 金沢	崎 長
15~29	思 考	519	106	59	32.3	27.8	38.8
	思わな い	992	267	93	61.7	70.1	61.2
	わから ない	97	8	-	6.0	2.1	-
	計	1,608	381	152	100.0	100.0	100.0
30~44	思 考	147	114	78	26.7	31.1	48.8
	思わな い	369	232	82	67.1	63.2	51.3
	わから ない	34	21	-	6.2	5.7	-
	計	550	367	160	100.0	100.0	100.0
45~59	思 考	87	59	45	27.8	32.2	57.7
	思わな い	210	116	33	67.1	63.4	42.3
	わから ない	16	8	-	5.1	4.4	-
	計	313	183	78	100.0	100.0	100.0
60~69	思 考	30	4	6	36.1	12.9	39.9
	思わな い	45	27	9	54.2	87.1	59.9
	わから ない	8	-	-	9.6	-	-
	計	83	31	15	100.0	100.0	100.0
70歳以上	思 考	1	1	-	12.5	100.0	-
	思わな い	7	-	-	87.5	-	-
	わから ない	-	-	-	-	-	-
	計	8	1	-	100.0	100.0	-
不詳	思 考	1	-	-	14.3	-	-
	思わな い	3	-	-	42.9	-	-
	わから ない	3	-	-	42.9	-	-
	計	7	-	-	100.0	-	-
計	思 考	785	284	188	30.5	29.5	46.4
	思わな い	1,626	682	217	63.2	66.7	53.6
	わから ない	161	37	-	6.3	3.8	-
	計	2,572	963	405	100.0	100.0	100.0

表16 (つづき)

(2) 失業保険受給者

年齢階級	米食依存 傾向	実 数			割 合 (%)		
		大都市	中部市(イ)	中部市(ロ)	大都市	中部市(イ)	中部市(ロ)
		東京 名古屋	山形、金沢	広島、長崎	東京 名古屋	山形、金沢	広島、長崎
15~29	思 5	87	18	12	33.5	30.0	48.0
	思わない	168	42	13	64.6	70.0	52.0
	わからない	5	-	-	1.8	-	-
	計	260	60	25	100.0	100.0	100.0
30~44	思 5	92	27	51	33.3	39.7	48.6
	思わない	179	40	53	64.9	58.8	50.5
	わからない	5	1	1	2.4	1.5	1.0
	計	276	68	105	100.0	100.0	100.0
45~59	思 5	102	23	58	36.7	30.7	40.0
	思わない	169	46	87	60.8	61.3	60.0
	わからない	7	6	-	2.5	8.0	-
	計	278	75	145	100.0	100.0	100.0
60~69	思 5	41	9	6	27.5	28.1	25.0
	思わない	105	21	18	70.5	65.6	75.0
	わからない	3	2	-	2.0	6.3	-
	計	149	32	24	100.0	100.0	100.0
70歳以上	思 5	8	-	1	28.6	-	100.0
	思わない	19	5	-	67.9	83.3	-
	わからない	1	1	-	3.5	16.7	-
	計	28	6	1	100.0	100.0	100.0
不詳	思 5	-	-	-	-	-	-
	思わない	-	-	-	-	-	-
	わからない	-	-	-	-	-	-
	計	-	-	-	-	-	-
計	思 5	330	77	128	33.3	32.0	42.7
	思わない	640	154	171	64.6	63.9	57.0
	わからない	21	10	1	2.1	4.1	0.3
	計	991	241	300	100.0	100.0	100.0

表16 (つづき)

(9) 日雇い労働者

年齢階級	米食依存 傾向	実 数			率 合 (%)		
		大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
		東京 名古屋	山口、金沢	広島、長崎	東京 名古屋	山形、金沢	広島、長崎
15~29	思 3	0	4	-	42.1	100.0	-
	思わない	11	-	-	57.9	-	-
	わからない	-	-	-	-	-	-
	計	19	4	-	100.0	100.0	-
30~44	思 3	44	32	13	48.4	80.0	68.4
	思わない	45	8	6	49.5	20.0	31.6
	わからない	2	-	-	2.1	-	-
	計	91	40.0	19	100.0	100.0	100.0
45~59	思 3	32	25	30	36.4	59.5	73.2
	思わない	53	15	11	60.2	35.7	26.8
	わからない	3	2	-	3.4	4.8	-
	計	88	42	41	100.0	100.0	100.0
60~69	思 3	9	4	24	39.1	30.8	66.7
	思わない	13	9	12	56.5	69.2	33.3
	わからない	1	-	-	4.3	-	-
	計	23	13	36	100.0	100.0	100.0
70歳以上	思 3	1	-	1	20.0	-	25.0
	思わない	4	1	3	80.0	100.0	75.0
	わからない	-	-	-	-	-	-
	計	5	1	4	100.0	100.0	100.0
不詳	思 3	-	-	-	-	-	-
	思わない	-	-	-	-	-	-
	わからない	-	-	-	-	-	-
	計	-	-	-	-	-	-
計	思 3	94	65	68	41.6	65.0	68.0
	思わない	126	33	32	58.8	33.0	32.0
	わからない	6	2	-	2.6	2.0	-
	計	226	100	100	100.0	100.0	100.0

■ 社会階層別、地域別調理構造について

1. 料理種類数について

料理の種類数について観察してみる。この調査対象である低所得人口層における料理種類については具体的に発表されたものがないと思われる。今までこの階層における食生活を一口に表現すると「～ばつかり食」と言われている。たとえば「つけ物ばつかり」とか「干物ばつかり」と言ったことばで表現されていた。しかしこの調査の結果によると、以上のことが妥当しないように思われる。換言すれば、今までに予想されていたよりもはるかに変化に富んだ料理の種類が表われている。しかしながら職業別、地域別に見ると著しい格差がでてくる。そこでまず職業別に見ると、失業保険受給者においては72種の料理名を見ることができた。その料理名をあげると、1.みそ汁、2.つけ物、3.焼きざかな、4.煮ざかな、5.さしみ、6.煮物、7.煮込み、8.卵焼き、10.吸い物、11.てんぷら、12.牛乳、13.いため物、14.あえ物、15.おひたし、16.炸の物、17.のり、18.焼き肉、19.つくだ煮、20.すき焼き、21.梅干し、22.かまぼこ、23.大根、24.フライ、25.ふりかけ、26.サラダ、27.煮豆、28.カレー、29.スープ、30.豚汁、31.納豆、32.コロッケ、33.生野菜、34.ハンバーグ、35.塩辛、36.茶わん蒸し、37.ソーセージ、38.とろこんぶ、39.オムレツ、40.カツ、41.かん詰め、42.とろろ芋、43.さつま揚げ、44.グラタン、45.湯豆腐、46.シニューマイ、47.スパゲタイ、48.ハム、49.マカロニサラダ、50.チーズ、51.コーヒー、52.紅茶、53.ぎょうざ、54.わさびづけ、55.おから、56.玉子とじ、57.鳥水たき、58.さかなかん詰め、59.かき玉汁、60.ハヤシライス、61.お好み焼き、62.ベーコン、63.かき汁、64.けんちん汁、65.なると、66.ハムエツグ、67.シチエウ、68.白菜なべ、69.メンチボール、70.ココア、71.白菜巻き、72.ミートソース、となる。また製造業従業者では最も多く、76種類で次の如くである。1.みそ汁、2.つけ物、3.焼きざかな、4.煮ざかな、5.さしみ、6.煮物、7.煮込み、8.卵焼き、9.生卵、10.吸い物、11.てんぷら、12.牛乳、13.いため物、14.あえ物、15.おしたし、16.炸の物、

17. のり、18. 焼き肉、19. つくだ煮、20. すき焼き、21. 梅干し、22. かまぼこ、23. 大根おろし、24. フライ、25. ふりかけ、26. サラダ、27. 煮豆、28. カレー、29. スープ、30. 肉汁、31. 納豆、32. コロッケ、33. 生野菜、34. ハンバーグ、35. 茶わん蒸し、36. ハム・ソーセージ、37. オムレツ、38. カツ、39. とろろ芋、40. さつま揚げ、41. 湯豆腐、42. シュウマイ、43. スパゲティ、44. マカロニ、45. チーズ、46. ハム、47. コーヒー、48. ぎょうざ、49. おから、50. さかなかん詰め、51. 肉かん詰め、52. ハヤシライス、53. お好み焼き、54. ハムエッグ、55. シチュー、56. マンチボール、57. なべ物、58. 親子どんぶり、59. かしわ水たき、60. チキンライス、61. 月見芋、62. ピラフ、63. 牛どんぶり、64. 生揚げ、65. うなぎ、66. コンビーフ、67. かす汁、68. けんちん汁、69. あんかけ、70. 豚汁、71. はんぺん、72. 塩辛、73. うに、74. 鯨がき、75. てつかみそ、76. おぼろ、となつている。

また日雇い労働者においては最も少なく、41種類があげられており、列挙すると、1. みそ汁、2. つけ物、3. 焼きさかな、4. 煮さかな、5. 煮込み、6. 卵焼き、7. 生卵、8. 吸い物、9. てんぷら、10. 牛乳、11. おひたし、12. 炸の物、13. 焼き肉、14. つくだ煮、15. すき焼き、16. 梅干、17. のり、18. 豆腐、19. いため物、20. フライ、21. カツ、22. 煮豆、23. コロッケ、24. お好み焼き、25. ベーコン、26. あえ物、27. かまぼこ、28. ぎょうざ、29. サラダ、30. カレー、31. 大根おろし、32. さつま揚げ、33. マカロニ、34. 肉汁、35. ハム・ソーセージ、36. ふりかけ、37. 生野菜、38. 納豆、39. とろろ芋、40. かす汁、41. 生さしみ、の料理名しか見られていない。

そこで失業保険受給者において地域別に観察すると、大都市においては69種類に達しているのに対して、中都市(イ)においては38種類にすぎず、約50%も少なくなつている。さらに、中都市(ロ)においても40種類となる。また職業形態別に見た場合は最高数を示していた製造業も、地域別に見ると、大都市で63種類を数え、中都市(イ)では52種類、中都市(ロ)では43種類と減少している。次に最少数を示していた日雇い労働者を見ると、大都市で39種類、中都市(イ)、中都市(ロ)では24種類と減少する。失

業保険受給者ならびに製造従業者と比較して著しい差を示しており、いかに貧弱にして単調な食生活が行なわれているかということがわかるのである。低所得層として取り上げたこの3階層における料理の種類の違いを考えた場合、次のごときことが考えられる。それは、この階層中最も多く料理の種類を食べている失業保険受給者、製造業従業者は、所得の面から考えても、日雇い労働者よりは高い生活をしているということは想像できるのである。失業保険受給者においては、失業前の賃金階級として製造従業者と類似した食生活構造を反映していると思われる。

2. 社会階層別、地域別、調理方法別分布

職業形態別に料理の種類を調理方法別に大別して一日一人当たりの回数を算定してみた。次の第17表の示しているごとく、階層を通じて書えることは、つけ物と汁物が圧倒的に多くとられており、次に煮物、焼物、と

表17 職業形態別、調理方法別分布 (回数)

料理の種類	製造業従業者		失業保険受給者		日雇い労働者	
	実数	1人1日当たり	実数	1人1日当たり	実数	1人1日当たり
つけ物	6,771	1.72	2,710	1.85	527	1.24
汁物	4,945	1.26	1,957	1.34	488	1.15
煮物	2,965	0.75	1,146	0.78	351	0.83
焼き物	2,595	0.66	932	0.64	227	0.53
生 物	1,192	0.30	330	0.23	60	0.14
揚げ物	1,163	0.30	328	0.22	73	0.17
牛 乳	318	0.08	168	0.11	13	0.03
の り	371	0.09	125	0.09	18	0.04
い ん ち ゃう	319	0.08	108	0.07	12	0.03
あ え 物	351	0.09	104	0.07	28	0.07
納 豆	135	0.03	77	0.05	5	0.00
魚肉加工品	246	0.06	75	0.05	11	0.03
蒸し物	29	0.01	14	0.01	-	-

注：各調理別に摂取延べ回数を調査対象数で除し、1人1日当たりの摂取回数を算出したもの。

表 1 8 地域別、調理方法別分布

(箇數)

調理の 種類	大 都 市		中 都 市 (イ)		中 都 市 (ロ)	
	実 数	1人1日 当 たり	実 数	1人1日 当 たり	実 数	1人1日 当 たり
つけ物	5,895	1.59	2,648	2.03	1,465	1.82
汁 物	4,482	1.21	2,048	1.57	860	1.07
煮 物	2,678	0.72	1,044	0.80	735	0.92
焼 物	2,120	0.57	1,066	0.82	570	0.71
生 物	1,149	0.31	195	0.15	237	0.30
揚げ物	1,204	0.32	210	0.16	139	0.17
牛 乳	380	0.01	48	0.04	71	0.09
の り	432	0.01	52	0.04	30	0.04
いた め 物	312	0.01	78	0.06	49	0.06
あえ物	345	0.01	91	0.07	47	0.06
納 豆	114	0.00	98	0.08	5	0.01
魚 肉 加工品	273	0.01	49	0.04	27	0.03
蒸し物	36	0.00	2	0.00	5	0.01

注：表17と同じ

いつた構成を持つていることである。

次に摂取回数の少ない生物(なまもの)、揚げ物、牛乳について観察してみると次のごとくである。

まず生物の場合を見ると、失業保険受給者は0.23回、製造業従業者は0.30回となつている。揚げ物の場合は、失業保険受給者は0.22回、製造業従業者は0.30回を示している。日雇い労働者においては、前2者に比較してさらに少なく、生物は0.14回、揚げ物は0.17回である。またこの3階層における牛乳の摂取回数は、ほかのものに比べてさらに少なくなつているが、職業形態別に見ると、ここでも差が見られるのである。失業保険受給者においては3階層中最も多く0.11回、製造業従業者では0.08回、日雇い労働者においては著しく少なく0.03回となつている。

以上で大體わかるように、この3階層において最も一般的に摂取されている調理種類は、つけ物、汁物、煮物、焼き物といった日本古来の食生活習慣に見られる少数の調理種類に集中していると考えられる。そこで、大別して考えられる以上の4種類の調理方法についての内容を詳細に検討してみると次のごとくなる。

汁物においては、みそ汁88.6%、吸い物4.2%と日本的な調理法が92.8%も占めており、洋風化された汁物はわずかに7.2%にすぎない。煮物においては、野菜を主にした煮物46.6%、つくだ煮18.7%、さかなの煮つけ28.8%と、ここでも日本的な調理法の占める割合が94.1%に上っている。また肉を使つたものは著しく少なく5.9%を示している。焼き物の場合を見ると、焼きさかな71.9%、卵焼き20.0%となつており、汁物、煮物と同様日本的基礎調理が91.9%を占めるに至り、洋風化された焼き肉はわずかに8.1%を示すにすぎないのである。このように詳細に観察した結果、全体的に言えることは、一般に日本人の食生活が洋風化されたと言われている今日においても、このような低所得階層と言われる層においては、洋風化の影響をほとんど受け入れられないようにうかがえるのである。古い筈えれば、伝統と慣習に深く裏づけられた無意識の純日本的な基礎調理の献立に基づいており、栄養を基本にした新しい献立パターンへの移行が、きわめて困難であることを予想せしめられるのである。

特にこの献立で注目すべき点は、3階層のいずれにおいても、副食の大部分を占めているみそ汁について、最も注意を払うべきではないかと思われる。すなわち、洋風化あるいは栄養改善の波動を容易に受け入れない状態にあるこの階層におけるみそ汁の存在は、重大な問題で、今後栄養的にも最高の副食として内容を豊富にし、かつ美味に調理する技術を科学的に検討する必要があると思われる。

IV みそ汁摂取傾向について

1 社会階層別、地域別に見たみそ汁摂取状況

表 19 職業形態別みそ汁摂取状況

みそ汁摂取状況	製造業従業者	失業保険受給者	日雇い労働者
	実 数		
食べない	40	25	10
毎日食べる	3298	739	319
時々食べる	470	240	91
不詳	132	28	6
計	3,940	1,532	426
	割 合 (%)		
食べない	1.0	1.6	2.3
毎日食べる	83.7	80.0	74.9
時々食べる	11.7	15.7	21.4
不詳	3.4	1.8	1.4
計	100.0	100.0	100.0

前項で問題点を指摘しておいたみそ汁について、詳細に検討を加えていきたいと思う。みそ汁についての調査は一日調査ではなく、日常の食生活慣習の観点から調査したものである。この調査の結果を見ると職業形態別、地域別にかかわらず著しく高い摂取率が見られる。職業形態別に観察すると、毎日みそ汁を食べていると答えたものは、製造業従業者の83.7%、失業保険受給者の80.9%、日雇い労働者が最も低率で74.9%を示している。しかしながら、時々食べると答えた者はその逆となり、日雇い労働者が21.4%の高率を示し、失業保険受給者15.7%製造業従業者は11.9%と低率を示している。ここで注意を要することは、製造業従業者および失業保険受給者に比較して、この3階層中最も生活程度が低いと思われる日雇い労働者におけるみそ汁の摂取率が減少していることである。料理種類数から見ても、著しく貧弱な食生活構造を示していると考えられるこの層におけるみそ汁の低摂取率は、軽視できない問題であると思われる。

みそ汁摂取状況を年齢階級別に観察してみると次のごとくである。まず、規測的に「毎日食べる」ものの割合について見ると、全年齢階級を通じて

表 20 地域別みそ汁摂取状況

みそ汁摂取状況	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
	東京、名古屋	山形、金沢	広島、長崎
	実 数		
食べない	49	12	14
毎日食べる	3,141	1,128	587
時々食べる	463	136	202
不詳	136	28	2
計	3,789	1,304	805
	割 合 (%)		
食べない	1.3	0.9	1.7
毎日食べる	82.9	86.5	72.9
時々食べる	12.2	10.4	25.1
不詳	3.6	2.1	0.2
計	100.0	100.0	100.0

製造業従業者が最高で、日雇い労働者が最低率を示し、失業保険受給者が中間水準にある。ここで特徴的な点は、製造業従業者および失業保険受給者においては、きわめて規則的に、年齢の上昇にしたがって摂取率が高くなっていることである。高年齢ほど過去の食慣習に緊縛されていることと同時に、若い年齢層における旧慣習からの脱却と新しいパターンへの移行を示唆している。しかもこの新しい食慣習 behavior の形成の傾向は、失業保険受給者においていつそう顕著に現われている。小製造業従業者は、今日の製造業労働力の中で圧倒的な割合を占めていること、またここでは、都市のこのような労働者を対象としていることからして、労働力階級の一般的な型を示しているとみなしても大過ないであろう。

さらに、日雇い労働者においては、このみそ汁摂取の年齢階級別動向において、前二者のそれに見られたような年齢上昇に伴う増大といった規則的傾向が見られないことと、摂取率水準も著しく低位にあることは注目を要するであろう。

表 2 1 職業形態別、年齢別みそ汁摂取状況

年齢階級	みそ汁 摂取状況	実 数			割 合 (%)		
		製造業 従業者	失業保険 受給者	日雇い 労働者	製造業 従業者	失業保険 受給者	日雇い 労働者
15~29	食べない	33	9	1	1.5	2.6	4.3
	毎日食べる	1,757	255	17	82.1	73.9	73.9
	時々食べる	274	78	5	12.8	22.6	21.7
	不詳	77	3	-	3.6	0.9	-
	計	2,141	345	23	100.0	100.0	100.0
30~44	食べない	4	9	2	0.4	2.0	1.3
	毎日食べる	906	350	110	84.3	78.0	73.3
	時々食べる	132	84	34	12.3	18.7	22.7
	不詳	33	6	4	3.1	1.3	2.7
	計	1,077	449	150	100.0	100.0	100.0
45~59	食べない	2	6	5	0.3	1.2	2.9
	毎日食べる	504	423	132	87.8	84.9	77.2
	時々食べる	58	57	32	10.1	11.4	18.7
	不詳	10	12	2	1.7	2.4	1.2
	計	574	498	171	100.0	100.0	100.0
60歳 以上	食べない	1	1	2	0.7	0.4	2.4
	毎日食べる	125	211	60	90.6	87.9	73.2
	時々食べる	5	21	20	3.6	8.7	24.4
	不詳	7	7	-	5.1	2.9	-
	計	138	240	82	100.0	100.0	100.0
不詳	食べない	-	-	-	-	-	-
	毎日食べる	4	-	-	40.0	-	-
	時々食べる	1	-	-	10.0	-	-
	不詳	5	-	-	50.0	-	-
	計	10	-	-	100.0	-	-
計	食べない	40	25	10	1.0	1.6	2.3
	毎日食べる	3,298	739	319	83.7	80.9	74.9
	時々食べる	470	240	91	11.9	15.7	21.4
	不詳	132	28	6	3.4	1.8	1.4
	計	3,940	1,532	426	100.0	100.0	100.0

表 2 2 地域別、年齢別みそ汁摂取状況

年齢階級	みそ汁 摂取状況	実 数			割 合 (%)		
		大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
15~29	食べない	35	8	-	1.9	1.8	-
	毎日食べる	1,517	369	138	80.4	82.9	78.0
	時々食べる	262	56	39	13.9	12.6	22.0
	不詳	73	7	-	3.9	1.6	-
	計	1,887	445	177	100.0	100.0	100.0
30~44	食べない	10	2	3	1.1	0.4	1.1
	毎日食べる	738	421	209	80.5	88.6	73.6
	時々食べる	136	44	70	14.8	9.3	24.6
	不詳	33	8	2	3.6	1.7	0.7
	計	917	475	284	100.0	100.0	100.0
45~59	食べない	2	2	9	0.3	0.7	3.4
	毎日食べる	615	259	185	90.6	86.3	70.1
	時々食べる	48	29	70	7.1	9.7	26.5
	不詳	14	10	-	2.1	3.3	-
	計	679	300	264	100.0	100.0	100.0
60歳 以上	食べない	2	-	2	0.7	-	2.5
	毎日食べる	267	74	55	90.2	88.1	68.8
	時々食べる	16	7	23	5.4	8.3	28.8
	不詳	11	3	-	3.7	3.6	-
	計	296	84	80	100.0	100.0	100.0
不詳	食べない	-	-	-	-	-	-
	毎日食べる	4	-	-	40.0	-	-
	時々食べる	1	-	-	10.0	-	-
	不詳	5	-	-	50.0	-	-
	計	10	-	-	100.0	-	-
計	食べない	49	12	14	12	0.9	1.7
	毎日食べる	3,141	1,128	587	82.9	86.5	72.9
	時々食べる	463	136	202	12.2	10.4	25.1
	不詳	136	28	2	3.6	2.1	0.2
	計	3,789	1,304	805	100.0	100.0	100.0

表 2 3 職業形態別、地域別、年齢別みそ汁摂取状況

(1) 製造業従業者

年齢階級	みそ汁 摂取状況	実 数			割 合 (%)		
		大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
		東京 名古屋	山形 金沢	長 崎	東京 名古屋	山形 金沢	長 崎
15~29	食べない	25	8	-	1.6	2.1	-
	毎日食べる	1,316	318	123	81.8	83.5	80.9
	時々食べる	196	49	29	12.2	12.9	19.1
	不詳	71	6	-	4.4	1.5	-
	計	1,608	381	152	100.0	100.0	100.0
30~44	食べない	2	1	1	0.4	0.3	0.6
	毎日食べる	542	328	128	82.2	89.4	80.0
	時々食べる	71	30	31	12.9	8.2	19.4
	不詳	25	8	-	4.5	2.2	-
	計	550	367	160	100.0	100.0	100.0
45~59	食べない	-	1	1	-	0.5	1.3
	毎日食べる	281	164	59	89.8	89.6	75.6
	時々食べる	25	15	18	8.0	8.2	23.1
	不詳	7	7	-	2.2	1.6	-
	計	313	183	78	100.0	100.0	100.0
60歳 以上	食べない	1	-	-	1.1	-	-
	毎日食べる	80	31	14	87.9	96.9	93.3
	時々食べる	3	1	1	3.3	3.1	6.7
	不詳	7	-	-	7.7	-	-
	計	91	32	15	100.0	100.0	100.0
不詳	食べない	-	-	-	-	-	-
	毎日食べる	4	-	-	40.0	-	-
	時々食べる	1	-	-	10.0	-	-
	不詳	5	-	-	50.0	-	-
	計	10	-	-	100.0	-	-
計	食べない	28	10	2	1.1	1.0	0.5
	毎日食べる	2,133	841	324	82.9	87.3	80.0
	時々食べる	296	95	79	11.5	9.9	19.5
	不詳	115	17	-	4.5	1.8	-
	計	2,572	963	405	100.0	100.0	100.0

表 2 3 (つづき)

(2) 失業保険受給者

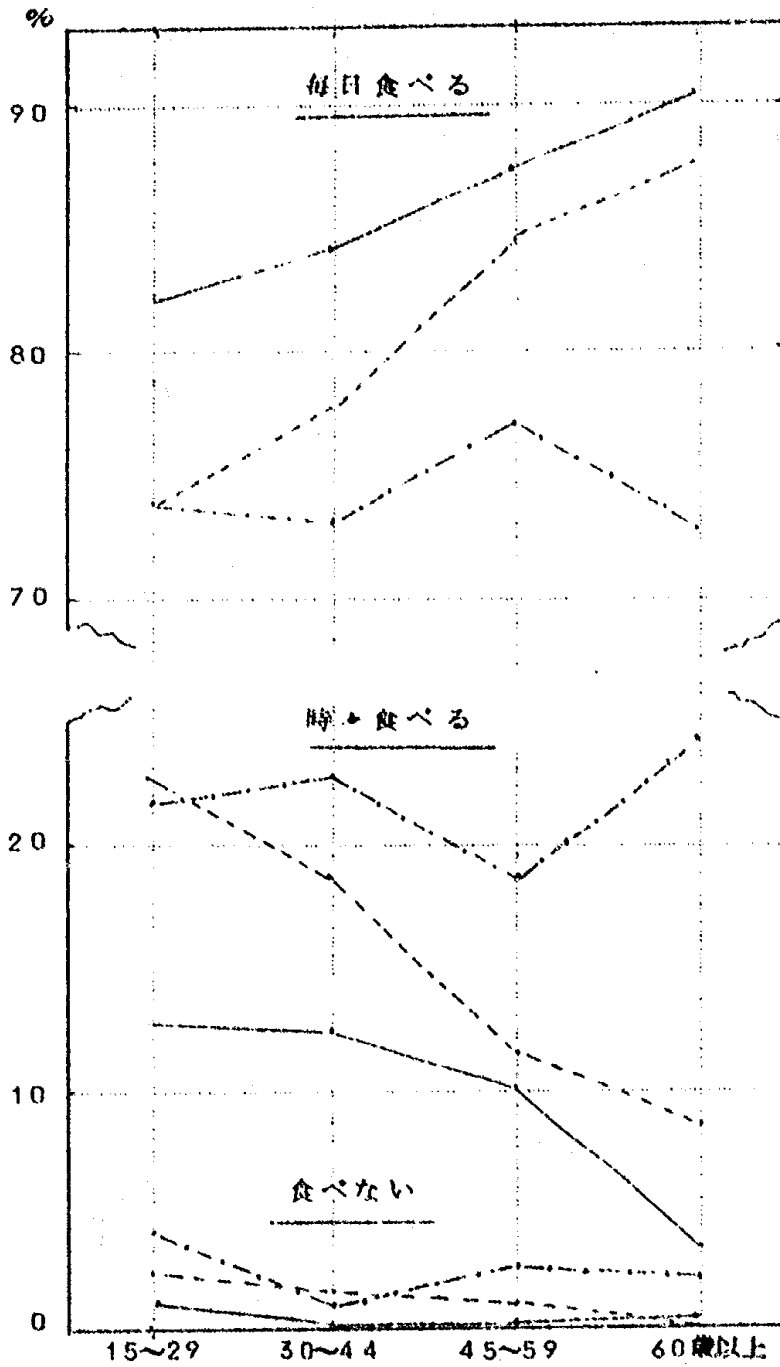
年齢階級	みそ汁 摂取状況	実 数			湖 合 (%)		
		大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
		東京 名古屋	山形、金沢	広島、長崎	東京 名古屋	山形、金沢	広島、長崎
15~29	食べない	9	-	-	3.5	-	-
	毎日食べる	185	55	15	71.2	91.7	60.0
	時々食べる	64	4	10	24.6	6.7	40.0
	不詳	2	1	-	0.7	1.6	-
	計	260	60	25	100.0	100.0	100.0
30~44	食べない	6	1	2	2.2	1.5	1.9
	毎日食べる	216	62	72	78.3	91.2	68.6
	時々食べる	50	5	29	18.1	7.4	27.6
	不詳	4	-	2	1.4	-	1.9
	計	276	68	105	100.0	100.0	100.0
45~59	食べない	2	-	4	0.7	-	2.8
	毎日食べる	257	62	104	92.4	82.7	71.7
	時々食べる	14	6	37	5.0	8.0	25.5
	不詳	5	7	-	1.8	9.3	-
	計	278	75	145	100.0	100.0	100.0
60歳 以上	食べない	1	-	-	0.6	-	-
	毎日食べる	160	31	20	90.4	81.6	80.0
	時々食べる	12	4	5	6.8	10.5	20.0
	不詳	4	3	-	2.3	7.9	-
	計	177	38	25	100.0	100.0	100.0
不詳	食べない	-	-	-	-	-	-
	毎日食べる	-	-	-	-	-	-
	時々食べる	-	-	-	-	-	-
	不詳	-	-	-	-	-	-
	計	-	-	-	-	-	-
計	食べない	18	1	6	1.8	0.4	2.0
	毎日食べる	818	210	211	82.5	87.1	70.3
	時々食べる	140	19	81	14.1	7.9	27.0
	不詳	15	11	2	1.5	4.6	0.7
	計	991	241	300	100.0	100.0	100.0

表 2 3 (つづき)

(3) 日雇い労働者

年齢階級	みそ汁 摂取状況	実 数			率 合 計(%)		
		大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
		東京 名古屋	山形、金沢	広島、長崎	東京 名古屋	山形、金沢	広島、長崎
15~29	食べない	1	-	-	5.3	-	-
	毎日食べる	16	1	-	84.2	25.0	-
	時々食べる	2	3	-	10.5	7.5	-
	不詳	-	-	-	-	-	-
	計	19	4	-	100.0	100.0	-
30~44	食べない	2	-	-	2.2	-	-
	毎日食べる	70	31	9	76.9	77.5	47.4
	時々食べる	15	9	10	16.5	22.5	52.6
	不詳	4	-	-	4.4	-	-
	計	91	40	19	100.0	100.0	100.0
45~59	食べない	-	1	4	-	2.4	9.8
	毎日食べる	77	33	22	87.5	78.6	53.7
	時々食べる	9	8	15	10.2	19.0	36.6
	不詳	2	-	-	2.3	-	-
	計	88	42	41	100.0	100.0	100.0
60歳以上	食べない	-	-	2	-	-	5.0
	毎日食べる	27	12	21	96.4	85.7	52.5
	時々食べる	1	2	17	3.6	14.3	42.5
	不詳	-	-	-	-	-	-
	計	28	14	40	100.0	100.0	100.0
不詳	食べない	-	-	-	-	-	-
	毎日食べる	-	-	-	-	-	-
	時々食べる	-	-	-	-	-	-
	不詳	-	-	-	-	-	-
	計	-	-	-	-	-	-
計	食べない	3	1	6	1.3	1.0	6.0
	毎日食べる	190	77	52	84.1	77.8	52.0
	時々食べる	27	22	42	11.9	22.2	42.0
	不詳	6	-	-	2.7	-	-
	計	226	100	100	100.0	100.0	100.0

図8 職業形態別、年齢階級別みそ汁摂取率



— 製造業従業者

--- 失業保険受給者

--- 日雇い労働者

表 2 4 職業形態別みそ汁摂取状況分布

みそ汁摂取回数	製造業従業者	失業保険受給者	日雇い労働者
	実	数	割合 (%)
1 回	2,241	819	21.4
2 回	824	265	7.0
3 回	82	93	6
不詳	151	62	2.9
計	3,298	1,239	31.9
	割合	割合 (%)	割合 (%)
1 回	68.0	66.1	67.1
2 回	25.0	21.4	21.9
3 回	2.5	7.5	1.9
不詳	4.6	5.0	9.1
計	100.0	100.0	100.0

注：毎日みそ汁を摂取するもののみ、回数は1人1日当り。

以上のごとき、「毎日食べる」ものの動向を反映して、「時々食べる」ものごと、「食べない」ものの割合は、ほぼいずれの年齢階級においても日雇い労働者が最高率を示し、製造業従業者が最低率を示している。

次に地域別に観察してみたが、あまり明確な傾向ははあくできなかつた。

さらに、みそ汁摂取者の中で毎日食べているもののみについて1日何回摂取しているか検討してみると、各階層の間には著しい変化は見られない。3階層ともに1日1回食べているものが最も多く、60%以上も占めている。1日2回食べているものがそれぞれ20%以上を示し、3回食べているものとなると著しく少なく、失業保険受給者で7.5%の最高を示し、製造業従業者、日雇い労働者では2%前後となつている。

これを地域別に見るとかなり著しい変化が見られる。まず第一に1日1回食べているものは大都市、中都市(回)においては76.4%ならびに87.7%の高率を示しているが、中都市(付)では31.8%と低率を示している。ま

表 2 5 地域別みそ汁摂取状況分布

みそ汁摂取回数	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
	実		数
1 回	2,400	359	515
2 回	509	601	49
3 回	63	111	7
不詳	169	57	16
計	3,141	1,128	587
	割合		(%)
1 回	76.4	31.8	87.7
2 回	16.2	53.3	8.3
3 回	2.0	9.8	1.2
不詳	5.4	5.1	2.7
計	100.0	100.0	100.0

注：表 2 4 と同様

た 1 日 2 回摂取しているものを見ると、中都市(ロ)においては 8.3% の低率であるのに対して、中都市(イ)においては 53% という圧倒的な高率を示している。また 1 日 3 回摂取しているものを見た場合も、中都市(イ)が 9.8% といつた高率を示し、他は 2% 前後を示しているのにすぎないのである。したがって中都市(イ)山形、金沢においては、みそ汁を 1 日 2 回以上食べているものが 60% 以上を占めているわけで、大都市、中都市の長崎、広島とは全く異なつた分布構造を示している。このことは、山形、金沢、といつた寒冷地帯の地方的な強い慣習によるものであることを示唆している。

次にみそ汁を時々摂取しているものを取り上げ、1 週間に何回食べているかを集計してみた「時々食べるもの」は、既述のごとく、日雇い労働者において最も高く(21%)、製造業従業者で最も低い(12%)ことを考慮に入れておく必要がある。

地域別に見ると、製造業従業者および失業保険受給者、日雇い労働

表 2 6 地域別 1 週間におけるみそ汁摂取状況

1 週間の 摂取回数	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
	東京・名古屋	山形・金沢	広島・長崎
	実		数
1 回	4 0	1 1	1 9
2 回	6 2	1 7	3 7
3 回	1 6 2	4 0	7 8
4 回	1 0 7	3 6	4 6
5 回	5 4	1 0	1 8
6 回	1 8	1 1	2
不詳	2 0	1 1	2
計	4 6 3	1 3 6	2 0 2
	割		合 (%)
1 回	8.6	8.1	9.4
2 回	1 3.4	1 2.5	1 8.3
3 回	3 5.0	2 9.4	3 8.6
4 回	2 3.1	2 6.5	2 2.8
5 回	1 1.7	7.4	8.9
6 回	3.9	8.1	1.0
不詳	4.3	8.1	1.0
計	1 0 0.0	1 0 0.0	1 0 0.0

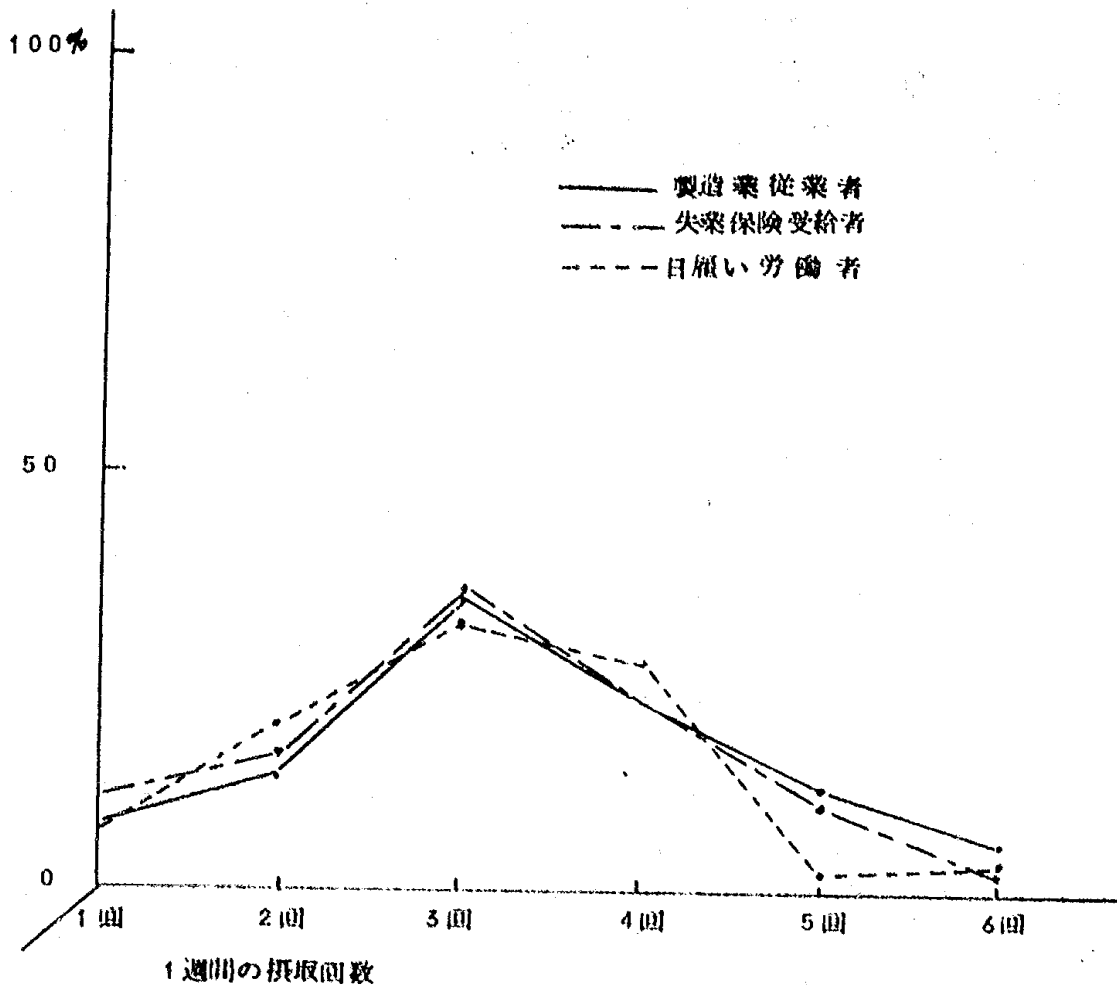
注：時々みそ汁を摂取するもののみについての集計

表 2 7 職業形態別、1 週間におけるみそ汁摂取状況

1 週間での 摂取回数	製造業従業者	失業保険受給者	日雇い労働者
	実 数		割合 (%)
1 回	37	26	7
2 回	60	38	18
3 回	164	87	29
4 回	110	54	25
5 回	55	25	2
6 回	23	5	3
不詳	21	5	7
計	470	240	91
	割合 (%)		割合 (%)
1 回	7.9	10.8	7.7
2 回	12.8	15.8	19.8
3 回	34.9	36.2	31.9
4 回	23.4	22.5	27.5
5 回	11.7	10.4	2.2
6 回	4.9	2.1	3.3
不詳	4.5	2.1	7.7
計	100.0	100.0	100.0

注：表 2 6 と同様

図 9. 職業形態別 1 週間におけるみそ汁摂取率

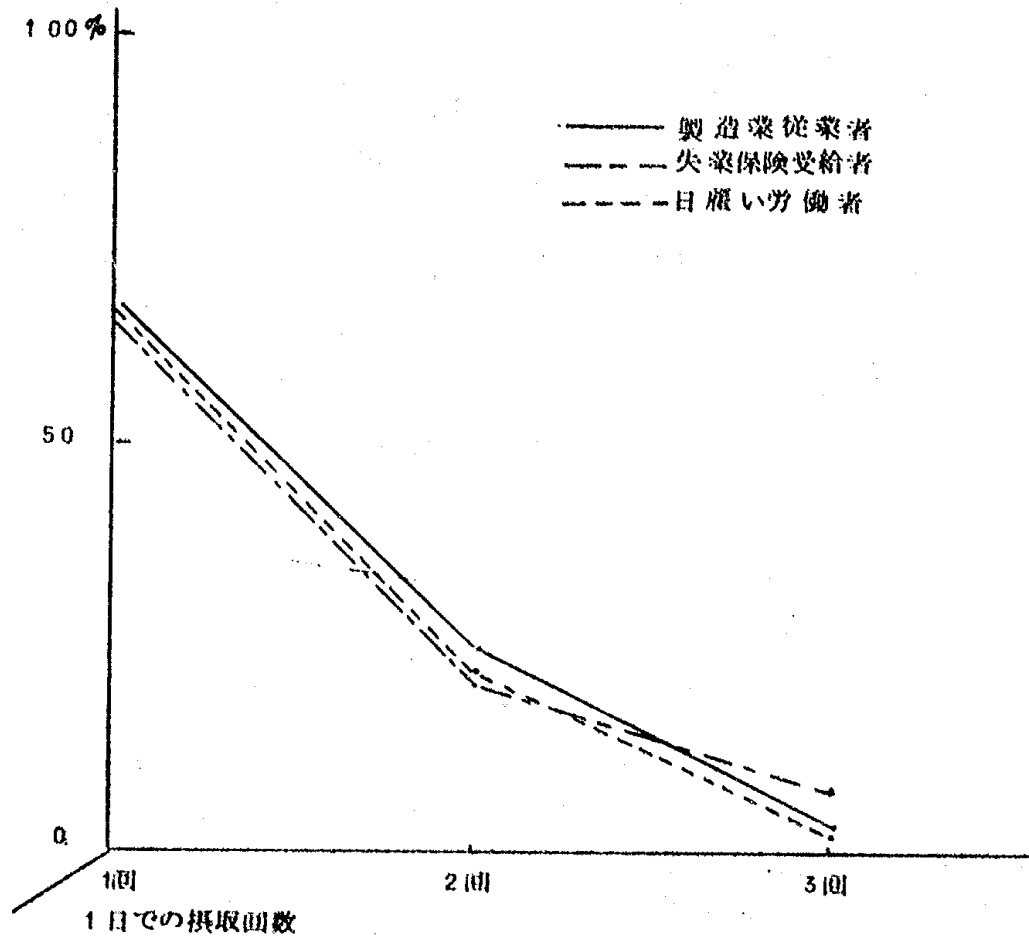


者のいずれの集団においても 1 週間に 3 回～4 回食するというものの割合は等しくほぼ 60% を占めている。いいかえると「時々食べるもの」といつたばあい大部分のものは一日おきに一回摂取している。以上の点は地域別に見てもほぼ同様である。

2. みそ汁の「み」について

みそ汁に「み」を入れるということは、ほぼ日本人のすべての人口の食習慣に根ざしているように思われる。このことは、たとえば「全然「み」を入れない者」の割合が 1% 以下であり、日雇い労働者においても 2% を

図 10. 職業形態別 1 日におけるみそ汁摂取率



示しているにすぎないことから十分に推測されるのである。しかし、この日雇い労働者の2%は、この層の生活水準から見ても留意を要するであろう。

次に幾種類の「み」を入れるかについて観察してみよう。職業形態別に見て注目すべきは、1種類しかとつていないものの割合と、3種類使用しているものの割合が、製造業従業者、失業保険受給者、日雇い労働者の序列に従って低下し、2種類使用しているものの割合が反対に上昇を示していることである。

以上のことは、これら3種類の対象において生活水準の格差の序列を示

表 28 職業形態別みそ汁の「み」について

「み」の摂取状況	製造業従業者		失業保険受給者		日雇い労働者	
	実	数	実	数	割合	率 (%)
全然入れない	14		9			8
入れる						
1種類	1,127		528			178
2種類	2,009		746			167
3種類以上	540		183			28
不詳	47		12			9
計	3,723		1,469			382
全然入れない	0.6		0.6			2.0
入れる						
1種類	32.7		35.7			45.6
2種類	52.1		50.5			42.8
3種類以上	13.4		12.4			7.2
不詳	1.2		0.8			2.3
計	100.0		100.0			100.0

峻していると解釈することができよう。日雇い労働者は前述のごとく、全然「み」を使用しないものゝ割合が絶対値では低いとしても、2%で最高率を示すとゝもに、1種類しか入れないものゝ割合が圧倒的に高く、2種類、3種類、使用するものは、製造業従業者および失業保険受給者に比較して特に低い水準を示していることは、依然としてこの階層の最低生活を如実に示していると推えよう。みそ汁の摂取がすでに観察してみたごとく、日本人の食慣習体系で不可欠であり、かつ主要な調理品目であることを肯定するならば、特に日雇い労働者といった低所得層のみそ汁の貧困さは、栄養上の観点からも最も考慮を要する点であろう。

図 1 1 職業形態別ならびに地域別
みそ汁の「み」産別分布

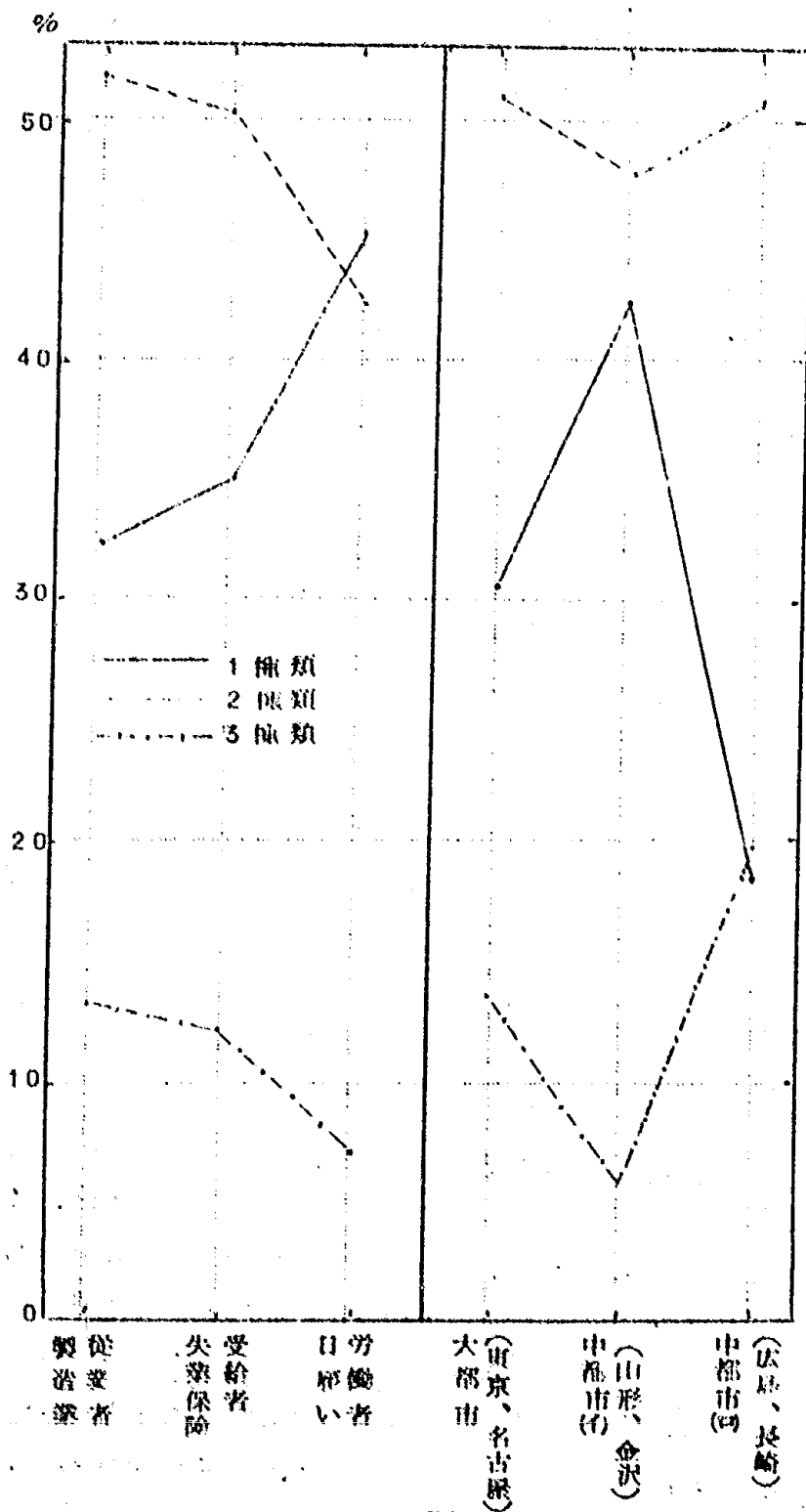


表 29 地域別みそ汁の「み」について

みそ汁の 摂取状況	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
	東京・名古屋	山形・金沢	広島・長崎
	実 数		
全然入れない	20	10	1
入れる			
1種類	1,124	543	166
2種類	1,860	612	450
3種類以上	500	79	172
不詳	40	27	1
計	3,544	1,271	790
	割 合 (%)		
全然入れない	0.6	0.8	0.1
入れる			
1種類	31.0	42.7	18.9
2種類	51.4	48.2	51.3
3種類以上	13.8	6.2	19.6
不詳	1.1	2.1	0.1
計	100.0	100.0	100.0

地域別に見ると、みそ汁摂取状況において観察したと同様な著しい地域差がみられる大都市においては、1種類種類の「み」を入れるものは31.0%、2種類になると51.4%と増している。中都市(イ)では、1種類種類の「み」を入れる者と2種類種類の「み」を入れるものは大体同水準を示している。また中都市(ロ)では、1種類種類の「み」を入れる者18.9%に対してその約3倍に近い者が2種類種類の「み」を入れており、3種類種類の「み」を入れている者も、前者の2都市に比較して最も高率で19.6%を示している。この点から見ても中都市(ロ)の広島、長崎においては、みそ汁を作る際、2種類ないし3種類種類の「み」を使用するものが71%に達していることは、この地域

表 3 0 職業形態別みそ汁のだしの種類別分布

だしの使用状況および種類	製造業従業者	失業保険受給者	日雇い労働者
	実		数
使っていない	126	54	33
使っている			
1. 煮干し	1,569	703	190
2. 花かつお	1,604	574	123
3. その他	177	50	11
4. 不詳	243	90	33
計	3,719	1,471	390
	割		合 (%)
使っていない	3.4	3.7	8.5
使っている			
1. 煮干し	42.2	47.8	48.7
2. 花かつお	43.1	39.0	31.5
3. その他	4.8	3.4	2.8
4. 不詳	6.5	6.1	8.5
計	100.0	100.0	100.0

の地方的慣習によるものではないかと想像されるが、栄養上の観点からも注目される傾向である。

3. みそ汁のだしについて

全然だしを使用しない者の割合を職業形態別に観察すると次のごとくなる。日雇い労働者においては最も高く8.5%を示し、製造業従業者、失業保険受給者では日雇い労働者の半分以上にすぎない。さらにだしの内容を1.煮干し、2.花かつお、3.その他、として検討してみると、日雇い労働者では煮干しを使うものが最も多く、ほとんど50%を示し、製造業従業者、

表 3 1 地域別みそ汁のだしの種類別分布

だしの使用状況および種類	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
	東京・名古屋	山形・金沢	広島・長崎
	実 数		
使っていない	110	94	9
使っている			
1. 煮干し	1,215	681	566
2. 花かつお	1,795	358	148
3. その他	164	47	27
4. 不詳	240	90	36
計	3,524	1,270	786
	割 合 (%)		
使っていない	3.1	7.4	1.1
使っている			
1. 煮干し	34.5	53.6	72.0
2. 花かつお	50.9	28.2	18.8
3. その他	4.7	3.7	3.4
4. 不詳	6.8	7.1	4.6
計	100.0	100.0	100.0

失業保険受給者よりも高率である。また花かつおの使用者率が製造業従業者、失業保険受給者において高く、日雇い労働者において低いことは、ある程度社会階級の性格を表わしているように思われる。

次に地域別に観察すると、だしを全然使っていない者が圧倒的に多いのは中都市(イ)の7.4%で他の2都市は著しく低率である。煮干しを使っている者は、大都市35%、中都市(イ)54%に比較して、中都市(ロ)は72.0%といった高率を示している。また花かつおを使用している者は大都市の51%に対して中都市(イ)、中都市(ロ)においてはその半分以下にすぎない。すなわち、中都市(ロ)における煮干しの使用率の高いこと、また大都市にお

いて花かつおの使用率が著しく高いことは、各都市別の生活意識や地方慣習上の差異によるものと推察される。

V 外食状況について

1. 社会階層別、地域別外食状況

職業形態別、外食状況を見ると次のごとくなる。ここでは日雇い労働者が2.7%の高率を示し、製造業従業者23.0%、失業保険受給者は最も低率で9.9%を示している。これを地域別にみると、大都市が22.1%の

表32 職業形態別、外食状況分布

食事状況	製造業従業者	失業保険受給者	日雇い労働者
	実数		割合 (%)
家で食べた	8,522	3,932	831
外で食べた	2,719	454	416
不詳	579	210	26
計	11,820	4,596	1,273
	割合 (%)		割合 (%)
家で食べた	72.1	85.6	65.3
外で食べた	23.0	9.9	32.7
不詳	4.9	4.6	2.0
計	100.0	100.0	100.0

高率を示し、中都市(イ)、中都市(ロ)においてはそれぞれ1.8%を示している。最近都市に住んでいる勤労者世帯において外食者が増加していると聞かれているが、この調査結果においても同様なことが見られる。地域別に見て外食者が大都市に多いこと、それから職業形態別には、日雇い労働者のそれが最も高率を示しているといった事態は、単に食生活の簡易化の表現であるとして、軽視される問題ではなく、特に日雇い労働者における外食率

表33 地域別外食状況分布

食事状況	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
	実 数		
家で食べた	8,304	3,039	1,942
外で食べた	2,410	740	439
不詳	175	128	34
計	10,889	3,907	2,415
	割 合 (%)		
家で食べた	76.3	77.8	80.4
外で食べた	22.1	18.9	18.2
不詳	1.6	3.3	1.4
計	100.0	100.0	100.0

の高さは、今後においても社会問題として考慮を必要とする問題ではないかと思われる。

次に職業形態別に見た年齢別外食状況について検討すると次のごとくである。日雇い労働者は多少不規則ではあるが、製造業従業者、失業保険受給者については、外食率が若年層において高率を示し、年齢の上昇とともに低率にあることがわかる。またこれと反対に自宅で食事をする者の割合は、年齢の上昇とともに高率になつている。すなわち、外食率の高低はある程度年齢と相関関係を持つているように思われる。しかし、職業別に見ると、いずれの年齢階級においても日雇い労働者において外食率が最も高く、次いで製造業従業者、失業保険受給者となつている。失業保険受給者の外食率が低いのは、失業状態にあることの当然の結果であろう。日雇い労働者について注目すべきことは、外食率が一般に最高率を示していることと、高年齢においても、外食率が低下しないという点であつて、60～69歳においても、30～44歳と同水準の36%を占めている。

日雇い労働者の外食の内容が、製造業従業者や失業保険受給者のそれに比較して質的に著しく劣つていることは容易に想像されるところであつて

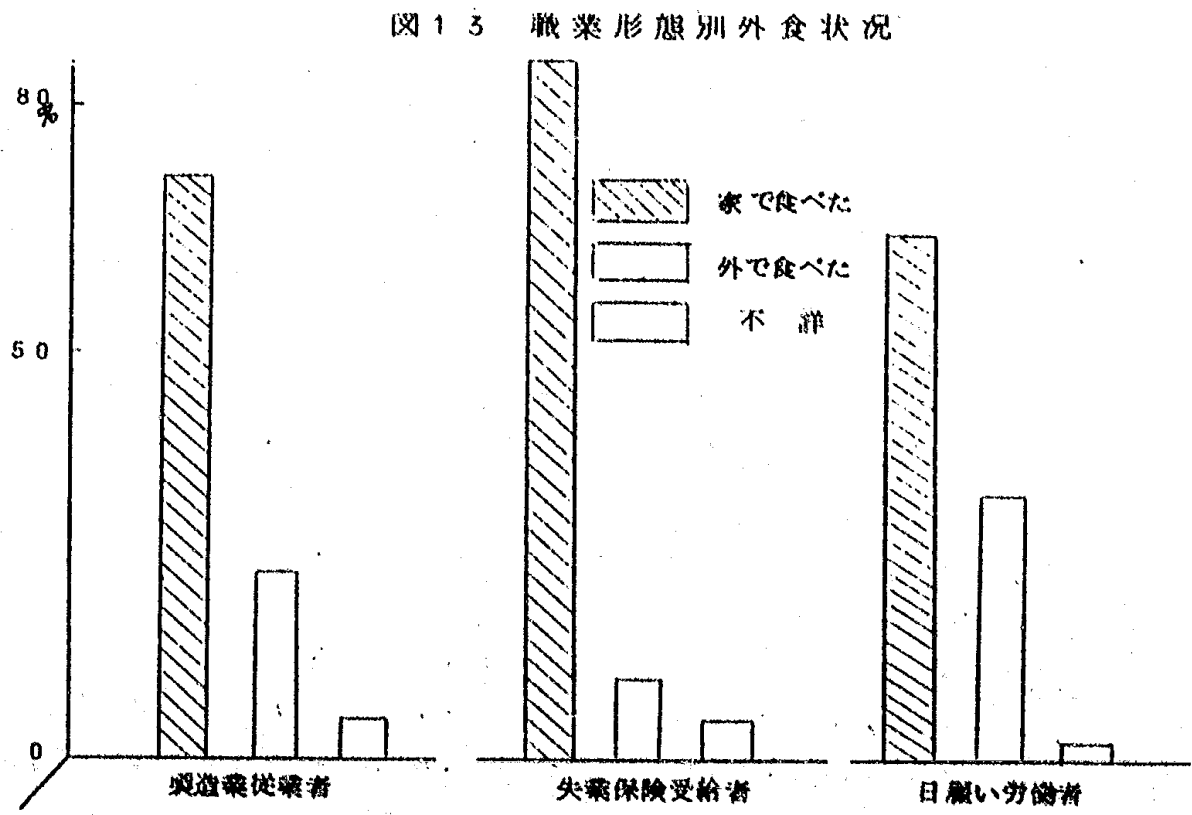
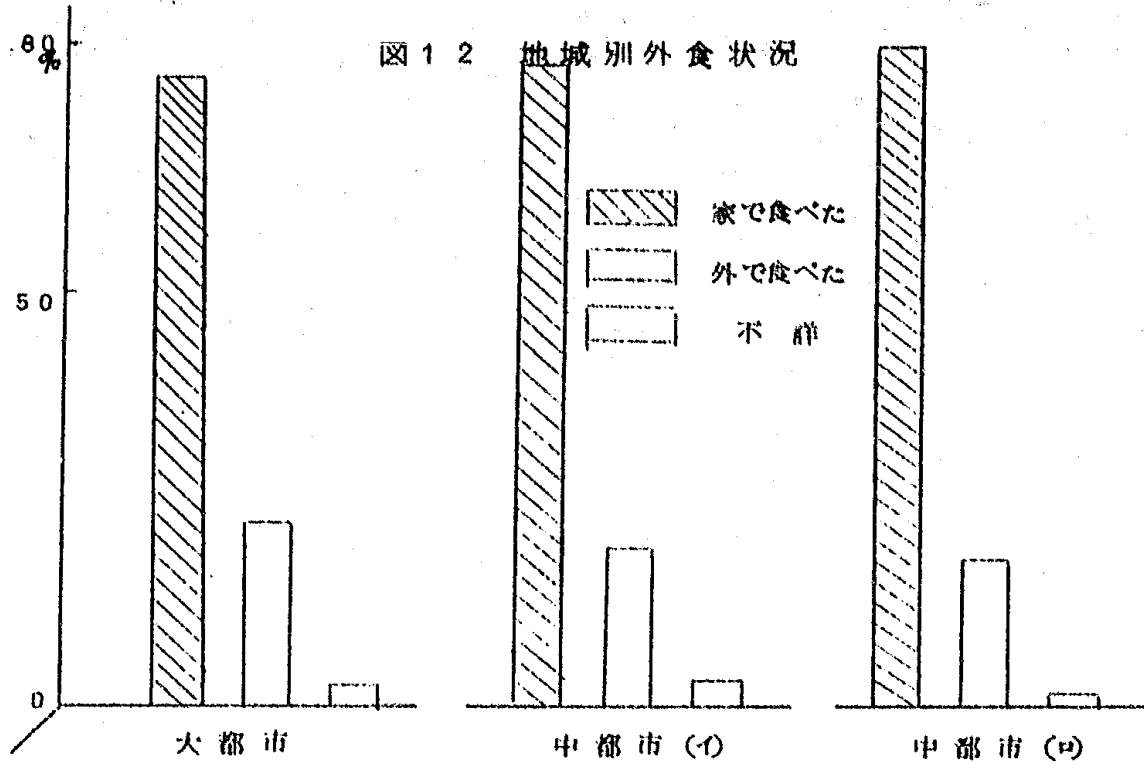


表 3 4 職業形態別、地域別、外食状況分布

食事状況	製造業従業者			失業保険受給者			日雇い労働者		
	大都市	中都市 (イ)	中都市 (ロ)	大都市	中都市 (イ)	中都市 (ロ)	大都市	中都市 (イ)	中都市 (ロ)
	実			数					
家で食べた	5453	2191	878	2454	649	829	397	199	235
外で食べた	1776	614	329	372	32	50	262	94	60
不詳	487	84	8	147	42	21	19	2	5
計	7716	2889	1215	2973	723	900	678	295	300
	率			合 (%)					
家で食べた	70.0	75.8	72.3	82.5	89.8	92.1	58.6	66.8	78.3
外で食べた	23.0	21.3	27.1	12.5	4.4	5.6	38.6	31.5	20.0
不詳	6.3	2.9	0.7	4.9	5.8	2.3	2.8	1.7	1.7
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注：食事延べ回数 100 についての分布

ここに問題が残されていると言えよう。

外食状況を地域別に、年齢階級別に観察すると、職業形態別において述べたごとく、年齢の上昇とともに外食率は低率となつていくことがわかる。

各職業形態別に各都市における年齢階級別の変化を検討してみると次のごとくなる。

製造業従業者および失業保険受給者においては、都市別に観察してみてもほとんど大きな変化は見られず、特に製造業従業者においては、大都市、中都市(イ)、中都市(ロ)においても同水準の外食率を示している。失業保険受給者においては、わずかに大都市の外食率が高くなつていくことが見られる。しかし、最も変化に富んでいるのは日雇い労働者である。大都市について見ると、15～29歳階級では、自宅で食事をする者よりも外食者の方がはるかに多くなつていくといつた事態さえ見られる。中都市(イ)におい

表 3 5 職業形態別、年齢別、外食状況分布

年齢階級	製造業従業者				失業保険受給者				日雇い労働者			
	外で 食べた	家で 食べた	不詳	計	家で 食べた	外で 食べた	不詳	計	家で 食べた	外で 食べた	不詳	計
	実 数											
15~29	4560	1,196	367	6,423	763	191	81	1,035	74	50	2	126
30~44	2,375	743	113	3,231	1,145	145	57	1,347	315	185	16	516
45~59	1,279	390	53	1,722	1,356	91	47	1,494	354	133	7	494
60~69	279	80	28	387	574	23	18	615	75	43	1	119
70歳 以上	22	5	-	27	94	4	7	105	13	5	-	18
不詳	7	5	9	21	-	-	-	-	-	-	-	-
計	8,522	2,719	379	11,620	3,932	454	210	4,596	831	416	26	1,273
	率 合 (%)											
15~29	71.0	23.3	5.7	100.0	73.7	18.5	7.8	100.0	58.7	39.7	1.6	100.0
30~44	73.5	23.0	3.5	100.0	85.0	10.8	4.2	100.0	61.0	35.9	3.1	100.0
45~59	74.3	22.6	3.1	100.0	90.8	6.1	3.1	100.0	71.7	26.9	1.4	100.0
60~69	72.1	20.7	7.2	100.0	93.3	3.7	2.9	100.0	63.0	36.1	0.8	100.0
70歳 以上	81.5	18.5	-	100.0	89.5	3.8	6.7	100.0	72.2	27.8	-	100.0
不詳	33.3	23.8	4.3	100.0	-	-	-	100.0	-	-	-	-
計	72.1	23.0	4.9	100.0	85.6	9.9	4.6	100.0	65.8	32.7	2.0	100.0

てみても、他の階層においては外食者が20%前後を示しているのにすぎないのに対し、この階層ではほぼ30%以上を示していることがわかるのである。しかし、中都市(中)では比較的低下水準の外食率を示している。以上のごとく日雇い労働者の外食状況は、地域別にみても著しい変化を示しており、その性格は複雑である。

そこで所得別に観察した場合はどうであろうかを検討してみる。各職業形態別について見ると、製造業従業者においては、所得が上昇すれば外食者が増加することがわかる。しかし、失業保険受給者においては、所得上昇にしたがって反対に外食者が少なくなっている。日雇い労働者においてはあまりはつきりした変化は見られなかった。

表 3 6 地域別 年齢別 外食状況

年齢階級	大都市				中都市				中都市(ロ)				総計			
	家で食べる	外で食べる	不詳	計	家で食べる	外で食べる	不詳	計	家で食べる	外で食べる	不詳	計	家で食べる	外で食べる	不詳	計
	数	数	数	数	数	数	数	数	数	数	数	数	数	数	数	数
15~29	3,932	1,315	414	5,661	1,038	264	33	1,335	427	158	3	588	5,397	1,737	450	7,584
30~44	2,007	612	132	2,751	1,106	279	40	1,425	722	182	14	918	3,835	1,073	186	5,094
45~59	1,622	363	52	2,037	689	166	41	896	678	85	14	777	2,989	614	107	3,710
60~69	630	102	33	765	186	30	11	227	112	14	3	129	928	146	47	1,121
70歳以上	106	13	4	123	20	1	3	24	3	-	-	3	129	14	7	150
不詳	7	5	9	21	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
計	8,304	2,410	653	11,367	3,039	740	128	3,907	1,942	439	34	2,415	13,278	3,584	797	17,659
割合 (%)																
15~29	69.5	23.2	7.3	100.0	77.8	19.8	2.5	100.0	72.6	26.9	0.5	100.0	71.2	22.9	5.9	100.0
30~44	73.0	22.2	4.8	100.0	77.6	19.6	2.8	100.0	78.6	19.8	1.5	100.0	75.3	21.1	3.7	100.0
45~59	79.6	17.8	2.6	100.0	76.9	18.5	4.6	100.0	87.3	10.9	1.8	100.0	80.6	16.5	2.9	100.0
60~69	82.4	13.3	4.3	100.0	81.9	13.2	4.8	100.0	86.8	10.9	2.3	100.0	82.8	13.0	4.2	100.0
70歳以上	86.2	10.6	3.3	100.0	83.3	4.2	12.5	100.0	100.0	-	-	100.0	86.0	9.3	4.7	100.0
不詳	33.3	23.8	42.9	100.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
計	73.1	21.2	5.7	100.0	77.8	18.9	3.3	100.0	80.4	18.2	1.4	100.0	75.2	20.3	4.5	100.0

表 3 7 職業形態別、地域別、年齢別外食状況分布

(1) 製造業従業者

年 齢 階 級	大 都 市				中 都 市 (イ)				中 都 市 (ロ)			
	家で 食へる	外で 食へる	不 詳	計	家で 食へる	外で 食へる	不 詳	計	家で 食へる	外で 食へる	不 詳	計
実 数												
15～29	3,369	1,119	336	4,824	871	242	30	1,143	320	135	1	456
30～44	1,187	384	79	1,650	839	230	32	1,101	349	129	2	480
45～59	698	211	30	939	406	125	18	549	175	54	5	234
60～69	173	52	24	249	72	17	4	93	34	11	-	45
70歳以上	19	5	-	24	3	-	-	3	-	-	-	-
不 詳	7	5	9	21	-	-	-	-	-	-	-	-
計	5,453	1,776	487	7,716	2,191	614	84	2,889	878	329	8	1,215
割 合 (%)												
15～29	69.8	23.2	7.0	100.0	76.2	21.2	2.6	100.0	70.2	29.6	0.2	100.0
30～44	71.9	23.3	4.8	100.0	76.2	20.9	2.9	100.0	72.7	26.9	0.4	100.0
45～59	74.3	22.5	3.2	100.0	74.0	22.8	3.3	100.0	74.8	23.1	2.1	100.0
60～69	69.5	20.9	9.6	100.0	77.4	18.3	4.3	100.0	75.6	24.4	-	100.0
70歳以上	79.2	20.8	-	100.0	100.0	-	-	100.0	-	-	-	-
不 詳	33.3	23.8	42.9	100.0	-	-	-	-	-	-	-	-
計	70.7	23.0	6.3	100.0	75.8	21.3	2.9	100.0	72.3	27.1	0.7	100.0

表 3 7 (つづき)

(2) 失業保険受給者

年 齢 階 級	大 都 市				中 都 市 (イ)				中 都 市 (ロ)			
	家で 食へる	外で 食へる	不 詳	計	家で 食へる	外で 食へる	不 詳	計	家で 食へる	外で 食へる	不 詳	計
	実 数											
15~29	540	164	76	780	159	18	3	180	64	9	2	75
30~44	673	115	40	828	188	8	8	204	284	22	9	315
45~59	744	71	19	834	200	4	21	225	412	16	7	435
60~69	421	18	8	447	87	2	7	96	66	3	3	72
70歳以上	76	4	4	84	15	-	3	18	3	-	-	3
不 詳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
計	2,454	372	147	2,973	649	32	42	723	829	50	21	900
	割 合 (%)											
15~29	69.2	21.0	9.7	100.0	88.3	1.0	1.7	100.0	85.3	12.0	2.7	100.0
30~44	81.3	13.9	4.8	100.0	92.2	3.9	3.9	100.0	90.2	7.0	2.9	100.0
45~59	89.2	8.5	2.3	100.0	88.9	1.8	9.3	100.0	94.7	3.7	1.6	100.0
60~69	94.2	4.0	1.8	100.0	90.6	2.1	7.3	100.0	91.6	4.2	4.2	100.0
70歳以上	90.5	4.8	4.8	100.0	83.3	-	16.7	100.0	100.0	-	-	100.0
不 詳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
計	82.5	12.5	4.9	100.0	89.8	4.4	5.8	100.0	92.1	5.6	2.3	100.0

表 37 (つづき)

(3) 日雇い労働者

年 齢 階 級	大 都 市				中 都 市 (イ)				中 都 市 (ロ)			
	家で 食へる	外で 食へる	不詳	計	家で 食へる	外で 食へる	不詳	計	家で 食へる	外で 食へる	不詳	計
実 数												
15～29	23	32	2	57	8	4	-	12	43	14	-	57
30～44	147	113	13	273	79	41	-	120	89	31	3	123
45～59	180	81	3	264	83	37	2	122	91	15	2	108
60～69	36	32	1	69	27	11	-	38	12	-	-	12
70歳以上	11	4	-	15	2	1	-	3	-	-	-	-
不詳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
計	397	262	19	678	199	94	2	295	235	60	5	300
割 合 (%)												
15～29	40.4	56.1	3.5	100.0	66.7	33.3	-	100.0	75.4	24.6	-	100.0
30～44	53.8	41.4	4.8	100.0	65.8	34.2	-	100.0	72.4	25.2	2.4	100.0
45～59	68.2	30.7	1.1	100.0	68.0	30.3	1.6	100.0	84.3	13.9	1.9	100.0
60～69	52.2	46.4	1.4	100.0	71.1	28.9	-	100.0	100.0	-	-	100.0
70歳以上	73.3	26.7	-	100.0	66.7	33.3	-	100.0	-	-	-	-
不詳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
計	58.6	38.6	2.8	100.0	64.8	31.5	1.7	100.0	72.3	27.1	0.7	100.0

表 3 8 職業形態別・所得別・外食状況分布

所得階級	製造業従業員				失業保険受給者				日雇い労働者			
	家で食べる	外で食べる	不詳	計	家で食べる	外で食べる	不詳	計	家で食べる	外で食べる	不詳	計
	実 数											
a	2,007	548	163	2,718	370	73	25	468	617	358	22	997
b	2,345	751	117	3,213	975	116	64	1,155	114	31	2	147
c	1,408	461	57	1,926	350	110	48	1,008	37	6	4	49
d	899	320	47	1,266	668	59	26	753	15	6	-	21
e	1,133	379	48	1,560	1,014	88	35	1,137	32	9	1	42
不詳	730	259	147	1,136	55	8	12	75	16	4	-	20
計	8,522	2,718	579	11,819	3,932	454	210	4,596	931	416	29	1,276
	割合 (%)											
a	73.8	20.2	6.0	100.0	79.1	15.6	5.3	100.0	61.9	35.9	2.2	100.0
b	73.0	23.4	3.6	100.0	84.4	10.0	5.5	100.0	77.6	21.1	1.4	100.0
c	73.1	23.9	3.0	100.0	84.3	10.9	4.8	100.0	75.5	16.3	8.2	100.0
d	71.0	25.3	3.7	100.0	88.7	7.8	3.5	100.0	71.4	28.6	-	100.0
e	72.6	24.3	3.1	100.0	89.2	7.7	3.1	100.0	76.2	21.4	2.4	100.0
不詳	64.3	22.8	12.9	100.0	73.3	10.7	16.0	100.0	80.0	20.0	-	100.0
計	72.1	23.0	4.9	100.0	85.6	9.9	4.6	100.0	65.1	32.6	2.3	100.0

注：所得階級は次のように区分してある。

- a) 15,000円未満 b) 15,000~25,000円 c) 25,000~35,000円
 d) 35,000~45,000円 e) 45,000円以上

表 3 9 地域別，所得別外食状況分布

所得階級	大 都 市			中 都 市 市 庁			中 都 市 市 庁			途 計						
	家で 食べる	外で 食べる	不詳	家で 食べる	外で 食べる	不詳	家で 食べる	外で 食べる	不詳	家で 食べる	外で 食べる	不詳	計			
														数	数	数
a	1702	628	172	2502	799	225	27	1051	493	126	11	630	2994	979	210	4183
b	1822	526	136	2484	991	207	44	1242	621	165	3	789	3434	898	183	4515
c	1438	392	76	1906	526	124	22	672	531	63	11	405	2295	579	109	2983
d	1094	274	54	1422	277	73	13	363	211	38	6	255	1582	385	73	2040
e	1635	364	65	2064	323	87	16	426	221	25	3	249	2179	476	84	2739
不詳	613	225	150	988	123	24	9	156	65	22	-	87	801	271	159	1231
計	8304	2409	653	11366	3039	740	131	3910	1942	439	34	2415	13285	3588	818	17691
a	680	251	69	1000	760	214	26	1000	783	200	17	1000	716	234	50	1000
b	733	212	55	1000	798	167	35	1000	787	209	0.4	1000	761	199	41	1000
c	754	206	40	1000	783	185	33	1000	817	156	27	1000	769	194	37	1000
d	769	193	38	1000	763	201	36	1000	827	149	24	1000	775	189	36	1000
e	792	176	31	1000	758	204	38	1000	868	100	12	1000	796	174	31	1000
不詳	620	228	152	1000	788	154	58	1000	747	253	-	1000	651	220	129	1000
計	731	212	57	1000	777	189	34	1000	804	132	1.4	1000	751	203	46	1000

注：所得階級の区分は表 3 8 と同様

表 4 0 職業形態別，地域別，所得別 外食状況分布

(1) 製造業従業者

所得 階 級	大 都 市				中 都 市 (イ)				中 都 市 (ロ)			
	家で 食べた	外で 食べた	不詳	計	家で 食べた	外で 食べた	不詳	計	家で 食べた	外で 食べた	不詳	計
実 数												
a	1,260	337	140	1,739	559	144	20	723	188	67	3	258
b	1,210	412	85	1,707	756	193	32	981	379	146	-	525
c	919	302	48	1,269	378	113	7	498	111	46	2	159
d	646	224	39	909	177	64	5	246	76	32	3	111
e	838	283	34	1,155	224	77	14	315	71	17	-	90
不詳	580	217	141	938	97	23	6	126	53	19	-	72
計	5,453	1,775	487	7,715	2,191	614	84	2,889	878	329	8	1,215
割 合 (%)												
a	72.9	19.4	8.1	100.0	77.3	19.9	2.8	100.0	72.9	26.0	1.2	100.0
b	70.9	24.1	5.0	100.0	77.1	19.7	3.3	100.0	72.2	27.8	-	100.0
c	72.4	23.8	3.8	100.0	75.9	22.7	1.4	100.0	69.8	29.9	1.3	100.0
d	71.1	24.6	4.3	100.0	72.0	26.0	2.0	100.0	68.5	28.8	2.7	100.0
e	72.6	24.5	2.9	100.0	71.1	24.4	4.4	100.0	78.9	21.1	-	100.0
不詳	61.8	23.1	15.0	100.0	77.0	18.3	4.8	100.0	73.6	26.4	-	100.0
計	70.7	23.0	6.3	100.0	75.8	21.3	2.9	100.0	72.3	27.1	0.7	100.0

注：所得階級は表 3 8 と同様。

表 40 (つづき)

(2) 失業保険受給者

所得 階級	大 都 市				中 都 市 (イ)				中 都 市 (ロ)			
	家で 食べた	外で 食べた	不詳	計	家で 食べた	外で 食べた	不詳	計	家で 食べた	外で 食べた	不詳	計
実 数												
a	183	59	19	261	85	8	3	96	102	6	3	111
b	529	97	49	675	226	5	12	243	220	14	3	237
c	493	86	24	603	139	8	15	162	218	16	9	243
d	441	48	15	504	95	5	8	108	132	6	3	141
e	786	77	31	894	78	5	1	84	150	6	3	159
不詳	22	5	9	36	26	1	5	30	7	2	-	9
計	2454	372	147	2973	649	32	42	723	829	50	21	900
割 合 (%)												
a	70.1	22.6	7.3	100.0	88.5	8.3	3.1	100.0	91.9	5.4	2.7	100.0
b	78.4	14.4	7.2	100.0	93.0	2.1	4.9	100.0	92.8	5.9	1.3	100.0
c	81.8	14.2	4.0	100.0	85.8	4.9	9.3	100.0	89.7	6.6	3.7	100.0
d	87.5	9.5	3.0	100.0	88.0	4.6	7.4	100.0	93.6	4.3	2.1	100.0
e	87.9	8.6	3.5	100.0	92.9	5.9	1.2	100.0	94.3	3.8	1.9	100.0
不詳	61.1	14.0	24.9	100.0	86.7	3.3	9.9	100.0	77.8	22.2	-	100.0
計	82.5	12.5	4.9	100.0	89.8	4.4	5.8	100.0	92.1	5.6	2.3	100.0

表40 (つづき)

(3) 日雇い労働者

所得階級	大都市				中都市(イ)				中都市(ロ)			
	家で食べた	外で食べた	不詳	計	家で食べた	外で食べた	不詳	計	家で食べた	外で食べた	不詳	計
	実数											
a	259	232	13	504	155	73	4	232	203	53	5	261
b	83	17	2	102	9	9	-	18	22	5	-	27
c	26	4	4	34	9	3	-	12	2	1	-	3
d	7	2	-	9	5	4	-	9	3	-	-	3
e	11	4	-	15	21	5	1	27	-	-	-	-
不詳	11	3	-	14	-	-	-	-	5	1	-	6
計	397	262	19	678	199	94	5	298	235	60	5	300
	割合 (%)											
a	51.4	46.0	2.6	100.0	66.8	31.5	1.7	100.0	77.8	20.3	1.9	100.0
b	81.4	16.7	1.9	100.0	50.0	50.0	-	100.0	81.5	18.5	-	100.0
c	76.5	11.7	11.7	100.0	75.0	25.0	-	100.0	66.7	33.3	-	100.0
d	77.8	22.2	-	100.0	55.6	44.4	-	100.0	100.0	-	-	100.0
e	73.3	26.7	-	100.0	77.8	18.5	3.7	100.0	-	-	-	100.0
不詳	78.6	21.4	-	100.0	-	-	-	-	33.3	16.7	-	100.0
計	58.6	38.4	2.8	100.0	66.8	31.5	1.7	100.0	72.3	27.1	0.7	100.0

2. 朝・昼・夕の3食から見た外食状況

次に外食状況が1日3食のうち、どの食事においてとられているかを観察した。大体においてどの職業形態でも常態的に予想されるごとく昼食時における外食率が高くなっている。しかし、日雇い労働者における外食状況は他の階層とは少々異なっており、昼食ばかりではなく、朝食、夕食においても20%以上の外食率が認められる。

表4 (1) 職業形態別、地域別朝・昼・夕における外食状況分布

(1) 実数

食事状況	製造業従業者			失業保険受給者			日雇い労働者			総数		
	大都市	中核市(市)	中核市(市)	大都市	中核市(市)	中核市(市)	大都市	中核市(市)	中核市(市)	大都市	中核市(市)	中核市(市)
	家で食べた	2263	919	397	897	228	291	164	94	90	3,324	1,241
外で食べた	112	10	6	30	-	-	54	4	8	196	14	14
不詳	197	34	2	64	13	9	8	2	2	269	49	13
計	2572	963	405	991	241	300	226	100	100	3,789	1,304	805
家で食べた	1,012	366	95	660	195	250	77	13	53	1,749	574	398
外で食べた	1,405	566	307	279	29	38	143	84	45	1,827	679	390
不詳	155	31	3	52	17	12	6	3	2	213	51	17
計	2572	963	405	991	241	300	226	100	100	3,789	1,304	805
家で食べた	2,178	906	386	897	226	288	156	92	92	3,231	1,224	766
外で食べた	259	38	16	63	3	12	65	6	7	387	47	35
不詳	135	19	3	31	12	-	5	-	-	171	31	3
計	2,572	963	405	991	241	300	226	98	99	3,789	1,302	804

表 4 1 就業形態別、地域別朝・昼・夕における
(2) 朝外食状況分布

食事状況	製造業従業者			失業保険受給者			日雇い労働者			総数			
	大都市	中都市	中都市	大都市	中都市	中都市	大都市	中都市	中都市	大都市	中都市	中都市	
	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	
朝	家で食べた	88.0	95.4	98.0	90.5	94.6	97.0	72.6	94.0	90.0	87.7	95.2	96.6
	外食で食べた	4.4	1.0	1.5	3.0	-	-	23.9	4.0	8.0	5.2	1.1	1.7
	不詳	7.7	3.5	0.5	6.5	5.4	3.0	3.5	2.0	2.0	7.1	3.8	1.6
	計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
昼	家で食べた	39.3	38.0	23.5	66.6	80.9	83.3	34.1	13.0	55.0	46.2	44.0	49.4
	外食で食べた	54.6	58.8	75.8	23.2	12.0	12.7	63.3	84.0	45.0	48.2	52.1	48.4
	不詳	6.0	3.2	0.7	5.2	7.1	4.0	2.7	3.0	2.0	5.6	3.9	2.1
	計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
夕	家で食べた	84.7	94.1	95.3	90.5	93.8	96.0	69.0	93.9	92.9	85.3	93.9	95.2
	外食で食べた	10.1	3.9	4.0	6.4	1.2	4.0	28.8	6.1	7.1	10.2	3.6	4.3
	不詳	5.2	2.0	0.7	3.1	5.0	-	2.2	-	-	4.5	2.4	0.4
	計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

VI 飲酒状況について

まず職業形態別に飲酒状況を見ると、日雇い労働者では、飯酒者の割合が最も高率を示しているのに対して、製造業従業者では最低率を示しているのである。

図 1 4. 職業形態別飲酒状況

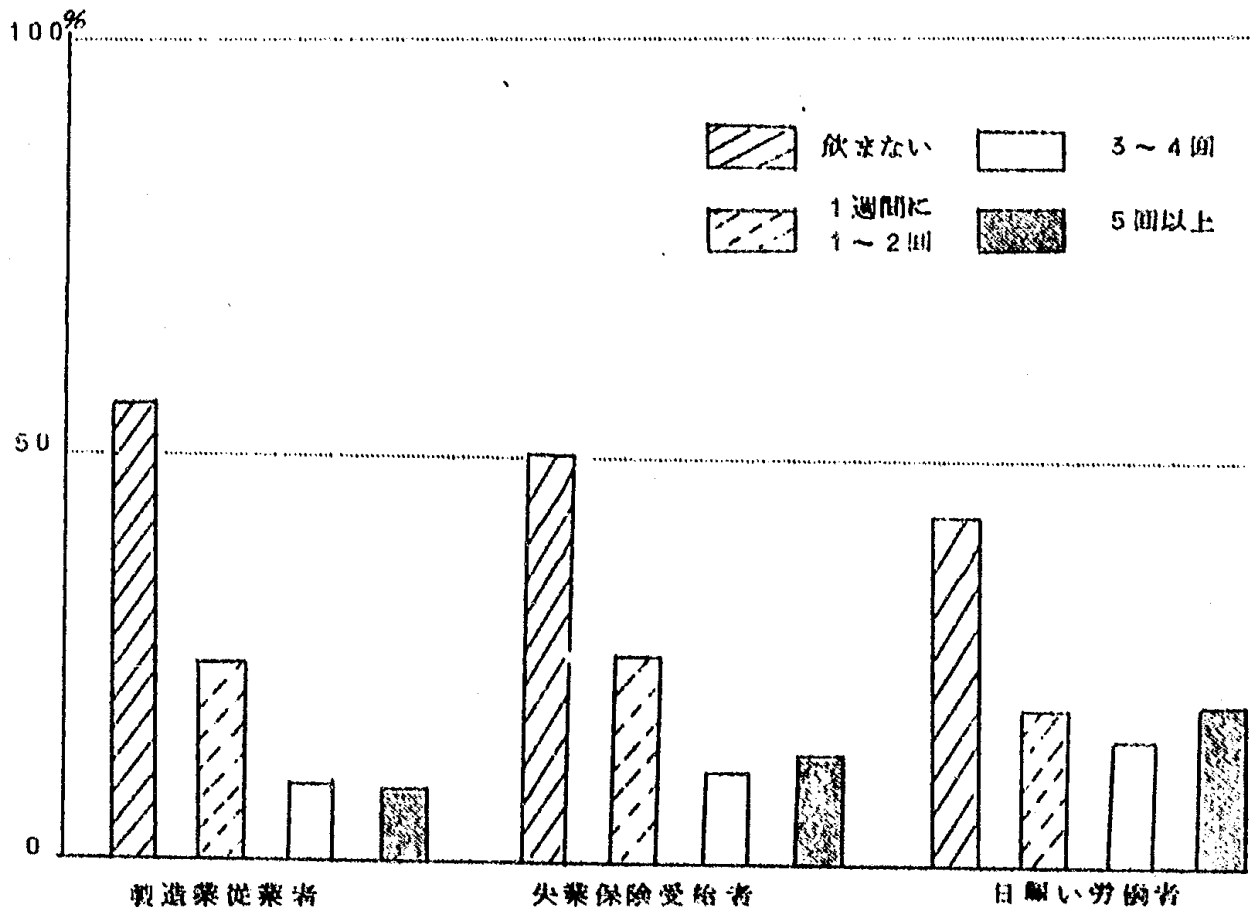


表 4 2 職業形態別飲酒状況

飲酒状況	製造業従業者	失業保険受給者	日雇い労働者
	実 数		
飲まない	2,058	736	177
飲む(1週間)			
1~2	889	374	80
3~4	347	159	64
5回以上	321	189	82
不詳	162	44	19
計	3,777	1,502	422
	割合 (%)		
飲まない	54.5	49.0	41.9
飲む(1週間)			
1~2	23.5	24.9	19.0
3~4	9.2	10.6	15.2
5回以上	8.5	12.6	19.4
不詳	4.3	2.9	4.5
計	100.0	100.0	100.0

注：「飲む」欄内の数字は週数を示す。しかし1回の量は示されていない。

表 4 3 地域別飲酒状況

飲酒状況	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
	東京、名古屋	山形、金沢	広島、長崎
実 数			
飲まない	2,050	523	398
飲む(1週間)			
1～2	777	401	165
3～4	296	177	97
5回以上	347	114	131
不詳	162	51	12
計	3,632	1,266	803
割合(%)			
飲まない	56.4	41.3	49.6
飲む(1週間)			
1～2	21.4	31.7	20.5
3～4	8.1	14.0	12.1
5回以上	9.5	9.0	16.3
不詳	4.5	4.0	1.5
計	100.0	100.0	100.0

注：表 4 2 の注参照。

表 4 4 職業形態別、年齢別飲酒状況
(1) 製造業従業者

年齢階級	飲酒状況	実 数			割 合 (%)		
		大都市	中都市(行)	中都市(回)	大都市	中都市(行)	中都市(回)
		東京名古屋	山形金沢	長崎	東京名古屋	山形金沢	長崎
15~29	飲まない 飲む(1週間)	1,047	181	111	688	486	73.0
	1~2	290	117	24	19.1	31.4	15.8
	3~4	58	44	9	3.8	11.8	5.9
	5回以上	37	10	5	2.4	2.7	3.3
	不詳	90	17	3	5.9	4.6	2.0
	計	1,522	369	152	100.0	100.0	100.0
30~44	飲まない 飲む(1週間)	233	123	74	44.6	34.2	46.5
	1~2	140	122	41	16.8	33.9	25.8
	3~4	65	62	24	12.4	17.2	15.1
	5回以上	68	41	18	13.0	11.4	11.3
	不詳	17	12	2	3.3	3.3	1.3
	計	523	360	159	100.0	100.0	100.0
45~59	飲まない 飲む(1週間)	129	71	28	42.6	39.7	36.4
	1~2	70	51	14	23.1	28.5	18.2
	3~4	34	24	15	11.2	13.4	19.5
	5回以上	60	27	19	19.8	15.1	24.7
	不詳	10	6	1	3.3	3.4	1.3
	計	303	179	77	100.0	100.0	100.0
60歳以上	飲まない 飲む(1週間)	43	7	8	52.4	21.9	53.3
	1~2	9	6	2	11.0	25.0	13.3
	3~4	6	6	-	7.3	18.7	-
	5回以上	22	9	5	26.8	28.1	33.3
	不詳	2	2	-	2.4	6.2	-
	計	82	32	15	100.0	100.0	100.0
不詳	飲まない 飲む(1週間)	3	-	-	75.0	-	-
	1~2	1	-	-	25.0	-	-
	3~4	-	-	-	-	-	-
	5回以上	-	-	-	-	-	-
	不詳	-	-	-	-	-	-
	計	4	-	-	100.0	-	-
計	飲まない 飲む(1週間)	1,455	382	221	59.8	40.6	54.8
	1~2	510	298	81	21.0	31.7	20.1
	3~4	163	136	48	6.7	14.5	11.9
	5回以上	187	87	47	7.7	9.3	11.7
	不詳	119	37	6	4.9	3.9	1.5
	計	2,434	940	403	100.0	100.0	100.0

注：表 4 2 の注参照。

表 4 4 (つづき)

(2) 失業保険受給者

年齢階級	飲酒状況	実 数			割 合 (%)		
		大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
		東京 名古屋	山形 金沢	広島 長崎	東京 名古屋	山形 金沢	広島 長崎
15~29	飲まない	129	32	12	50.0	53.3	48.0
	飲む						
	1~2	93	20	10	36.0	33.3	40.0
	3~4	15	3	1	5.8	5.0	4.0
	5回以上	4	3	1	1.6	5.0	4.0
	不詳	17	2	1	6.6	3.3	4.0
	計	258	60	25	100.0	100.0	100.0
30~44	飲まない	138	26	4	50.9	40.6	43.8
	飲む						
	1~2	66	25	3	24.4	39.1	12.4
	3~4	25	8	14	9.2	12.5	13.3
	5回以上	31	2	10	11.4	3.1	9.5
	不詳	11	3	1	4.1	4.7	1.0
	計	271	64	105	100.0	100.0	100.0
45~59	飲まない	132	28	62	48.4	40.6	42.8
	飲む						
	1~2	52	17	22	19.0	24.6	15.2
	3~4	43	9	18	15.8	13.0	12.4
	5回以上	42	14	41	15.4	20.3	28.3
	不詳	4	1	2	1.5	1.4	1.4
	計	273	69	145	100.0	100.0	100.0
60歳以上	飲まない	100	23	8	58.1	65.7	32.0
	飲む						
	1~2	24	7	4	14.0	20.0	16.0
	3~4	17	1	5	9.9	2.9	16.0
	5回以上	30	3	8	17.4	8.6	32.0
	不詳	1	1	+	0.6	2.9	-
	計	172	35	24	100.0	100.0	100.0
不詳	飲まない	-	-	-	-	-	-
	飲む						
	1~2	-	-	-	-	-	-
	3~4	-	-	-	-	-	-
	5回以上	-	-	-	-	-	-
	不詳	-	-	-	-	-	-
	計	-	-	-	-	-	-
計	飲まない	499	109	128	51.2	47.8	42.7
	飲む						
	1~2	235	69	70	24.1	30.3	23.3
	3~4	100	21	38	10.3	9.2	12.7
	5回以上	107	22	60	11.0	9.6	20.0
	不詳	33	7	4	3.4	3.1	1.5
	計	974	228	300	100.0	100.0	100.0

表 4 4 (つづき)

(3) 日雇い労働者

年齢階級	飲酒状況	実 数			割 合 (%)		
		大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)	大都市	中都市(イ)	中都市(ロ)
		東京名古屋	山形金沢	広島長崎	東京名古屋	山形金沢	広島長崎
15~29	飲まない	5	2	-	26.3	50.0	-
	飲む						
	1~2	4	1	-	21.1	25.0	-
	3~4	3	1	-	15.8	25.0	-
	5回以上	7	-	-	36.8	-	-
不詳	-	-	-	-	-	-	
計		19	4	-	100.0	100.0	-
30~44	飲まない	36	12	9	40.0	30.8	47.4
	飲む						
	1~2	10	15	2	11.1	38.5	10.5
	3~4	17	10	3	18.9	25.6	15.8
	5回以上	26	1	5	28.9	2.6	26.3
不詳	1	1	-	1.1	2.6	-	
計		90	39	19	100.0	100.0	100.0
45~59	飲まない	43	13	19	49.4	31.4	46.3
	飲む						
	1~2	12	13	6	13.8	31.4	14.6
	3~4	13	8	4	14.9	19.3	9.8
	5回以上	12	3	10	13.8	7.2	24.4
不詳	7	4	2	8.0	9.7	4.9	
計		87	41	41	100.0	100.0	100.0
60歳以上	飲まない	12	5	21	42.9	35.7	52.5
	飲む						
	1~2	6	5	6	21.4	35.7	15.0
	3~4	-	1	4	-	7.1	10.0
	5回以上	8	1	9	28.6	7.1	22.5
不詳	2	2	-	7.1	14.3	-	
計		28	14	40	100.0	100.0	100.0
不詳	飲まない	-	-	-	-	-	-
	飲む						
	1~2	-	-	-	-	-	-
	3~4	-	-	-	-	-	-
	5回以上	-	-	-	-	-	-
不詳	-	-	-	-	-	-	
計		-	-	-	-	-	-
計	飲まない	96	32	49	42.9	32.7	49.0
	飲む						
	1~2	32	34	14	14.3	34.7	14.0
	3~4	33	20	11	14.7	20.4	11.0
	5回以上	53	5	24	23.7	5.1	24.0
不詳	10	7	2	4.5	7.1	2.0	
計		224	98	100	100.0	100.0	100.0

飲酒しない者の割合について見ると、製造業従業者が最も高く（約55%）、失業保険受給者がこれにつき（49%）、日雇い労働者が最低率（42%）となつているが、飲酒する者のみについて見ると、週1回ないし2回のものゝ割合は、反対に日雇い労働者において最も少なく、製造業従業者や失業保険受給者（前者は24%、後者は25%）の方が高くなつている。しかし、注目すべきことは週3回ないし4回飲酒するものゝ割合は日雇い労働者において最も高いことと、週5回以上、すなわち毎日飲んでいる者の割合では日雇い労働者が圧倒的に高く（19%）、製造業従業者では半分以下の8.5%、失業保険受給者でも13%にすぎない。地域別に飲酒状況を見ると、かなりの地域差が見られる。かたりの地域差が見られる。「飲まない」ものゝ割合は、大都市に最も高く56%、中都市(イ)一山形、金沢一では最低率の41%を示している。しかし、飲酒者の中で毎日飲んでいるとみられる週5回以上というものゝ割合は、中都市(ロ)一広島、長崎一において最高率（16%）を示している。

日雇い労働者においては「飲まない」ものが最低率を示し、「飲む」ものにおいては常習者の割合が著しく高いことを指摘したが、この点については年齢による飲酒の差別傾向率のあることが予想されるので、一応年齢別に検討する必要があるであろう。

まず、「飲まない」ものゝ年齢階級別割合を見ると次のごとくであつて、日雇い労働者においては15~29歳、30~44歳といった若い年齢層において「飲まない」ものゝ割合が著しく少なく、したがつて「飲む」ものが著しく多いことを示している。

表45. 職業形態別、年齢階級別飲酒しない者の分布 (%)

年齢階級	製造業従業者	失業保険受給者	日雇い労働者
15~29	65	50	30
30~44	41	48	38
45~59	41	46	44
60歳以上	45	57	46

年齢の上昇に伴って「飲まない」ものの割合が減少する傾向は、製造業従業者と失業保険受給者においては全く反対に「飲まない」ものの割合が高くなり、常識と反するような結果を示している。さらに、「飲む」もののうち、3回以上（5回以上を含む）の常習的飲酒傾向のあるものの割合（「飲む」ものに対する）を職業別、年齢階級別に見ると次のごとくである。

表 4 6 職業別、年齢階級別常習的飲酒者分布（%）

年齢階級	製造業従業者	失業保険受給者	日雇い労働者
15～29	23	16	69
30～44	45	39	68
45～59	54	63	53
60歳以上	68	64	52

酒の常用者の割合は、「飲まない」ものの割合で見た上述の年齢との相関をきわめて明確に示している。しかし、日雇い労働者層においては、「飲まない」ものについて見られたと同様に、ここでも、製造業従業者や失業保険受給者とは全く反対に酒の常用傾向のものは若い年齢層において高く、高い年齢において低下している。したがって日雇い労働者の飲酒者率の高いことは高年齢者が他の職業形態と比較して多いという年齢構成の差によるものではなくて、壮年以上の高年齢層に比較して若い年齢層において飲酒者が著しく多いことによるものである。45歳以上、特に60歳以上においては、製造業従業者や失業保険受給者の飲酒者率よりも19%ないし24%もかえって少なくなっている。

最後に、職業形態別に、年齢階級別、地域別の飲酒状況について若干述べておこう。製造業従業者について見ると、中都市(イ)―山形・金沢―に特徴が見られる。それは「飲まない」ものの割合が著しく低率であることと、「飲む」ものにおいては1～2回および3～4回のもの割合が著しく高

いことである。特に15～29歳といった若い年齢階級においてこの傾向は顕著である。30～44歳、45～59歳および60歳以上においても同様な傾向が見られる。

失業保険受給者においては、それほど顕著な傾向は見られないが、30～44歳および45～59歳の年齢階級において製造業従業者に見られた山形・金沢の傾向がここでも見られる程度である。しかし、15～29歳階級では、山形・金沢は、製造業従業者とは反対に「飲まない」もの的高率と1～2回飲むもの、の低率が見られる。

日雇い労働者を地域別、年齢階級別にクロスして観察するに足るだけの十分な対象数はないが、30～44、45～59歳の同年齢階層で「飲まない」もの、の低率と「飲む」もの、の中で1～2回および3～4回のもの、の割合が、山形、金沢において、ほぼ見られると推えそうである。

われわれの単純な質問事項によつても「飲酒」という食生活と密接な関係にある慣習が、職業により、地域により、あるいは年齢によつて複雑な構造を示していることが示された。特に留意を要する点を要約してみると次のごとくである。

第1点は、日雇い労働者階級全体における高い飲酒者の割合と青壮年層における飲酒傾向が著しく強いという点である。日雇いという生業と不可分に結びついた生活環境の一端を反映するものとも考えられるが、この階層の人々がより高い米食率を希望しながら、現実には皮肉にも酒によつて償われているような矛盾を表わしているように思われる。第2点は、山形、金沢といった寒冷地帯の都市の特殊性である。全体としては「飲まない」もの、の割合が低率であるにもかかわらず、「飲む」もの、においては1～2回のみならず、3～4回（いずれも週について）のもの、の割合が高く、かつ比較的若い年齢層において高いということである。

結 語

最後に本調査の分析結果に関連して若干の私見を加えて補足しておきたいと思う。まず、調査分析結果のうち特に注目すべき点を要約すると次のとおりである。

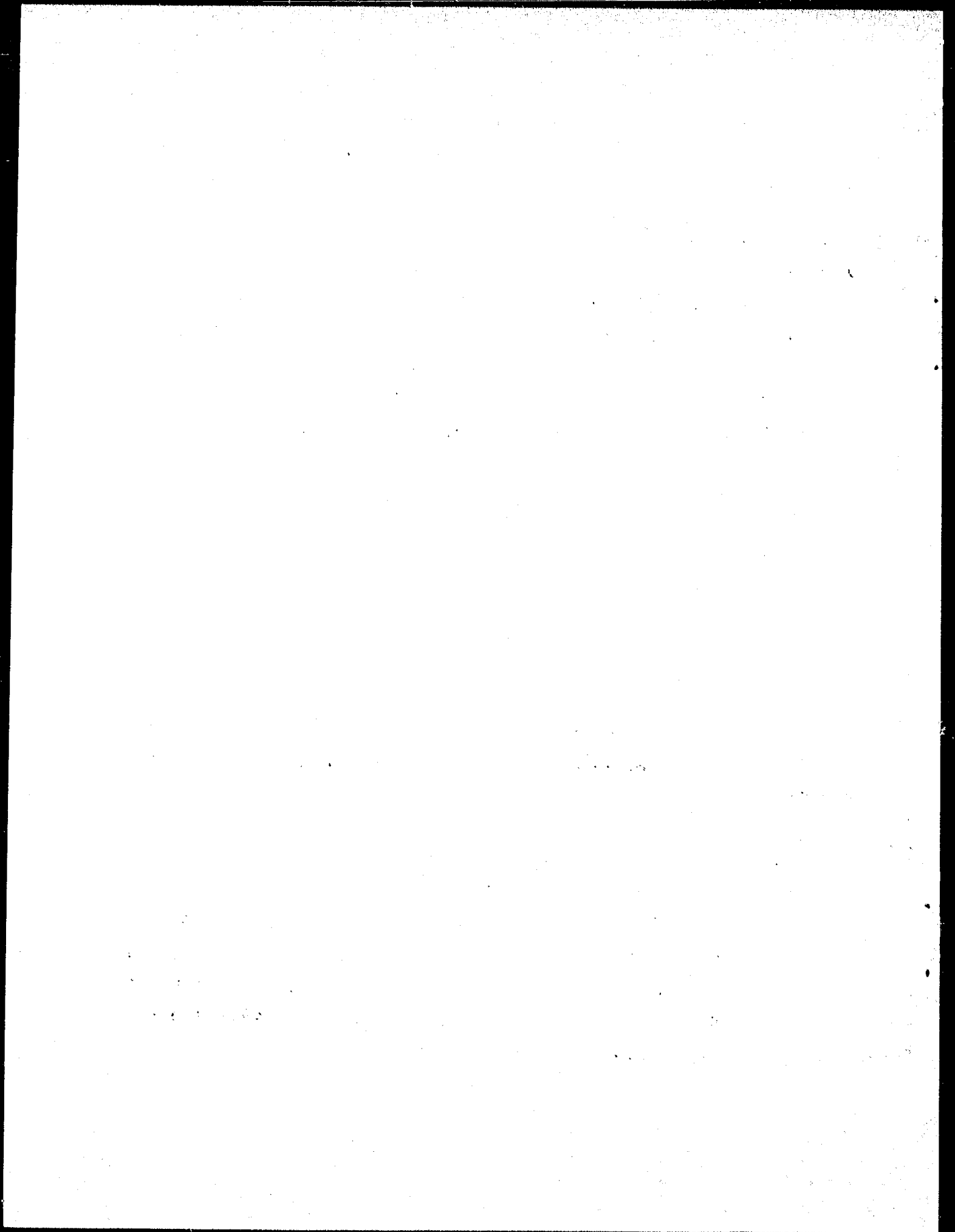
第1点は、米飯+みそ汁+つけ物という伝統的な基礎的な献立体系が強く支配的であるということである。ある程度の惣食傾向が見られるとしても、それはやはり伝統的な日本人の好みとして習慣づけられためん類を基礎としており、パンを中心とする洋風化の傾向は少なくとも低所得層に関する限りは、栄養上から見ると、むしろマイナスの影響を持つているように考えられるのである。

第2点は米食依存の傾向であるが、日雇い労働者という典型的な低所得層において強い潜在的需要を示している。しかし、その他の層では年齢階級別に見ても予想されるように、所得弾力性は低いものと考えられるのである。

このような分析から、日本人口の米の需要傾向を測定することは困難であるが、少なくとも需要盤が減少していくという確実な根拠はないように思われる。

第3点は栄養改善の動向についてである。日雇い労働者といった典型的な低所得層の食生活については、従来多少の調査研究があるが、ここでの分析で参考になるものは料理の種類である。一般の常識や予想に反して、かなり多様な料理種類がこの階層にも見ることができたことであり、このことは多少とも最近の消費水準上昇の影響によるものかまたは栄養的関心の高まりと思われるが、しかし、製造業従業者、失業保険受給者に比較して、料理種類に格段の差が見られることは大きな問題であるように思われたのである。

米食とみそ汁に強く依存し、不完全な外食率の高いことは、栄養的にも十分な留意を要するものと思われる。要するに、これらの階層に対する食習慣の改善ということは、単に画一的な、しかも技術的な指導に偏することなく、地域または集団のそれぞれの特有な社会的、文化的、経済的条件を十分に考慮したものでなければならぬと思われるのである。



付録 “オランダの家計調査における
栄養素間の相関に関する研究”
の紹介

は し が き

われわれの行なつた実態調査分析においては、家族の大きさを指標とする食習慣分析を行なうことはできなかつた。しかし、家族の規模が調理方法の種類や内要に関係のあることは十分予想されるところである。このような家族の規模を重要な分析の一つの視角として取り上げたオランダの研究は多少とも興味あり、参考にもなると考えここに紹介することとした。原文は *Journal of the Royal Statistical Society*, Vol. 124, Part 3, 1961 に掲載されたもので、論文名は *The Intercorrelations between the Nutrients consumed by a Group of Families in the Netherlands*, (by E. P. Drion) である。

本研究は、元来オランダの中央統計局が1951年に行なつた家計調査の資料を基礎とした分析であつて、オランダ人家族3,084世帯の食物消費を分析したものである。この家計調査では1951年の第1・4半期に購入したそれぞれの食物の量を家計簿に記録されたものであつて、家族当たりの量を、カロリーと13の主要栄養素に換算された。これらの量は男女別、年齢を考慮に入れて作製された1日当たり勧告基準量に対する割合として表わされている(この割合を著者は“換算消費率” reduced consumption と呼んでいる) さらに、換算消費率と家族規模との関係について分析が行なわれている。参考のため、序論と分析結果の大要について抄訳するにとどめる。

序 論

1951年にオランダ中央統計局は約4,000家族を対象とする家計調査を行なった。サンプルの選択については、層別サンプル抽出のために居住地、家族の規模、職業、所得にしたがってオランダ人口の層別が行なわれた。

この調査においては主婦が毎日家計簿にすべての支出を記入した。この制度のために、このような作業を行なうに十分な能力を持った主婦に限定されざるをえなかつた。

購入したものについては、すべて、その購入量と金額を家計簿の中で別個に記入されているので、一定期間に購入した総量を各項目ごとに計算することができた。

多数の家族が購入した種類、ならびに量についての詳細な資料が得られた結果、それでオランダ人口の栄養状態のはあくに十分利用することができる。この目的のために、食料品を廃棄係数を使用して“食用可能部分”に換算した後、栄養素の量に換算し、この栄養素の量を、栄養専門家の設定した基準と比較することが必要である。

他の資料によつて、調査時においてオランダ人口には重大な栄養不足のものは存在していなかつたことが示されている。しかし、望ましくない低摂取量の集団があるのではないかという疑問があつた。いろいろな分類によつてサンプルのグループを作るためには、それぞれの家族について食料品を栄養素に換算すのことが必要であつた。

費用の点を考慮して、1951年の第1・4半期に消費された食料の分析から始めることと決定した。冬の3か月間に消費された食糧が、オランダ人口の大部分にとつて、量・質において充分なものであることが証明されるならば、1年の残りの期間における食糧消費もまた満足すべきものであろうと期待されるであろう。この第1・4半期の分析において、ある集団の栄養上の諸欠陥が見いだされたけれども、1951年全年における食糧消費にまで研究を拡大することは、財政上の理由でできなかつた。しかし、第1・4半期の結果と全年との間の差を明らかにするために、全年の平均消費を、2人家族3個の職業階級および2個の所得階層についてのすべての家族の4分の1に

対して計算した。これらの計算によつて、第1・4半期における食糧消費は平均年消費よりも少ないという予想が確認された。年数値はおそらく高きに失するというのは、一時的に家族の中にいた人口についてはなんらの補正も行なうことができなかつたからである。

家計簿に報告された食糧の量は、購入量であつて、その他の方法で取得した食糧はこの家計簿では報告されていない。この調査期間に収集されたほかの data によつて、食糧総量の平均5%足らずは、家計購入以外の方法、たとえば菜園で栽培されたものやレストランでの消費などとなつている。唯一の例外はわずかの農業労働者の集団であつて(152家族)、購入によらない食糧の割合は約20%となつている。他方、食糧のごく一部分は貯蔵用具の中で消失している。しかし、ドイツ軍占領当時の飢餓の思い出がなお残つているために、この部分はわずかであると予想されるし、また、食物の浪費は非論理的であるといつた考えが強く残つている。

食糧消費の幅が、1日当たり基準量の35%から190%までという広範囲に及んでいることから考えて、上述の不正確性のために、結果に重大なバイアスをもたらすことはありえなかつた。

調査が企画されたとき、唯一の利用しうる設備はブル・パンチ・カード機であつた。予算の限度内において、14の栄養素のそれぞれについて1次元ひん度分析以上のことを準備することは不可能であつた。しかし、この制約のために、情報の主要な部分が失われ、そして結論は独立的なものでないことが認められた。この1次元分析の結果は Voedingraad (オランダ栄養審議会)によつて公表された(1957)。約1年前に、食物の量を栄養素の量への換算とひん度分布の準備のための計算を行なつた T. N. O. の統計局 (Centrale Organisatie voor Toegepast Natuurwetenschappelijk Onderzoek) はゼブラ ("Zebra") 原子計算機を購入した。これによつて、資料の細かい部分についてあらゆる栄養素の消費の相関マトリックスを計算し、主要因分析の方法によつてこのマトリックスを分析することができた。

2. 1次元分析結果の大要

中央統計局の家計調査は約4,000家族について開始された。この調査には単身世帯は含まれていない。種々の理由によつて、20%以上の家族が、かれら自身の事由のために途中で脱落したか、あるいは統計分析から除外されねばならなかつた。3,084家族のdataでもつて、かれらの食糧消費分析に対して十分な正確性を持つていると考えられた。

3,084家族のそれぞれについて1951年の第1・4半期におけるカロリー動物性たんぱく質、植物性たんぱく質、たんぱく質総量、脂肪、炭水化物、ミネラル、カルシウム、ビタミンA、カロチン、サイアミン(B1)、リボフラビン(B2)、ニコチン酸およびアスコルビン酸(C)などの消費量が計算された。

家族は、その大きさ、男女別、年齢別構成において異なつてゐるため、[※]家族の結果を比較可能なものとするためには、以上の差異に対して栄養素の量を標準化することが必要であつた。このことは、消費栄養素を、1日当たり勧告基準量にしたがつて、基準消費の百分比として表現することによつて行なわれた(第1表参照)。この百分比を“換算消費率” reduced consumption”と呼ぶこととする。この量に基づいて統計分析が行なわれた。

この基準消費の計算に際しては、次の要因が考慮に加えられた。

- (a) 家族員の年齢、性別
- (b) 各家族員がこの4半期中において食物を消費した総日数
- (c) 家長の仕事の型、他の家族員の仕事の型は不明

1日当たり勧告基準量が生物学的必要度にほぼ近いものであるとするならば、適切な食糧摂取状態にある家族は、栄養素のそれぞれについて100の“換算消費率”を示すであろうし、すべての栄養素について100の“換算消費率”を持つてゐる家族は、定義によつて食糧摂取状態は適切であることになる。このよりの推理においては、生物学的な変差は無視されることは明らかであろう。若干の栄養素について90の“換算消費率”を示している家族

※ “栄養素”の用語については、面倒さを避けるため、ここでは“カロリー”を含めたものとして使用される。

でも、それらの栄養素については過剰であることもあり、また、それらの栄養素について110の“換算消費率”を示している家族で、栄養不足状態にあるということもある。さらに、ある栄養素については1日当たり基準量よりも多くを必要とし、同時に他の栄養素については、基準量よりも少なくてもよいという多くの人口があることも考えられる。それぞれの栄養素の消費のひん度分布は、単に不適切な食物摂取状態にある家族の数の一つの指標となりうるのである。ただ、綿密な健康診断によつてのみ、適切な栄養摂取状態にあるか否かを確認することができるのである。しかし、調査の目的が純粋に家計に関するものであつたから、なんらの健康診断も行われなかつた。したがつて、食物消費分析のある結果の解釈は、むしろ困難である。それにもかかわらず、細部集団（所得、職業、家族規模）の結果比較は貴重な資料となつた。

表1では、脂肪と炭水化物との間の非たんぱくエネルギー生産食物分布と同じく、動物性たんぱく質と植物性たんぱく質の間の総プロテインの分布に対する勧告が示されている。いずれの勧告も平均食物選択と一致していないことが統計的分析からわかる。プロテインについては植物プロテインへの移行が見られ、その他のエネルギー生産食物については脂肪への移行が見られた（表2 aおよび表2 b参照）。

食物事情の一般的観察を可能ならしめるために、14の栄養素のそれぞれについて3,084家族全部の累積度数分布を作成した。これらのすべては同じ形、すなわち右にわずかに傾いたほとんど正規曲線を示している。14の曲線の中央値は、基準量以下17%（ビタミンD）と基準量を越える25%（脂肪）との間に位置している。カロリーおよびプロテイン総計の中央値は、それぞれ基準量以下2%および3%である（表2 aの最後の欄）。以上の諸結果は、1951年のオランダ人口全体がかなり良好な栄養摂取状態にあつたことを確認するものである。より顕著な事実は、“換算消費率”の分散が基準量の約80%以下から90%以上に及ぶ広範囲にあることである。非常に高い消費と非常に低い消費を持つ家族の間のこれらの大きな開きは、細部集団の消費水準の格差によつて引き起こされたのである。以上の可能性の間の差別を明らかにするために、所得別（a）および家族規模別（b）に集

表 1 1日当たり勧告栄養素基準量
(Voedingsraad, 1957, Appendix 3)

グループ	熱量 cal.		たんぱく質 g.			脂肪 g.		炭水化物 g.	
	男	女	植物性	動物性	総計	男	女	男	女
青少年：									
1歳未満	900	900	10	25	35	30		115	
1～3歳	1,200	1,200	15	25	40	40		160	
4～6歳	1,600	1,600	20	30	50	50		230	
7～9歳	2,000	2,000	25	35	60	60		300	
10～12歳	2,500	2,500	30	45	75	75		365	
13～15歳	3,200	2,600	35	50	85	100	80	475	375
16～19歳	3,800	2,400	35	55	90	125	75	560	330
成人：									
A. 20～59歳									
軽労働	2,800	2,200	35	35	70	75	60	445	340
中労働	3,200	2,600	35	35	70	100	70	495	410
強労働	3,900	3,200	50	40	90	125	90	585	490
激労働	4,600		60	50	110	150		670	
B. 60歳以上	2,400	1,800	35	35	70	60	50	380	260
C. 妊産婦		3,000	40	60	100	90		435	

注： 1. カロリー計算にあつては、1g当たりにつき、たんぱく質
= 4.1カロリー、含水炭素 = 4.1カロリー、脂肪 = 9.3カロリ
ーとして算出した。

2. 産婦に対する追加食糧を含む。

表1 1日当たり勧告栄養素基準量(つづき)

グループ	Ca g.	Fe mg.	ビタミンA		シアミン mg.	リボフラビン mg.	ニコチン酸 mg.	アスコルビ酸 mg.
			灰分 IU.	カロチン Kg.				
青少年：								
1歳未満	0.8	5	500	600	0.4	0.6	4	30
1～3歳	0.8	7	700	800	0.6	0.9	6	35
4～6歳	0.8	8	1,000	1,100	0.8	1.2	8	50
7～9歳	0.8	10	1,200	1,500	1.0	1.5	10	60
10～12歳	1.2	12	1,500	1,800	1.2	1.8	12	75
13～15歳	1.2	15	1,500	2,400	1.5	2.0	15	75
16～19歳	1.2	15	1,500	2,400	1.5	2.0	15	75
成人：								
A. 20～59歳								
軽労働	1.0	12	1,500	2,400	1.2	1.6	12	50
中労働	1.0	12	1,500	2,400	1.2	1.8	15	50
強労働	1.0	12	1,500	2,400	1.5	1.8	18	50
激労働	1.0	12	1,500	2,400	2.0	1.8	18	50
B. 60歳以上	1.0	10	1,500	1,800	1.5	3.0	15	100
C. 妊産婦	2.0	15	2,000	3,000	1.5	3.0	15	100

表 2 a " 換算消費率" の基準量との偏差の中央値

栄 養 素	家 族 規 模						総 数
	2	3	4	5	6	7 ≤	
Calories	3	- 1	- 3	- 5	- 8	-10	- 3
Vegetable protein	10	13	13	15	14	19	13
Animal protein	2	- 7	-16	-22	-27	-38	-16
Total protein	7	3	- 2	- 5	- 8	-12	- 2
Fat	47	33	25	17	14	7	25
Carbohydrate	-13	-13	-13	-13	-15	-13	-14
Calcium	- 3	- 4	- 9	-12	-16	-25	-10
Iron	31	18	11	10	9	8	15
Vitamin A	17	19	13	6	4	- 3	11
Carotene	-16	-17	-25	-26	-33	-40	-15
Thiamine (B1)	6	0	- 5	- 6	- 9	-11	- 3
Riboflavin (B2)	- 1	- 1	- 4	- 6	-11	-18	- 6
Nicotinic acid	10	5	- 1	- 1	- 5	- 2	2
Ascorbic acid	14	1	-18	-27	-38	-43	-17
家 族 数	642	655	751	438	277	321	3084

表 2 b “ 換算消費率 ” の基準量との偏差の平均

栄 養 素	家 族 規 模						総数
	2	3	4	5	6	7 ≤	
Calories	5.2	0.3	- 2.5	- 4.0	- 6.7	- 9.2	- 1.6
Vegetable protein	13.6	15.1	14.8	17.0	15.6	18.5	15.4
Animal protein	5.4	- 4.5	-15.0	-19.7	-26.2	-35.3	-12.3
Total protein	9.7	4.9	- 1.2	- 3.0	- 7.8	-12.4	0.3
Fat	46.1	33.0	26.1	19.4	14.4	7.8	27.8
Carbohydrate	-10.9	-12.1	-12.7	-12.0	-14.5	-14.0	-12.4
Calcium	1.0	- 2.9	- 8.0	-10.0	-15.2	-23.2	- 7.5
Iron	32.8	21.8	13.4	12.4	10.9	8.7	18.4
Vitamin A	17.8	17.8	14.7	9.4	5.6	- 1.0	12.8
Carotene	- 9.3	-13.1	-19.8	-20.6	-29.5	-33.5	-18.6
Thiamine (B)	8.1	2.9	- 3.8	- 3.9	- 7.7	-10.0	- 0.9
Riboflavin (B)	1.4	1.2	- 4.6	- 5.3	- 9.5	-17.5	- 4.0
Nicotinic acid	14.8	9.6	3.1	3.6	0.9	1.3	6.6
Ascorbic acid	17.7	4.0	-14.0	-23.2	-33.1	-39.6	- 9.3
家 族 数	642	655	751	438	277	321	3084

表3 "換算消費率"の消費標準偏差

栄 養 素	家 族 規 模						総数
	2	3	4	5	6	7 ≤	
Calories	22	19	17	16	16	15	18
Vegotable protein	26	25	22	24	23	25	24
Animal protein	31	27	24	23	19	20	25
Total protein	24	22	19	18	15	15	20
Fat	29	27	26	24	22	24	26
Carbohydrate	22	20	17	16	15	14	18
Calcium	31	26	24	24	21	20	25
Iron	31	29	24	25	25	23	27
Vitamin A	33	28	27	25	24	24	28
Carotene	45	42	41	42	37	37	42
Thiamine (B)	26	25	20	20	20	18	22
Riboflavin (B)	28	25	24	23	21	19	24
Nicotinic acid	32	31	27	29	30	28	29
Ascorbic acid	42	38	32	28	28	24	34
家 族 数	642	655	751	438	277	321	3,084

計した上で、あらゆるひん度分布を算定した。その結果、消費に及ぼす所得の影響は大きくはないが、家族規模の影響の著しく大であることが判明した（表2a、2bおよび表3参照）。同じ家族規模集団の内部においては所得の影響は軽微なものにすぎなかつたので、家族規模の顕著な影響について別の説明を見いだす努力が必要であつた。

カロリーについてはこの影響はわずかなものであり、それで大家族において不足しているのは、食物の量よりもむしろ質であることが以上の諸表から明らかである。他方において、動物性プロテインおよびビタミンCの消費は大家族において著しく高い不足を示している。これらの栄養素に対する子どもの基準量は、カロリーに対する基準量に比較して高い。したがつて、一般に、栄養学者によつて作成された年齢別の献立における質的差異は、一般人口によつて作り出されるものでないように思われる。この仮説を検討するために、“修正換算消費率”が算定されたのであつて、これはカロリーの基準量は変わらないが、すべての年齢の子どもについては、カロリー当たりの1栄養素の基準量は同じであつて、中労作のおとなの男子のカロリー当たり基準量に等しいと仮定されている。表4によつて、一般にこの“修正換算消費率”は“換算消費率”自体ほど家族規模の影響を受けないことが（唯一の重要な例外はカロチンである）見られるであろう。さらに、2人ないし6人の家族規模については、5%以上の不足を示している唯一の栄養素は動物たんぱく、炭水化物、カロチン、ニコチン酸（家族規模6人のものだけが5.4%の不足を示している）およびアスコロビン酸である。動物たんぱくの不足は植物たんぱくのかなりの消費によつて著しく償われており、2人ないし6人の家族においては、たんぱく全体の“修正換算消費率”を100%以上に確保している。脂肪の過剰に結びついた炭水化物の不足は、オランダ人口は献立基準量による健康的なものより脂肪の多いメニューを選択していることを示している。カロチンやアスコロビン酸について見られる低い値は、おそらく冬季における野菜やくだもの比較的高いことによるものであろう。ただ7人以上の大家族においては、幾多の栄養素の“修正換算消費率”は95%以下である。おそらくこれらの大家族においては、満足すべき献立はあまりにも高価であるということが多いのであろう。

表4 "修正換算消費率"の中央値

栄 養 素	家 族 規 模							
	2	3	4	5	6	7	8	9 ≤
Vegetable protein	110	112	111	113	111	116	119	113
Animal protein	102	98	95	91	88	80	76	73
Total protein	107	105	104	103	100	98	99	96
Fat	147	135	129	122	120	116	113	107
Carbohydrate	87	86	85	84	81	84	84	82
Calcium	97	100	100	99	96	90	86	85
Iron	131	121	118	119	119	121	123	120
Vitamin A	117	120	116	110	109	103	100	96
Caroteno	84	81	72	71	63	62	56	47
Thiamine (B)	106	102	99	100	98	98	98	96
Riboflavin	99	101	101	101	96	94	87	85
Nicotinic acid	110	105	99	99	94	99	94	97
Ascorbic acid	114	109	96	91	80	80	74	74
Calories	定 義 に よ つ て 不 変							

注： 修正換算消費率は定義によつて"修正基準量"に対する百分比として表わされた消費である。この修正基準量は、年齢および男女について、中労作のおとなの男子に対する基準量に比例する。この比例の要因はカロリーの基準量である。

ここでの分析の結論は、規模を異にした家族集団の間の“換算消費率”における開きの重要な部分はおそらく、それぞれの年齢に対する食物必要量において質的に異なっていない人口によつてもたらされたものであること、しかし、大家族における食物の高いコストといつた他の影響も、また以上の開差に貢献したであろうということである。この結果は、全国食糧調査委員会の1957年報告書に示された次のような結論ともよく一致している。“プロテインやカルシウムに対する基準量との関係において、子どもを持つ家族の立場はエネルギー価に対しては不利であつた。というのは、かれらの献立は、カロリー当たりより多くのプロテインとカルシウムを摂取できるように十分に修正されていなかつたからである。”（農林省、1959）。

不足の原因が何であるにせよ、家族規模別に細分して、より高度の分析、特に相関関係数の算定が行なわれねばならないことは明らかである。

このような細分集計に対する第2の理由は、家族当たり“換算消費率”は一種の平均、すなわち基準量による消費によつて除した家族当たり総消費であるということである。基準量による消費は、おとなの男子で構成された“家族”における家族規模に比例するであろう。大部分の家族においては、基準量による消費は厳密には家族規模に比例してはいないけれども、一般に家族が大きいほどそれも大となるであろう。そこで家族のそれぞれ異なつた成員が、なんらの相関をも示さないとするならば、“換算消費率”の分散と標準偏差は、家族規模が大きいほど小さくなるであろう。表3は家族規模のこのような影響を明らかに示している。

さらに著者は詳細な統計学的分析を行なつているが、ここでは省略し、ただ著者の結論を追記するにとどめておこう。それは、“家族規模の影響が、所得、職業あるいは地理的分布よりもはるかに重要である”ということ。したがつて、この仮定が正しいとするならば、人口に対する教育のよりいつその向上が、オランダの栄養改善の正しい道である”（p. 335）という点にある。